

夕暮空の色

夏樹夕

空色惑星

<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

○ も く じ ○

ヴァイス	005
駆け落ち	017
おさななじみ	055
天使の卵	073
弁当	085
私の魔法	091
金魚	129
スノーホワイト	137
魔女の鍵	183
指輪	233
月夜の晩に	241
ヴァンパイア	251
美味しい食べ物	265
美味なる想い	279
作品紹介	300

ヴァイス

いつものように人に道を尋ねている時だった。

「ヴァイス！」

女の悲鳴に近い声が聞こえた。見ると通りの向こうにいる派手な女が、信じられないといった様子でこちらを見ている。こちら側にヴァイスとやらがいるのだろう。私は何となく興味を覚え、辺りをきよるきよる見渡した。

けれど、顔も知らない人物など私にわかるわけもなく、少々失望し、もう一度その派手な女を見た。その時気付いたのだが、女の視線は私に注がれている。私はなぜか不安を覚え、女の視線から逃れるようにその場から駆け出した。

女の、悲鳴に近いヴァイスを呼ぶ声が遠ざかっていった。

+

「はあ……」

何となくため息が出る。

「残り半年か」

手にもったイチゴとチョコミントとバニラのトリプルアイスを一口かじる。

「何て不幸な人生を歩んでいるのかしら、私って、昔から不幸な女なのよ」

真赤なルージュに大きなウエーブのかかったオレンジと、白と黄色を大雑把に混ぜたような髪。真っ白なマントに、真っ赤なレースの付いたミニのボディコンスーツ、ガー

7 夕暮空の色

ター付きの真つ黒なストッキング（金糸の刺繍入り）をはき、十センチはあるかというピンヒール。それに負けない、プラチナ、ゴールド、サファイヤ、真珠、ムーンストーンにクリスタルの装飾品。

一見、いやどう見たつて不幸そうには見えない女は愚痴をこぼしつつける。

「何で私がこんな不幸な目にあわなけりやならないのかしら！ それもこれもみんなあのガキが悪いつて言うのに！」

ふと目を上げると、通りの向こうに見知った顔が一つ。

「……ヴァイス？」

手にもつていたアイスが道に落ちたのにも気付かず、

「ヴァイス！！」

大声で叫ぶ。

ヴァイスはきよろきよるとあたりを見回す。

なんてしらじらしい、あのクソガキが！ 絶対に捕まえてやるっ！！

決意も新たにヴァイスを追おうとしたが、ヴァイスは人ごみにまぎれ、どこかへいつてしまった。

「ヴァイス！ どこなの？ ヴァイス！！」

いくら探しても見つからない。彼女は肩を落とし、手に残ったコーンだけのアイスを捨てた。

+

気が付くと町のはずれにいた。ここまでくれば大丈夫だと辺りを見回す。あの派手な女は追ってこない。

肩で息をしながら、大木の根元へ寝転がった。

木陰でずいぶん涼しい。

いつしか私は寝入っていた。

+

怪しく輝く魔法陣の周りに、真つ黒な儀式用の衣服に身を包んだ十二人の女性ばかりの魔法使いたちが、なにやら呪文を唱えながらたたずんでいる。

魔法陣の真中にいるのは、同じような格好をした十二・三歳の少年のような格好をした少女。

「儀式を行う」

魔法使い達から、少し離れた場所にいる人物の重々しい声が響く。その人物のいる場所は暗く、姿ははっきりと見えない。

少女は決意を秘めた瞳で、先ほどの声の主——彼女の父親にうなずく。

父親は少し間を置いてから、娘に頷き返し、魔法使いたちに声を掛ける。

9 夕暮空の色

「準備は整った。失敗は許されない」

その声に魔法使い達は誰一人、何の反応も見せず、先ほどとは少し異なる呪文を唱え始める。

「神よ……」

父親は天を仰ぎ静かに祈りの言葉を唱えはじめる。

「どうか、この国をお救いください……」

魔法使いの唱える呪文はやがて力を発揮し始め、少女のいる魔法陣は異様な気配を増していく……。

十

「ああ、どうしよう」

やつと見つけたヴァイスを逃した女は、小一時間ほどウインドウショッピングを満喫したあと、そう呟いた。

「私は死ぬの？ 殺されるの？」

旅立つてから、何百回目かのセリフをこす。こぼしつつも、しつかりと屋台で買い食いしている辺りにリアリティーは無い。彼女の傍を通り過ぎるものはその言葉に一瞬、ぎよつとして振り向くが、彼女の姿を上げ上げと眺め、何事もなかったかのように通り過ぎていく。

「ああ、父上に報告して、また怒られなきゃならないのよ……」
ため息交じりに独り言を吐きつつ女は歩いていく。

+

「くしゅん」

私は起き上がって伸びをした。

日が翳り、先ほどまでの気持ちの良かった木陰も、今では肌寒く感じる。

しばらくは動きもせず、ぼうつと焦点の合わない目で街道筋を行き交う人々を眺める。

彼らが羨ましい。どこからきて、どこにゆくのか、そんなことなど考えるまでも無く知っているのだから。私はそれを知らない。

私は私を知る人を探すため、ふらふらと旅をしている。

自分がどこの誰なのかさえ知らない。わかっているのは真っ黒な服を着て、草原に立っていた日からのこと……。

あれから三年の月日が流れている。

+

11 夕暮空の色

儀式も後半に差し掛かってきた。

父親は不安げに儀式を見守っている。この儀式が成功しなければこの国に未来は無い。

この国は魔法によつて繁栄してきた弱小国である。

現代はもう、魔法などは必要とはされていない。近隣の三つの大国は全て近代科学文明によつて繁栄し、あらゆる方面で機械が活躍している。魔法などという個人の力——強弱があり、日や、気分によつて異なる力など今はもう、古いのだ。

そのため、この国では娘を近隣諸国の有力者のもとに嫁がせ、息子を王にすることでの国の平安を保つてきていた。王族の姫君は近親婚色が強いためか、優れた魔法の使い手が多い。機械化の進んだ国の有力者達は、その不思議な力を持つ姫君をこぞつて妻に迎えたがった。

現国王であるパリス王は十三人の子をなした。すべて娘である。パリス王には国を継ぐべき男児が誕生しなかったのだ。近隣の国から婿を取ることになれば、いかに小国とはいえ国を巡つての権力争いが起こるだろう。そうなった時、機械化の進んでいないこの国は、この国の人々はどうなってしまうだろう。

十三番目の王女が十三歳になったとき、秘術を用い、男子として育ててきた彼女をを本物の男子に変える大掛かりな魔法の儀式を行うことにした。

後、ほんの少しで儀式は終わる。そのとき、

「はつくしゅん」

その場の空気が凍りつく。

十三番目の王女の姿は魔法陣の中にない。その場に居合わせた人々との視線は、ゆつくりとくしやみをした女、十二番目の王女へと注がれた。

日が暮れた。

女は宿屋に部屋を取り、中から鍵をかけると魔法陣の描かれた布を広げ、呪文を唱え始めた。女の声に反応するかのように魔法陣は徐々に怪しく光を発し始める。

光の中に、パリス王の姿が浮かび上がる。

「父上、お変わりないようで」

「……ヴァイスはまだ見つからんのか？」

王は大げさに落胆してみせる。女は慌てて、

「いいえ、今日はすんでの所で逃げられました」

「ほう、それはそれは」

片手を顎にあて、頬髭をなでる。その仕草は、いらついているときの癖。

女は嫌な汗をかきつつ、言い訳がましく言葉を続ける。

「これはヴァイスに近づいた何よりの証拠。近々ヴァイスを連れ戻せるでしょう」

13 夕暮空の色

「連れ戻さねばわが国も、そして、お前も明日は無い」

「十分承知しております」

王の姿は徐々に薄くなり始める。このような相互に魔法力を使い、連絡をとる方法では一分ほどしか話せない。十二番目の王女である彼女は、姉妹の中でも一番魔力が低かった。

「定期連絡を怠るな」

王の姿はそれだけ口にする、消えた。

女はじつと光の消えた魔方陣を見つめていたが、

「ヴァイスの魔法力が強すぎるから、私には見つけれられないのよ！」と、怒鳴った。

あの儀式の日、失敗する原因となった女は王から『ヴァイスを連れ戻るまで、城内から追放する』という命を下された。従者も護衛もなしに、である。表立つての捜索活動は出来ないからと、女一人にヴァイス探索が任されたのである。女の姉達は何事も無かったかのように、今では皆、決まっていた嫁ぎ先に嫁いでしまっている。

この国の命運を握る『ヴァイス』を見つけるのに、魔法力の一 weakest 自分以外、頼れるものはない。

十

私は野宿の支度を始めた。

薪木となる枝を呼び寄せ、燃え上がるように命じる。

果物や魚を渦中に出現させ、程よいころを見計らって、皿の上に呼び寄せる。

ある人とともに野宿をした際、これをして驚きの声をあげられた。その人によればこの力を普通の人は持つていないらしい。私としては旅に重宝するとはいえ、この力よりも記憶のほうがはるかに重要だと思うのだが、その人は大変羨ましがっていた。腹もくちくなくなつたので、炎に消えないよう命じておいて、弱い風の防御壁を張る。雨も風も防いでくれるテントのようなものだ。私はまどろみへと落ちてゆく。

十

女は食事を済ませると、また部屋へ閉じこもり、水晶玉に向かい呪文を唱えた。中心に不思議なきらめきを見せ始めた水晶玉に向かい、

「さあ、水晶玉。私にヴァイスの居所を教えなさい」

しばらく待つが、水晶球には何の変化のきざしも表れない。女は落胆し、

「魔法力の高いヤツの居所なんて、魔法力の低い私にはわかんないのよ……」

愚痴をこぼす。

「ああ、どうしてヴァイスは私よりも魔法力が高いのかしら……高い、そうよ！ ヴァイ

15 夕暮空の色

スは魔法力が高いんだもの、記憶がなくなつたつて魔法が使えるかもしれないわ」

女は顔を輝かせ呪文を唱えはじめる。先ほどとは違う呪文。

「この辺りで魔法を使った者がいる場所を教えなさい」

今度は水晶玉の表面に大きな曇りが現れる。

「やったわ、これよ！ きつとこれだわ」

女は勝ち誇つたように叫んだ。

+

肌寒さで目が覚める。薪木の炎は消えかかり、空にはうつつすらと光が射し始めている。

私は空がぼうつと色づいてゆくのを見つめていたが、やおら立ち上がり、歩き始めた。

あてのない、私の記憶を探す旅はいつまで続くのだろうか。

+

「ちよつとお嬢さん、起きとくれ」

困った顔をした老人が女の眠りを妨げた。辺りはずいぶん明るい。

「……………」

寝ぼけまなこの女の言葉に老人は呆れた顔をし、

「ここは私の家だよ、あんたどこから入ってきたんだい？」

「私の……家？」

つぶやいて思い出す。

昨日の深夜、大騒ぎをしたため、宿を追い出され野宿をする羽目に陥ってしまった。野宿などしたことのない女はどうしようかと迷い、とりあえず、目に止まった家の鍵を魔法でこじ開け、誰もいないベットへと転がり込んだのだ。

夜は寝るものと考えている彼女にとってこれはある意味当然の選択だった。そこまでする思い出すと、女は突然大声を上げ、

「ヴァイスを捕まえないと！」

がばりとはね起きて駆け出す。

後に残された老人は、啞然と女の後姿を見送った。

駆け落ち

不安だった。

いくら呼んでも誰も来てくれない。出ようにも、私にはそこは深すぎて出られない。不安で、不安で……

「おねえちゃん」

何度も一緒に遊んでいた姉を呼ぶ。

私の頭より高い場所にある出口。

もうちよつとで、あとちよつとで出られそうなのに……

「おねえちゃん……」

私は座り込み、泣き出した。不安で、不安で……。

「リエちゃん、大丈夫？」

男の子の声。

人見知りな私だったが、そのときは違った。太陽が真上にあるため彼の顔は陰になり、見えなかったが、何となく安心した。

助けにきてくれたことが無性に嬉しかった。

—— オツキロ、ネボスケ

—— アッサ、アッサ、アサダゾー

六時だ。

19 夕暮空の色

私は手をのぼし、枕もとの目覚ましを止める。誕生祝いにもらった、九官鳥の形をした目覚し時計。

起き上がり、ぼうつとした頭でさつきまで見ていた夢のことを考える。

久々にみる夢だった。小さな頃、土管置き場で遊んでいた私は誤って、縦に置かれたその一つの中に落ちてしまった。土管は私よりも高いけれど、何とか指先を淵にかけることが出来る。だけれど、その中から出ることが出来ず、私は不安で泣いていた。そのとき、私を助けてくれた男の子がいた。私は安心感から泣きつづけた。だから、男の子の顔を見ていない。

彼は私を背負って家まで送ってくれ、泥だらけ、擦り傷だらけの私は家であつぷり叱られた。あそこで遊んじやいけない、と。私は二度と姉の後について遊ぼうとはしなかった。いつの間にか、その男の子はいなくなつてしまった。

私はその時の夢を今でも時々見る。不安なときに。

第一章：九月十九日

相田 沙代子 — Sayoko Aida —

ほら、クラスに一人くらいはいたじゃない。何考えてるかわからない、変な人。

私が高校三年のときのクラスにも一人いた。一人だけいつまでたつてもクラスに馴染

めていないって感じで、いつも独りぼっちでいることを気にもしていなかった。

一人で本を読んで、一人で昼食食べて、一人で……いつも一人で……。

でも、それを気にしてない。苦にもしてない。一人なのに、なんだか楽しそうに、幸福そうにしている。北沢里枝はそういう人間だった。

駅前のファミレスに友人のアキと一緒に入ったとき、窓際に座ってた空色のワンピースの女性が彼女だと気づいた。数年ぶりなのに、高校の頃とあまり変わってない。

私はシフォンケーキとドリンクバーを頼み、一方的にしゃべる友人の橘亜紀子——アキに相槌を打ちつつ、何となく彼女を見てた。高校の頃と同じように、彼女のことを目の端で観察してた。

彼女はたぶん、待ち合わせをしてるんだろう。目の前にはコーヒークップが一つ。文庫の小説を広げて、熱心に読んでいる。

彼女はふいにバックから携帯を取り出し、耳に当てる。最初は不機嫌そうに話していただけだったのに、

「いい加減にしてよ！ 結婚式まで後五日なのよ！」

窓が震えるほどの大声。

店内にいる全ての人が彼女に顔を向ける。彼女は居ずらそうに声を潜める。

「あれ、北沢……さんだよね？」

アキの声に、私は彼女から視線を戻し、いつの間にか運ばれて来ていた、目の前のシ

フォンケーキを見る。

「サヨコ、聞いてる？」

「うん」

私は返事をし、白いメレンゲの上から、指でミントの葉を取り上げ、口の中に入れる。……ミント独特の爽やかな青みが口の中に広がる。

「結婚式、つて言ってたよね？」

アキは私に話し掛ける。

「北沢さん、結婚するのかなあ？」

パッションフルーツのパフェをかき混ぜながらアキは目を輝かせる。

「あの北沢さんが結婚するんだあ♪」

勝手に決め付け、携帯を取り出し電話をし始める。昔からこういう性格だった。私は目の前のフォンケーキを食べながら、何となく、北沢さんを見た。

北沢 里枝 — Rie Kitazawa —

ふざけるのもいい加減にしてほしい。姉の麻里は昔からの一気、いい加減で、自分本意な——ようするに我侷な人間だった。

大学を中退し、十九歳で駆け落ちの末、出来ちゃった結婚などやってくれた日に

は、両親の怒りは頂点に達したのだが、孫が生まれれば現金なもので、「俺の目の黒いうちは、お前のような馬鹿娘、絶対に家の敷居をまたがせん！」なんて激昂してた両親は、良いお爺ちゃん、お婆ちゃんに成り下がっていた。

馬鹿な子ほど可愛いというが、二人とも、昔から姉に甘いのだ。

姉が結婚して四年。姉は子供の面倒を見てもらうためと、ぐーたら過ごすために実家にいりびたっていた。

お酒をぐいぐい飲みながらぼけーっとTVを見ていた姉は、どこぞのCMを見ていて、ふと、

「ウエディングドレス姿を父さんにも母さんにも見せてあげてないのが、とつても残念だわ……」

らしくない台詞を口にした。もちろん、私から見ればそれはお酒が入っていたからだとしか思えなかったのだが、両親にしてみれば違ったらしい。

親不孝娘だと思っていた娘が、心の底で親孝行できないことを悔やんでいると受け取ったらしく、両親の手によつてとんとん拍子に式の日取りは決まっていた。

姉は、最初は嬉しげに参加していたのだけれど、途中からだるそうな様子を見せ始め、なにかと理由をつけて結婚式の準備から逃げた。

途中から「リエはサイズ一緒だし、おかしな感性してないし」なんて理由で、姉の結婚式のはずなのに、まるで私が花嫁のように、結婚式の準備に駆り立てられていた。

「ちよつと話があるんだけど」

姉が電話してきたのは、結婚式まで後五日を数える日の昼も過ぎた頃だった。

「今から駅前のファミレスに出てこられる？」

他人の都合なんて全く気にしない人が、そんなふうに見かねてきた時点で私も気づくべきだった。

だけど、姉も結婚するんだから性根を入れ替えたはずだと思っていたので、指定された場所へのこのこ出かけていった。

ファミレスについて三十分待ったが、姉は来なかった。その時点でも気づくべきだった。姉は何も変わっていない、相変わらずだということに。

いい加減腹立たしくなってきた頃、携帯が鳴り出し、私は慌てて電話に出る。

「あ、リエ？」

のー天気な姉の声。

私を待たせておいて……。

「あのさ、悪いけど……父さんと母さんに結婚式の話は無しって言っといてくれる？」

一瞬、何を言っているのか理解できなかった。

「待つて、それどういふこと？」

「……駆け落ちしちゃった☆」

かわいい子ぶった声。

言葉が出なかった。

「あのね、春史っていうんだけどね、めっちゃカッコ良くて、私のこと大事にしてくれるのよお」

のろけはいらない。

けれども受話器からはハルフミだとかいう人ののろけ話が続いていた。

「いい加減にしてよ！ 結婚式まで後五日なのよ！」

思わず声が大きくなる。

周囲の人々がギョツとした顔でこちらを振り向く。私は声を落とした。

「わかつてると思うけど、お姉ちゃんの結婚式、お父さんが知り合いの人に頼んで無理矢理組み上げてんのよ！ いまさらやめるなんて出来るわけないでしょ！」

「いや、だって……勝手に結婚式組んだんでしょ？ 私は悪くないわ。とにかく、私は春史と暮らすから」

ガチャリと電話は切れた。

……やめるなんて出来るわけがない。父が知り合いの結婚式場の人に無理矢理頼み込んで予定を入れてもらったのだ。しかも、喜び勇んだ父と母は商店街中に話をして廻っている。いまさら、やめるわけにはいかない。

父と母に何と伝えるべきか……。思い悩んだ挙句、私は率直に伝えた。父は顔色

をなくし、母は倒れた。

第二章：九月二十日

田村 靖久 — Yasuhisa Tamura —

悠斗とは兄弟同然に育つた。共働きの両親を持つ、一人っ子の悠斗は、いつでも僕のうちに入り浸っていた。三歳年上の姉と、一歳年上の兄。そして僕。家の中はいつでも騒がしかった。だから、そこに悠斗一人くらい増えても何も問題はなかった。

小さな頃は、昼は喫茶店を営んでいる母が作り置きしてくれてる昼食を食べ、四人で日が暮れるまで遊んでいた。

そんな悠斗とも高校に進学する頃には付き合いがなくなった。違う高校に進学したこともあったが、なんとなく、付き合いづらい雰囲気は悠斗は身にまとうようになつていった。

悠斗の両親が離婚したことを聞いたのは、それから二年ほどしてだった。悠斗は母親に引き取られ、引越していった。どこへ行ったのか、僕は知らなかった。

僕は母のやつている喫茶店を手伝いつつ、大学に通っている。母の喫茶店はあまり大きくなく、お昼時に混むくらいで、お客もそれほど多くない。母の趣味でやっているような店だった。

その日も客がいなくなり、店内の掃除をだらだらしていた。

——リーン リーン

古い黒電話の音。

懐古趣味の母の一品だ。

「靖久出て」

コーヒーを飲みながら新聞を読んでいる母が、顔も上げず言う。

僕はテーブルをふいていた手を止め、受話器に手をかけた。

「はい、喫茶ヒマワリです」

「靖久？」

誰だかわからず、僕は戸惑った。

「どなたですか？」

「俺。悠斗だけど……」

「ああ、ごめん。久しぶりだな」

悠斗としゃべるのは五年ぶりくらいだった。いや、挨拶ではなく、まともにしゃべるのは七・八年ぶりくらいになるかもしれない。

「……あのさ、頼み事があるんだけど」

悠斗は何か急いでいるようだった。

「なんだ？」

僕は気軽に対応した。悠斗は昔っからこういうやつだったから。

「結婚……する気ないか？」

言葉の意味をつかみかねた。

「なんなんだ？」

「いや、ちよつとな。お前さあ、北沢麻里知ってるだろ？」

そう言われ、しばし考えた。名前を聞いたことはある。同級生の一人……だったと

思う。

「結婚する気ない？」

「は？」

「いや、だから麻里と結婚する気ないか？」

「言ってる意味がわからないんだが……」

誰だつて戸惑うだろう。

思い出そうとするが、北沢麻里の顔は霞みがかっているかのように思い出せなかった。だが、ひたすら流行を追いかけているようなタイプの女だった気がする。

「お前しか頼れないんだよ。麻里と結婚してくれ」

昔と変わらない頼み込む時の独特の口調。

「そんなこと頼まれてもだな。なんなんだ、一体？」

ふと顔を上げると、母と目が合った。新聞を読むのを止め、興味深げにこちらをみている。

僕は母から遠ざかり、挿話口を抱え込む。

「詳しく説明したら、麻里と結婚してくれるか？」

悠斗は無茶を言う。

「いや、あんな——」

「頼れるのは靖久だけなんだよ」

話を聞く気などなかったのに、悠斗は話し始めた。話を半分聞いただけで僕は頭が痛くなった。

「それで、何で僕が北沢さんと結婚しなくちゃならないんだ？」

「いや、式だけでいいんだよ」

悠斗は受話器越しにへらへら笑う。

「俺さ、駆け落ちしたんだ」

「は？」

「玲子っていうんだけど、めちゃくちゃ美人なんだよ」

「……」

「ホステスしててさ、俺より年上なんだけどさ、可愛いところあるんだよ」

「……つまり、北沢さんと結婚する予定だったのに、駆け落ちしたのか？」

僕の言葉に、悠斗は不満そうな声を出す。

「仕方ないだろ？ あつちの親が勝手に決めたんだから」

「それじゃ責任が——」

「俺の話聞いたんだから、麻里と結婚しろよ！ じゃあな！」

電話は叩きつけられるように切れた。僕は啞然と立ち尽くす。

どうしようかと考えるが、どうしたらいいのかわからない。まずは、北沢さんに電話で悠斗の駆け落ちを知らせなくてはならないと気づいたのは夜もふけた頃だった。

第三章：九月二十一日

田村 靖久 — Yasuhisa Tamura —

翌日。僕は意をけつして北沢さんのうちに電話をかけた。

昨晚三時間かけて探し出した、高校の卒業アルバムで電話番号を確認して。

「はい、八百屋・北沢です」

若い女性の声。アルバムの写真で北沢さんを確認はしていたが、声は覚えていない。

だが、若い女性の声だから、北沢麻里本人だろう。

何と切り出したものか……僕が考え込んでいると、若い女性は慌てた様子で声を上げる。

「お姉ちゃん!? お姉ちゃんなの?」

「あ、えつと……」

女性の迫力に、僕は声を詰まらせる。

「あ、あの、北沢——麻里さん……ですか?」

「……姉のお知り合いの方ですか? どなたです?」

女性は不信げな声色で尋ねる。北沢麻里を姉ということは、彼女の妹らしい。

なんとなくホツとしたような、嫌なことが伸びてしまったような……。

「え、いや……あの、えつと、僕は田村です。悠斗の友人で、田村靖久といいます」

「私は麻里の妹の里枝です。あの、悠斗さんに連絡を取りたいんですが、連絡先を教えてくださいませんか?」

里枝の言葉に靖人は言葉を詰まらせる。

知つていれば何度でも掛けなおし、悠斗にこのことを考え直させる。だけれど、卒業アルバムに載っていた悠斗の電話はもう使われていなかったし、今の悠斗の電話番号も知らない。黒電話だったから相手の電話番号もわからない。

母の懐古趣味を腹立たしく思ったのは初めてだった。

「あの、もしもし?」

里枝が不安げに声を上げる。ここは、はっきりと言ったほうが良いかもしれない。

「申し訳ありません!」

31 夕暮空の色

思い切り頭を下げる。

「あの、いったい何ですか……？」

妹さんは戸惑った声を上げる。

「あの、ですから、駆け落ち——」

「ああ！ でも、なぜ謝られるんですか？ こちらが謝らなければならぬのに……」

「……………」

「……………」

互いの間に長い長い沈黙の時間が降りた。

「待つてください。頭の中を整理させてください」

靖久は混乱した声を上げる。

「ああ、はい。どうぞご自由に……」

相手も混乱した声。

「悠斗が駆け落ちしたことはご存知……ですよね？」

僕の言葉に、妹さんは一瞬言葉を詰まらせたが、はつきりと否定した。

「お話から察するに……麻里さんも駆け落ちされたんですか？」

「……はい」

「つまり……」

靖久は言葉を詰まらせる。

花婿も花嫁もない——

互いにかける言葉もなく、二人は黙り込んだ。
最初に沈黙を破ったのは里枝だった。

「あの、田村さん？」

「あ、はい」

靖久は慌てて返事を返す。

「あの、電話ではなんですのでお会いしてお話できませんでしょうか」

「ああ、はい。そう出来れば……じゃあ、三時くらいに駅前のファミレスで。僕は青のシャツ着て行きますから」

「はい。じゃあ、私は白のワンピースを着ていきます」

「………わかりました」

静かに電話を置いた。

溜息をつき、今の会話を頭の中で整理しようとしたが……もう一度溜息をつく。
とりあえず、麻里の妹だという『北沢里枝』さんと会うしかないようだ。

僕は母に用事が出来たからと、店を抜け出した。客が来る昼時も終っていたから僕が抜けても何ら問題なかった。

午後三時過ぎ、指定されたファミレスに到着する。寝込んでいる母に、気づかれないうちに家を出るのにずいぶん時間がかかってしまった。

姉からの連絡がないものか、私の行動を目を皿のようにして観察しているものだから、さっきの靖久さんからの電話について細かに聞かれた。けれど、あまり詳しく話すわけにも行かない。希望をもたせて、崖から突き落とすのは酷過ぎる。母に適当に言い訳しつつ、なだめすかし、家を出たのは電話から五十分もたってからだった。

約束した時間よりもかなり遅れてしまった。まだいてくれることを願いつつファミレスに入ると、窓際の席で、青いポロシャツを着てコーヒーを啜っている男性と目が会った。彼はすぐに席を立ち上がり、深々と頭を下げる。私も彼に頭を下げ、席につく。カフェオレを頼み、ウエイトレスが離れていったのを見届けると、彼は、

「始めまして。悠斗の友人で、田村靖久といいます。お姉さんとも同級です」
また頭を下げるので、こちらも頭を下げる。

「あ、私は麻里の妹で、里枝といいます。何からお話すればいいのか……」
真実を伝えなければならぬのだが、言葉にするとあまりにも嘘っぽすぎる現実で……。

互いに言葉を詰まらせる。

運ばれてきたカフェオレを一口啜り、

「あの、悠斗さんが駆け落ちしたって言うのは本当なんですか？」

靖久の目をまっすぐに見つめる。

言いにくそうに靖久は言葉を濁しかけたが、

「……昨日、電話がありました——女性と、駆け落ちするからと……」

その言葉に里枝はあきれ返る。夫婦で同じようなことをしていたのかと。

靖久は言いにくそうに声を出す。

「あの、北沢さん……麻里さんは？」

「姉は……どこで出会ったのかわからないんですが、ハルフミという男性と駆け落ちすると、二日前、電話がありました……あの、悠斗さんに連絡しようとしたんですが、こちらは連絡先をうかがっていなかったものですから、何も出来なくて……」

「あ、いや……」

互いに言葉につまり、お互いに飲み物を啜る。どのくらい時が経ったのか、

「……………あの、北沢さん」

靖久の声に里枝はハッとわれに返る。

「あ、すいません」

「ああ、いえ……」

靖久は気弱に笑いながらカップの中身を飲もうとし、腕を下ろす。里枝もカフェオレを飲もうとして中身がないのに気づく。腕時計を見ると四時過ぎ。里枝が店に来たから一時間近くも経過している。

「店、出ましようか」

靖人の言葉に里枝はただ頷いた。

二人で近くにある、大きな公園をぶらぶら歩く。

「二人を探し出せないものでしょうか」

靖人がポツリと呟く。

「無理でしょう。連れ戻してみても、二人はもう結婚する意志はもうないと思いますし……」

里枝が答える。

「どうしたらいいんですかねえ……」

靖人は溜息混じりに声を上げる。里枝もため息をつくしかない。

互いに話す言葉もなく、ぶらぶらと大きな池を一周する。

いつの間にかやら沈んでゆく夕日を横目で眺め、どちらともなくベンチに腰掛け、自動販売機で買った缶ジュースを口にする。

「悠斗たち、どんな式をすることになってたんですか？」

靖久の言葉の言葉に里枝は我にかえる。

「あ、えつと……」

いつも持ち歩いているショルダーバックの中からパンフレットを取り出す。

「両親が張り切ってます……」

照れながら姉が着るはずだったウエディングドレスの写真や、教会などを見せる。「立派な式なんですね」

しみじみとした靖人の言葉に、里枝も悲しげに頷く。

「あ、でも、内輪だけの簡単なものなんですけどね……」

互いに言葉もなくじつとジューズを飲んでいたが、

「もう、こんな時間ですね」

靖久の言葉に腕時計を見ると、六時をまわっている。

「あの、これ、僕の連絡先です。麻里さんのこと何かわかったら連絡を」

手帳の切れ端を渡される。里枝が受け取ると、

「それじゃあ、今日は……」

ぎくしゃくと別れの挨拶を繰り返し、私たちは別かれた。

第四章：九月二十二日

田村 千津絵 — Thizue Tamura —

午前九時には店を開ける。靖久をフル活用し始めてから、千津絵が開店前にすることは少なくなった。

靖久は今日は授業があるからと、朝の手伝いを済ませると学校へ出かけていった。

お昼を過ぎれば戻ってくる。

店内を見渡し、ガラスケースに入れた他人に触らせられない、お気に入りのフランズ人形や、ランプに丁寧にはたきをかけ、ほこりを払って、ガラスの棚に一番良く見えるように並べる。

アンティーク趣味が高じて、店の中は妙な落ち着きがある。この雰囲気を気に入って、遠くから来てくれるお客さんもいる。

客はランチタイムまでまずない。いつものように煙草に火をつけ、新聞を読もうとして、ちらとガラスケースの中のキセルに目を留めた。

細くて上品な一品。淑女のために作られたもので、値はそれほど張らないが、千津絵が気に入っているアンティークの一つだ。ガラスケースから取り出し、ゆっくりとその優美なデザインを眺める。

刻んだ葉を詰め、一口、肺に吸い込む。本物の味。深く、濃い。立ち昇る紫煙も、いつもの安っぽい煙草に比べて美しい。

——カラン コロン

ベルが鳴り、いつもより早く客が現われる。入り口を向いた千津絵は、

「あら、橘さん」

相手が誰か認めると、腰を上げようともせずキセルを吸いつづける。

入ってきたのは近所のおしゃべり好きな奥さんだった。彼女は時々やってきて、水一杯で三時間はしゃべってゆく。

「奥さん、聞きましたよ。息子さん結婚するんですって？」

椅子に座るよりも先に話し始める。橘さんはいつだって、嘘か真かわからないような、いい加減なことも平気で話す。だから、いつもは適当にお茶を濁し、話し終わって帰っていくまで、ただひたすら耐えるのだが、

「何のことですか？」

千津絵の顔色が変わったのを見て取り、橘の奥さんは嬉しそうに話し始めた。

「あのね、見たって方がいるのよ」

フフフと笑う。

「何のことなんです？」

「だからあ、息子さん——ヤスヒサ……さんですっけ？ 彼が公園で髪の毛長い女の子と歩いてたって……」

思わずこげそうになる。

女の子と歩いていただけで結婚とは。息子も二十三歳。彼女一人や二人いてもおかしくない年齢だ。

「それでね、その方がおっしゃるには、結婚式場のパンフレットやら、ウエディングドレスのパンフレット広げて、親密そうに話してたって」

……その方は一体どこからその二人を観察していたというのだろう。話題は変わりながら長々と、橘さんの話は続いた。

北沢 里枝 — Rie Kitazawa —

姉の同級生、その言葉が引つかかり、姉の卒業アルバムをめくった。確かに靖人は高校時代の姉の同級生だった。そして、悠斗さんも。

卒業アルバムに記載されていた靖人の住所を尋ねると、そこは喫茶店だった。アンティークな感じだが、店名は『ヒマワリ』。なんだかちぐはぐな感じだ。

ベルの音と共に中に入るが、店内には、キセルをふかす黒服の女性が一人と、どこにでもいるおばさんが一人いるだけだった。

「いらっしゃい、どうでもどうぞ」

黒服の女性はほっとした顔で立ち上がり、店内を指差す。

里枝は窓際の一角に腰を下ろす。

「何になさいます?」

簡単なメニューと水、おしぼりが運ばれてきた。

「カフェオレを」

メニューを見もせず、注文する。

女性は難しい顔をしていたが、ふと微笑み、

「もしかして……リエちゃん？ あなた北沢里恵ちゃん？」

「……なんで私の事——」

「昔近所に住んでた、田村よ。憶えてない……わよね。里恵ちゃん五歳くらいだったし」

里恵もその言葉に頷く。

「懐かしいわね……里恵ちゃんもこんなに大きくなって……」

感慨深げに呟きながら、女性は奥へと消えた。

店内に流れるジャズが一曲終った頃、カフェオレとチーズケーキを持って女性は現れた。

「これ、どうぞ」

「ありがとうございます……」

女性が再び、おぼさんの横の席に戻りかけたのを里恵は呼び止める。

「靖久さん、いらつしやいますか？」

「今、学校だけど……何か用？」

「あ、いえ……」

「あなたじゃないの？」

横から声が割ってはいる。

「あなた、昨日公園で靖久さんとデートしてた方でしょ？」

声の主はおしゃべり好きそうなおばさん。妙な迫力に、里恵は頷く。

「結婚式、いつなの？」

なぜ、このおばさんが姉の結婚式のことを知っているのかわからなかったが、里枝は素直に答えた。

「明日です。内輪だけの小さいものですけど……」

「あら、まあ！」

おばさんは嬉しそうに目を輝かせると、用事があると店を出て行った。

里恵とともにおばさんを見送った田村の母が、啞然とした顔で尋ねる。

「里恵ちゃん、靖久と結婚するの？」

「いえ、悠斗さんと姉のことですが……」

「……麻里、ちゃんが結婚するの？ 悠斗君と？」

「はい」

わけもわからず里恵は頷く。

田村の母は頭を抱え、うずくまっていたがやおら立ち上がり、

「靖人に用事ってなんなの？」

「あ、えっと、話せば長くなるんですが——」

「短く言って」

「ああ、えっと、姉と悠斗さんが駆け落ちしてしまつて……。式は父の知り合いの人に無理矢理たのんで組んでもらつたんで取りやめることも出来なくて……」

「二人が駆け落ちしたの？」

「いえ、二人とも四年前に駆け落ちしてたんですけど、戻つてきてたんです。それで、ウチの両親が式を組んだんですけど、お互いに別の相手とまた駆け落ちしてしまつて……」

「それで、靖久はなんで関わつてるのかしら？」

「悠斗さんの友人だつて……。昨日、電話をもらいました」

田村の母はしばらく考え込んでいたが、

「おとといの不審な電話は悠斗君からだつたのね」

大きく溜息をつく。

「さっきの人ね、このあたりじゃ有名なスピーカーカーおばさんなの。あることないこと、話を大きくしてしゃべつてまわる……。困つたわね……」

肘を曲げ、考え込む。

「でも、噂だったら別に……」

「うちは店をやつてるでしょ？ だから、靖久が結婚するつて噂を聞きつけて来るお客さんもいるのよ。その人たち一人一人に間違いを訂正するより、広がる方が早い」

二人がじつと考え込んでいると、

「ただいま」

声がした。

「あれ？ 里恵……さん？ どうして？」

「靖久……」

田村の母は疲れきった顔を上げる。

「どうしたの？ 母さん」

「里恵ちゃんと結婚しなさい」

「え！？」

里恵と靖人は驚きの声を上げる。

「それしかないでしょ。北沢さんとこも式をあげなきゃならないんだし、うちにも事情がある。ちようどいいじゃない」

「それは……そうですけど……」

里恵が言葉を濁す。

「何か問題ある？ ドレスのサイズ違うの？」

「いえ、えつと……」

「悠斗君も靖久とそれほど体格変わらなかったから……ちようどいいじゃない」

「いや、だけど……」

靖人の反論の声にも田村の母は躊躇することなく、
「内輪だけの式なんでしょ？ それだったら大丈夫よ！ 結婚だけして、籍を入れな
きゃいいんだから」

どこから湧いてくるのか、妙な意気込み。

千津絵は北沢の家に電話をかけ、その妙な提案を嬉々として伝えていた。
そんなもの、通るはずがない。

そう思っていた靖久と里枝だったが、

「オッケーですって」

千津絵の言葉に哑然とする。

「昔つから、康ちゃんもみつちゃんも私の言うことにはいつも賛成してくれるのよ」
千津絵はふふふつと笑った。

『康ちゃん』に『みつちゃん』というのは、里枝の父『康介』と母『美津子』のことだろ
う。

靖久と里枝は互いに顔を見合わせ、溜息をついた。

第五章：九月二十三日

田村 靖久 — Yasuhisa Tamura —

式当日、空は抜けるような青空。快晴だった。結婚式日和というところだろうか。パンフレットにあつた教会よりも、実物はずいぶん小さかつた。教会、という言葉で想像するような華やかな教会ではなく、白い壁に木の椅子。ステンドグラスもありはするが、どこにでもありそうな、シンプルなもの。本当に小さな教会だった。

靖久は白と紺色、それに銀系の刺繍が入ったタキシード。

里枝は白に銀系とパールビーズの刺繍された、ウエディングドレス。

本当に結婚するわけではないけれど、なんだか互いに照れくさかつた。

式も終わりに近づいた頃、

「さあ、誓いの口づけを……」

神父の言葉に靖久と里枝はかたまつた。

忘れていた。

その言葉が一番手つ取り早い。

「口づけを……」

神父は困つた顔で、もう一度二人に話し掛ける。

里枝は顔を下げているのだが、きつと顔を上げ、

「あの、靖久さん、初めて……じゃないですよね？」

その言葉に靖久が里枝の顔を見る。

里枝はヴェールを勢いよく捲し上げ、かすめるように靖久の唇に触れ、離れた。

その行動に靖久はただ、じつと立っているしか出来なかった。

式の後にはホテルのレストランの一角を借りての、食事会。

「ちっちゃかった靖坊が、俺よりでっかくなつたんだなあ」

「本当に。やっちゃん、いい男になつてえ」

里恵の父母が陽気に笑う。里枝が、母は調子が悪くて寝込んでいると言っていたが、その様子は微塵も無い。

「懐かしいわねえ……引越したのは靖久が十歳くらいの頃だったかしら？」

千津絵の言葉に、里恵の母——美津子が頷く。

「そうそう、里枝が小学校上がる前だったわ。里枝は覚えてないんでしょうけど、田村さん、うちのまん前に住んでたのよ」

「へえ」

困惑顔で里枝は靖久を見やる。それは靖久も同じで。互いに目が合い、慌てて目をそらす。

「お前ら、よく遊んでただろ。馬鹿娘と、里枝と、靖坊と三人で」

そう言われ、靖久は考え込む。

遊んでいたのは……自分ともう一人。二人だけだったはずだ。

「お父さん、あのころ里枝は人見知りか激しかったから、あんまり遊んでないわ。だから、靖久ちゃんが覚えてなくても仕方ないのよ」

思ひ出話に花が咲く。里枝は逃げるように席をはずした。

「里枝さん？」

ロビーのソファにいるところやつと見つけた。

「すみません、」

立ち上がろうとするのをとどめ、靖久は隣に腰を下ろす。

「今回はありがとうございした」

里枝は再び謝る。

「いえ、こちらこそ」

靖久も言葉につまり、返事を返すのみ。二人きりになると話題が無い。

こんな嘘の挙式など、あげなければ良かった。千津絵の登場で劇的に雪崩れ込むように挙げてしまった式に、靖久はただただ溜息をつくしかない。

互いに話す言葉もなく、黙りこむ。

ワハハハ……

千津絵と北沢の両親は盛り上がっている。

靖久と里枝は互いにとって息をつき、それを互いに気づき、何か話そうと声をあげかけ、声が重なり、譲り合っているうち再び声を詰まらせる。沈黙が居た堪れない。

「田村里枝様、お電話です」

ホテルの従業員が近づいてきて、事務的な声をあげた。

一瞬、里枝は不思議そうな顔をしたが、微笑みながら、

「そっか、結婚したから私は『北沢』じゃなくて、『田村』なんですわね」

従業員に指定された電話に出るため席を離れていった。

「はい、お久しぶりです……」

里枝は戸惑い気味頭を下げる。

受話器からうつつすらとだが声が漏れ聞こえてくる。向こうは大きな声で話しているのだろう。

「え？ あ、はあ……まあ……」

里枝はちらりと靖久を振り向き、すまなさそうに頭を下げる。

靖久も奇妙な顔をしつつも、頭を下げ返す。

「ええ。あの、どこでこの話を？ ……あ、ちよつと！」

里枝は受話器をおき、

「どうしよう……」

不安げな声を上げながら、靖久の隣に座った。

「どうかしたんですか？」

「噂、広められてるみたいなんです」

「噂？」

「結婚のことです」

里枝はその電話の主が、高校時代のお喋り好きなクラスメイトであったことを告げた。橋亜紀子、母の店にときどき尋ねてくるスピーカーおばさんの娘だ。靖久も顔を曇らせる。

千津絵の心配していた通りになってしまった。二人は黙り込み、もくもくと飲み物を啜った。

どうすればいいのか、一番簡単な方法は互いにわかっていたが……けれどこんな風に流されるように決めるようなことじゃない。こういうことは、長い時間をかけて……

「靖久さん、」

里枝の声で、靖久は顔を上げる。

里枝は真剣な顔で、

「あの、私のほうからこんなことを言うのは……あれなんですけれど」

何が言いたいのか、靖久はわかっていった。同じことを考えていたから。

「……いえ、あの、忘れてください。いくらなんでも都合が良すぎますから……」

里枝は真つ赤な顔をして、靖久から離れ、親のほうへ酌をしに行ってしまった。

「あら、靖久ちゃん、こういうことは男の子の方から言わなきゃダメよ☆」

話をどこから聞いていたのか、片手にワイングラスをもつて、千津絵が靖久の隣に座る。

「ほら、お酒ついで」

一口でグラスをあけ、片手に持っていたワインボトルを靖久に渡す。

「いや、だけど……」

「あのね、靖久ちゃん」

千津絵はじつと靖久の目を覗き込む。

「女の子があれほど勇気を出してんのよ？ 告白してるようなものじゃないの」

「でも、これは——」

息子の言葉を遮り、千津絵はきゅつと一口でグラスを空にすると、それを靖久の前に突き出す。ワインの飲み方じゃない。

「好きでもない相手とき、結婚式したり、キスしたり、女の子はしないものよ」

靖久はそれと同じようにワインを注ぐ。

「結婚なんてものは、してみなきや『善し悪し』なんてことはわからないんだから、と
りあえず結婚して、ダメだったら別れりゃいいのよ」

「いや、それは——」

「なに？ 結婚二十七周年を迎える私の言葉が信じられないの？」

酔っ払いには逆らわない方がいい。

「……そうだね」

「それにあんたはさ、里枝ちゃんの『王子様』なんだから、大丈夫よ」
ぽんぽんと息子の頭を叩き、千津絵は北沢の両親の元へと戻っていった。

王子様——？

ふと、顔を見上げると里枝がベランダに立っていた。

「里枝さん？」

「あ、すみません。ちょっと風に当たりたいなと思って……」

「いえ。あの……」

靖久はなんと云えばいいのか戸惑う。

結婚式を先に済ませてしまっているのだから。

「これから、始めませんか？」

「え？」

里枝は不思議そうな顔で靖久を見る。

「本当にお付き合い、しませんか？」

互いに目が離せない。

じつと見詰め合っていたが、先に目を離したのは靖久のほうだった。
「すみません、変なこと言い出して。ちょっと酔っ払ったようで——」

「酔っておっしゃったことなんですか？」

里枝の真剣な眼差しに、靖久は照れ笑いしていた顔を引きつらせ、ぽつりと答えた。
「本当です」

「——私と、付き合っていたただけるんですか？」

その言葉に靖久が驚く。

「あの、それは、つまり——」

「喜んでお受けします……」

里枝は涙を浮かべて微笑んだ。

その顔に靖久は引つかかっていた記憶を思い出した。

泣いている、一人の少女……

暑い暑い、夏休みだった。

その頃の僕の遊び相手は、近所の姉妹だった。

妹の方は非常に人見知りで、警戒心が強く、一緒に遊んでいるとは言うものの、いつも姉の影に隠れていた。だから、三人で遊ぶというよりも姉の方と二人で遊んでいるという感じだった。

僕達はそのころ、探検ごっこばかりしていた。ただの散歩、大人に取ってはそうしか取られない程度のことだったが、僕達には楽しくて仕方なかった。

ある時、気づくと僕と姉の方しかいなかった。姉に妹のことを尋ねても知らないというだけ。僕は必死に探し回った。

「おねえちゃん……」

か細い泣き声に僕は足を止める。

土管置き場。

そのなかの一つ。立てて置かれた土管の中から、小さな声がする。

中を覗き込むと、女の子がいた。その子をはつきりと見るのはそれが初めてだった。髪がちよつと長くって、目がパツチリしてて、まつげが長くって、日に焼けていて……可愛い子だった。

「リエちゃん、大丈夫？」

僕は女の子を助け出し、背中に背負い、夕暮れの中、帰途についた。女の子は僕の背中にしがみつき、しくしくと泣きつづけた。

翌日から、彼女は僕の前には現われなくなった。

父が一軒家を買ひ、母親がその一階を改装して喫茶店を開くからと夏休みが開ける間際、僕は引越した。

二度と、彼女に会うことはないだろうと思っていた。

おさななじみ

僕は白いタキシード。隣には妻になる女性が純白のウエディングドレス姿でたたずんでいる。手には淡いピンクのカラーと白いチュウリップを合わせたブーケ。その雰囲気は『美しい』という形容詞がびたりとあう。まったく一部の隙もない。

僕の視線に気づいたのか、伏せていた顔を上げ、ベールの奥から笑みを見せる。ちよつと勝ち誇つたような感じの笑み。僕が微笑み返すと、彼女は頬を朱に染めてまた顔を伏せた。

彼女に初めて会つたとき、何となく変わった人間だと感じた。時が経るにつれ、それは確信に変わつていった。けれど、そんな人間を僕は生涯の伴侶にめとろうとしてゐる。人生はなんとも不思議なものだ。

僕が五歳の春だつた。ずっと空家だつた隣のうちに、ヤツの一家が越してきたのは。手入れの無い庭に一人の少女。庭で遊んでいた僕は生垣の隙間からをれを目にした。僕はそれまで、そこが幽霊屋敷だと信じて疑つてなかつたものだから、ヤツの出現にはいささか驚かされた。

くるり、くるり。彼女が回り、白いワンピーススカートが膨らむ。

引越しの手伝いが出来ないから一人で遊んでいたのだろうが、当時の僕にはそんな

ことなど思いもよらず、とうとう幽霊を目撃してしまったというショックで固まっていた。彼女はそんな僕にようやく気づき、同じ年らしからぬ不敵な笑みを浮かべ、

「あんた、誰？」

「……」

「何か言いなよ」

「……君、幽霊？」

幼い僕が遊び場にしない為なのだろうが、隣家について、あること無いこと兄貴や母親に言われていたものだから、彼女をそんな風にしか思えなかったのだ。まだ、幼かったこともあつて。

ヤツは否定もせず、にやりと笑うと、家の中に入ってしまった。

「お母さん、隣の幽霊見た！」

勢い込んで家に駆け込んだ僕に対し、母はむっとした顔をして、

「ちよつとお母さん電話してるの！ 静かにしなさいって言ってるでしょ」

挿話口をふさぎ、押し殺した声で言う。母の妹、僕の伯母とのいつもの長電話。

「でも、幽霊……」

食い下がる僕に、

「ああ、隣に越して越してらした渡部さんのこと……？ たしか、あんたと同じ年の子がいるって言ってたわね」

うるさいと言わんばかりに答えると、おしゃべりに戻る。

僕は言われたことがわからず、そのころ兄と一緒にだった部屋へと戻った。

十十十

ヤツとはそれから、毎日顔を会わす事になった。まあ、お隣なんだから当たり前のこと。近所に同い年くらいの遊び相手もいなかったから、気づけば一緒に遊んでいた。まあ、それも当たり前のこと。

ただ、思い出してみても、僕から遊びに誘った記憶はない。けれど、僕がヤツを連れ回し、危険な遊びをしていると大人たちには思われていた。それは絶対にありえないことだったのに。なぜならヤツと一緒にいるととても楽しいこともあったが、恐い目に会うことも多かったのだから。

夏のある日、僕はヤツと一緒に遊んでいた。いや、僕が遊んでいるのをヤツは見ていた……いつもそうだった。

僕を見るときもなく目で追いながら、ぼーっとしている——そういう時はこの後、必ず冒険をする羽目に陥ることをわかつていたのに、そのころの僕はそれが楽しいことであるかのようにヤツに思い込まされていた。いつも、後でさんさん僕だけが大人に怒られ、大泣していたにもかかわらず。

その日、ヤツが提案したのは海に行くことだった。僕の住んでいるところは山間で、大人の足でも海までは行くことは不可能だった。

「遠いよ、海って」

海に連れて行つてと頼むと、必ず帰ってくる大人たちの言葉をそのまま返した。

「知らないのか？ 川をずううううと下つてくと海があるんだ」

家の向かいにある川下の方を指差して、ヤツは馬鹿にしたように言い返す。実際、昔から冷めたヤツで、ヤツの態度には子供っぽさがなかった。

「嘘だ。川の水つてしょっぱくないもん。海の水つてしょっぱいんだよ」

「じゃ、確かめよう」

ヤツはさつさと決めてしまつて、家から子供用プールを運び出してきた。

「何するの？」

「これはボート。で、食料は？」

「食料？」

「御飯とか、お菓子とか……。海まで遠いのなら必要だろうが」

腕を組んで仁王立ち。威張りくさつた態度。

僕は不安になりつつも、家から食パンとか、牛乳とか、長期保存のきく仏壇の供え物をリュックに詰めて持ち出した。

「出発しようか」

約束した橋の下へつくと、やつは嬉しそうに言った。

その笑顔は本当に子供っぽいもので、普段の、子供らしくないそればかり見ていたぼくは不思議でならず、じっと見入ってしまった。

——ポツリ

僕の額に一滴の水滴が落ちてきて、空を仰ぎ見る。

ザザアアアア——

夏には良くある通り雨。集中豪雨。

ずぶ濡れの僕とヤツは取るものとりあえず橋の下に逃げ込んだ。

雨が上がっても、僕たちは海へ行くことなく、夕食へと家へ帰った。

もちろん。家に帰った僕は食パン、牛乳、お供え物を持ち出し、雨でぐしゃぐしゃにってしまったことを母親に怒られた。

小学校の入学式。

僕はつきり、ヤツと一緒に思っていたのだが、

「お母様！」

その声に振り向くと、ヤツが車の中から、僕の母と立ち話をしている母親を呼んでいるところだった。

ヤツは紺色のベレー帽に、大きな白い襟のついたシャツ。緑色のリボン。帽子と同じ色の制服を着ていた。

僕の通うことになってた小学校は公立で、制服などはない。帽子は黄色の制帽がありはしたけれど。

「急いでください。遅れます」

ちらりと僕と目があつた。ヤツはいつもの不敵な笑みを一瞬浮かべはしたものの、妙に育ちの良さそうな、すました顔に戻り、

「お母様！」

ヤツの母親はちよつと自慢げに頭を下げると、車に乗り込み発進させた。

車が角を曲がつて消えてしまうと、

「まあ、お金のあるおうちには違うわよねえ」

母は不満そうに呟き、僕の頭を叩いた。

「一緒の学校じゃないの？」

「向こうさんはうちなんかより良い学校に行くのよ……用意できた？」

川岸に植えられた満開の桜の中、僕とは母歩いて小学校へ向かった。僕のうちから学校までは子供の足でも歩いて十分ほどのところにあつた。

小学校にあがつてから、ヤツの姿を見かけることは少なくなった。考えてみれば、ヤ

ツが越してきてからも、毎日姿を見かけているわけではなかった。ヤツはお稽古事だとか、塾だとか……毎日忙しくしていたから。

その忙しさは車で二十分はかかる小学校へ通うことでますます増えた。小学校にあがったことで習い事も増えたのだという。

僕は習い事なんてものは、小学校の四年の時にそろばんに通いはじめ、小学校五年で小林寺を始め、小学校六年のとき英語塾に行き始めたくらいだ。

中学にあがると共に、英語塾以外は辞めてしまい、かわりに数学の塾に通うことになった。通わせてる割に、テストの点が上がらないと母に嫌味ばかり言われていたのだが。

中学の入学式。

僕は学ランに辟易していた。慣れない首周りの違和感。制服の堅苦しさ。それに、襟を立てさせるためにつける、プラスチックの襟裏が、首にすれてとても痛いのだ。

家から出た僕は、隣のうちの前にたたずんでいたヤツの姿に見とれてしまった。大々学までのエスカレーター式だとは聞いてたから、ヤツの姿を見かけることがあるとは思ってもいなかったのだ。

ヤツは六年前に見た制服をそのまま大きくしたようなものを着ていた。紺色のベレー帽。白い、セーラー型の襟のシャツ。紺色のボレロ。落ち着いた緑色の、クロスさせる形のリボン。紺色のベストに、チェックの入ったひだスカート。黒のハイソックスに、黒

い革靴。学校指定なのか、変わった鞆を手に持っていた。

僕の視線に気づくと、ヤツは笑みを浮かべた。不敵な笑み——僕と目があうと、決まってその笑みをみせるのだが、僕以外は見たことが無いらしい。

そんな笑みにも僕はどきまぎとぎこちなく視線を外し、玄関先で大騒ぎしている母さんを見やる。

今日は着物を着るといつていたのだが、いざ着始めてみると、足袋がないことに気づき、急遽、五年前のものだとかいう空色のワンピーススーツに着替えた。背中のファスナーが上がらないと騒いでいたものの、とりあえずホックをとめて、上着を着て、それはそれで事なきを得た。

今度はそのスーツに合うヒールがないと騒いでいる。

「この白のヒールは？」

母親と一緒に靴箱をひっくり返していた親父の声に、

「いい歳してそんなもの履けないわよ。ああ、でも黒だとおかしいわよねえ」

「何でもいいだろ？ お袋の格好なんて誰も見やしないさ」

三歳年上の兄貴がパンをかじりながら、廊下に立って面白げに見物している。

「ああ、もう！ 御飯は座って食べなさい、行儀悪い！ お父さん、どう？ これならおかしくない？」

銀色のハイヒールを履いて、くるりと回る。

玄関先で恥ずかしいことを……子供の心配などどこ吹く風。親父は、その騒動がやつと終つたことへの安堵感からか、ほつとした笑みと共に、

「お前ほどその格好が似合う女もないよ」

機嫌がいいときの口癖で答える。

「やつぱり？」

「母さん、遅れる！」

見詰め合う二人に声をかけ、玄関から母さんを引つ張りだす。

「あなた、ごめんなさい。後、お願いしますね！」

母さんは満面の笑みで、機嫌がいいときだけ使う「あなた」なんて気取つた言い方をして、手を振つた。

僕と母さんは走るようにして、小学校の向かいにある中学校へと急いだ。

時はあつという間に過ぎ、僕は中学三年生になった。

特に目立つようなこともなく、無難な日々を僕は過ごしていた。

六月の三者面談。

うだるような暑さの中、扇風機の生ぬるい風を受けながら、

「それで、進路はどのように考えてるのかな？」

妙に丁寧な口調で担任が尋ねた。

「え……あの、高校に行くこうかと……」

「どこの？」

言われ、僕は言葉を詰まらせる。だってまだ、六月なのだ。どこの高校に入るかなんて、決めてない。というか、兄貴の通ってる高校と、他に二・三校しか知らない。

担任は溜息を一つつくど、

「お母様は考えてらっしゃいますか？」

母はちよつと緊張した面持ちで、

「あの、なるだけお金のかからない公立へやろうかと思ってるんですが……大丈夫でしようか？」

「学力が、ということでしょうか？」

担任の声に、僕はびくりと耳をそばだてる。母は戸惑いつつも、

「はあ、その……お金とか、そんなものを含めてです。これの兄も今、高校生なんです、今年卒業なもので……それで、上にながると申してまして……」

その頃、母は異常なくらいお金に気がつかっていた。

「まあ、今から頑張れば何てことないと思えますが……」

担任は口を濁し、眼鏡の曇りを拭う。

そこまで自分の成績は悪い方だったのか？ 何となく自己嫌悪に陥る。

「細かいことは後々になります、私立に比べ公立の方が試験が遅いんです。それで……滑り止めに、私立を受けられることをお薦めしているんです。あの、ですから公立の高校を受験される場合は、私立の高校のことも合わせて考えてもらいたんです」

ちよつと言い方が嫌みつたらしい。それでは僕が相当頭が悪いようじゃないか。

母はそれ以後、ますます寡黙になり、三者面談を終えて教室を出ると、僕の頭を叩き、

「あんた、親を破産させる気？ 夏休みはみっちり勉強しなさい。公立以外に行かすようなお金はないんだから」

それから、家に帰り着くまで互いに無言だった。

公立一本だけ受験し、僕は何とかその高校に入学した。

首に手を当て、頭を振る。こうして学ランをきちんと着込むと、制服が背広である私立高校が羨ましくなる。まあ、絶対に入ることでできなかつただけれど。

ちらり、と隣のうちを見る。

最近の癖。家から出ると、隣のうちの玄関を見てしまう。不敵な笑みを浮かべるヤ

ツがないか」と。

そこにヤツはいた。セミロングの黒髪。服装は……紺色のセーラー服。白のリボン。見覚えのある服だった。

僕の視線に気づいたヤツは、いつもの笑みを浮かべて顔を上げ、

「やっと同じ学校にいけるな」

古い記憶と同じ口調。声は——少し大人っぽくなった。

「……やっぱり、それ……」

「主語述語を抜かすな、何を言いたいのか理解できない」

「エスカレーター式なんじゃ——」

「家庭の事情つてやつだ……じゃあな」

玄関から出てくるうちの親父に気づくと、自転車にまたがっていつてしまった。

「おい、車に乗れ」

「……うん」

ヤツがシャンプー香が漂ってきたような綺麗な黒髪を風になびかせて走り去ってゆく姿から目を離し、助手席に乗り込む。

数日前に親父とお袋はじゃんけんをして、勝った母は兄貴の入学式に出るのだと、昨日から隣の県へと出かけている。そして負けた親父が、僕の入学式に出席することになったのだ。別に来なくてもいいのに。

入学式。

まずは自分が何組なのかを確認して、クラスへ向かう。

「あれ、お前受かったの？」

茶化すような声に振り向くと、中三の時、同じクラスだった吉澤だった。

「ああ、久しぶり」

あまり話した事がなかったもので、どう接していいのか戸惑っていた。そんな僕に対して、吉澤は人懐こい。旧知の仲のように、担任となる先生がくるまで一人でしゃべっていた。

教室に入ってきたまだ若い男は名を告げ、自分がクラスの担任になるという熱い決意を述べた後、お決まりの自己紹介をすることになった。

「名前と出身中学。自己PR、趣味、決意、何しやべってもいいぞ。まずは、出席番号一番、青木」

呼ばれて僕は立ち上がる。

これから、初めての授業のたびに僕から始まるのだと思うと気が重い。せめて『お』とか『か』とかであれば、一番最初に自己紹介することもなかっただろうに……。僕の前に自己紹介するやつがいるとすれば『相田』とか『青江』とか、そんな名字のやつしかない。今まで一人も僕の周りにいなかったけれど。

「青木健介。S中学出身です。えっと、趣味は特にないです。よろしくお願いします」

一つ札をして着席する。

必要以上に簡素な自己紹介に熱血っぽい担任教師はがっかりしたような顔をしているが、そんなことを気にして入られない。クラス中の視線を集めるなど、僕には耐えられない。

「あ……と、それじゃあ、今度は女子にしようか」

不満の声があがるが、さわやかな笑顔でかわし、

「女子は後ろからな、それじゃあ、渡部」

椅子が動く音がして、静かに立ち上がる音。

僕は……伏せていた顔を上げ、ヤツの姿をそこに見た。ヤツは僕をちらりと見たが無視するように、穏やかな声で自己紹介をはじめた。

「青木君」

彼女はとても猫つかぶりで。良家のお嬢さんという態度を脱ぎ去る事はせず。

「何、渡部さん」

僕も彼女に做つて。周囲に人がいるときにはなるべく彼女に優しく接する。

一週間で過ぎ、一ヶ月が過ぎ、一年が過ぎ。彼女と過ごす日々が増えていき、僕らはそばにいるのが当たり前になつて。

「健介」

僕の前でだけ不遜な態度を取る彼女。

「何だよ、ジャイアン」

「私に対し、そういう態度をとっていいのか？」

妙に記憶力の言い彼女は、僕の小さい頃のことを並べ立て、慌てた僕が謝ると楽しそうに笑うのだ。

そんな彼女の『家庭の事情』をいつしか僕は知り、彼女は平凡な僕が羨ましくて羨ましくてならなかったのだと知り、何も言い返せなくなった。

僕の小さな頃のことをよく知っているのも、彼女が閉じ込められた自室から僕を見つめていたからで。

彼女の母親の影響力が届かない僕は、彼女にとって唯一の見方、唯一の存在だったように。

幼い頃にしか遊んだことが無かったのに、声は聞こえ、姿を見ることもできるのに交流の無い僕の存在が、彼女にとってとても大きなものだったと言うことを知る――。

帰り道。部活で遅くなった僕と、何度目になるのかわからない偶然にて彼女と並んで歩く。僕は彼女の偶然が必然であるなんて思いもよらず、話掛けてはみるものの、返事は嫌味か暴言ばかり。だから、僕は彼女が苦手で。

「そんなに僕が嫌いなら話掛けなきやいだろ。もしかして、僕のこと好きだったりするわけ？」

それまで何の話をしていたんだったか。あまりに腹が立つて言い放った言葉に、彼女は見せたことの無い狼狽振りで顔を赤くし、

「そんなわけないだろ、馬鹿」

最初は彼女の態度が理解できず、けれど理解すると僕も彼女と同じ顔色になり、しゃべることができなくなる。沈黙したまま二人で歩く。相手に鼓動の音が聞こえそうなく、怖いほどの静寂。時間が経つのがイライラするほど遅くて、驚くほど早く沈み行く夕日を見つめながら、彼女の気配をうかがって。

「じゃ、付き合う？」

青春つばい、素っ気無い台詞。彼女は驚くほど素直にうなづき——あれから三年。彼女は僕の隣で相変わらず猫をかぶったまま幸福そうな微笑みを振りまいている。

天使の卵

朝、背伸びを一つして、私は気分よく目覚めた。枕もとの赤い目覚し時計を見ると、いつもより十分も早い。自然笑みをこぼしつつ、音の鳴る前に頭の黒いボタンを押す。

「今日は何だかいことあるかも♪」

窓から見える空は見事な青色。

朝食を食べ、ちよつと念入りに髪を梳かす。そんなことをしていると、あつという間に家を出る時間になり、結局、いつもと同じ時間に学校に着く。

ガランとした教室。誰もまだ来ていないのはいつものこと。

いつの間にもやら私の日課になりつつある、ベランダに植えられた植物への水やりを始め、しばらくして気づいた。アレの存在に。

隣のクラスから伸びてきているツタ草の間に、そつと置かれたようにアレはあった。Lサイズくらいの卵の形をした、白くて、繭のような……アレである。孵つてないということとは、第一発見者は私らしい。

そんな風に思っている間にも、アレは内部から薄い光を放ち始めた。私はため息を一つつき、その幻想的な光景を見つめた。

うつすらと卵から漏れ出でていた光は、やがて虹色の光に変わり、目があけられないほどになる。薄すく目を開いてみればその光の中心部に何か、物体が存在している

のが認識できる。

やがて光は薄れ、そこに存在していたはずの卵は跡形もなく消え去り、アレは羽を広げ、ゆつくりと宙に舞い上がる。

くりくりとしたこげ茶色の瞳をじつと私に降り注ぎ、ちよつと長めの甘い茶色の髪がくるくるとかわいらしいカールを巻いている。

へんだ、また佳澄かよ

小さく舌打ちとともにため息交じりの呟き声。言ったのは私ではなく、目の前の手のひらサイズの天使。

「あんたまだ修行が終わらないの？」

前回と同じヤツの反応に、私も同じ反応を返す。

天使の卵に出会える確立は、一般的には数千万分の一……であるらしい。私以外の人間にとつては。

でも、私がコイツ。この態度の悪い天使に出会うのはこれで四度目だった。

天使の卵を見つけたものは幸福が訪れるなんていわれているが、それは一番最初に天使の卵を見つけたものが、心から幸福になると、コイツらは天界へ帰れるって仕組みのためらしい。

そして、コイツはこの態度からもわかるように、まったくのダメ天使だった。何度も天界から落とされ、人々を幸福にして（偶然幸福になつてと言ったほうがいい）、天

担任は入ってくるなり、私の頭の上の物体を凝視した。

一般人に取っちゃ珍しいものだからその反応は仕方ない。

「ファム君です！」

私のかわりに隣の席の小守苑子が答える。このクラスの中でも一番、このカワイラシイ天使のことを知っていた人だ。

ヤツの名前は本当はもっと長くって、舌をかみそうなんだけれど……そんな名前を覚える気にはなれず、私は常に『ファム』と人に紹介している。

〈何だよさっきからじろじろと見やがって……〉

本当に。視線が痛いよ、小守さん。そんなにコイツが欲しいのかね？ 譲れるものならば、私はのし付けてでも譲ってあげたいよ……本気で。

ちなみに、ヤツの声を聞けるのは第一発見者の私だけだったりする。だから、みんなからすれば可愛らしいヤツの風貌に惑わされて、ひたすら私に向けられるのは羨望と妬みだけ。

へたく、どいつもこいつもバカみたいな顔して見やがって！ 何だよ、文句あんのか！？

ああ！ 本当に譲ってあげたい！！

「……ええつと、天使か？」

担任もじつと私の頭の上の物体に見入っていたけれど、やがて正気を取り戻し、

「そうか、幸福を与えてくれるってアレか！」

嘘です。それは真つ赤な嘘です、コイツに関しては。こっちが幸福になろうと努力して手に入れない限り、こいつは混乱以外もたらしちゃあくれません。

「どこで拾ったんだ？」

みんなと同じ事を聞く。私は朝から何べん繰り返したかわからない答えを返す。

「そのベランダで」

わざわざ外を指し示す。

「この教室の外でか！？ おいおい、こんな身近に天使の卵が落ちてたのか？」

それも朝から何度も聞いている。

「窓を開けようとして気づいたんです」

誰が水やりしてたなんて、優等生なことを言えようか。

「そうか、来るの早いもんな」

「はい」

大きく頷く。電車が一時間に一本もないようじゃ、どうしようもないじゃないか。

結局。

六限目が終わるまで今日はまったくついていなかった。すべては頭の上のコイツの所為だ。今日はとつと帰ろう。

と、教室を出かけたところで一番会いたくない人物、三木蓮見につかまってしまっ

た。かわいいものにはこの学校一、目が無い。

「部長お、カワイイもの独り占めしてズルイ！」

かわいらしくふて腐れてる。

ミキちゃん、私もこいつをあなたに譲ってあげたい。もろ手を振って。

ミキの頭にはピンク色の細いリボンがいくつも編みこんである。相当朝早起きしてやってくるんだなあといつもながら感心する。胸元のポケットからはクマだのウサギだの可愛らしいマスコットキャラクターが顔を覗かせ、靴下はごたごたレースやらリボンのついたもの。

見るものに食あたりをおこさせそうなほどのカワイイ格好をしている女。それが三木蓮見。

「何だ？ このアホそうなヤツは」

地元じゃ有名な進学高の生徒捕まえて、アホ呼ばわりするのはコイツくらいだろう。

「部長お、今日こそは部活に出てきてもらえますよね？ 出てきてくれなきゃ泣いちゃいますう」

両手をあごの下で握り、軽く頭を傾けて見せても、全然おかしくないってんだから、ミキも相当変わり者。

「ミキちゃん。頭痛がするから——」

「いやん、部長。前回は腹痛。その前は腰痛。それに、胃痛、胸焼け、風邪、関節の痛

み、ご家族・ご親戚・ご近所さんの祝いや喪で何回休まれたかあ……覚えてらっしゃいますう？」

「……記憶力がいいわね、ミキちゃん」

「だてに学年トップを張ってませんわ。で、部長、お返事は？」

さらりと言っているが私にとつて、それは脅迫。この部活に入る前はいつも下から十番以内だった私としては——テスト前のミキの完璧ノートにすぎるしかない私としては……答えは一つしかない。

「行かせていただきます」

「わーい！ 今日私の得意なクッキーなんですすよお！ 絶対に食べてください
ねー！！」

頭が白くなつていく。

何が悲しゆうて料理研究会の部長こと、毒見係を引き受けてしまったのか。今さらそんなこと考えても仕方の無いことだけれど。

へ……おーい、カスミン

気がつくくと、いつの間にやら家庭科室にいた。しかも、目の前ではミキが『クッキー』なるものを嬉々として作っている。

いつもながらに調理台の上には、クッキー作りからは連想できない食物が山のよう
に積み上げられている。なぜクッキーに魚介類が必要なのか、なぜクッキーに唐辛子
が必要なのか、なぜクッキーに……なんて疑問をもつていちや、料理研究会の部長は
つとまらない。

ああああああああ。寿命が縮むううううう……………

「部長、できましたあ☆」

花もほころぶような笑顔とともに、殺人クッキーはその姿をあらわした。ピンクや
レモンイエローのストライプの入った。パーナプキンの上にクッキーみたいな物体が
乗っている。

魚の切り身やたこの足っぽいのがのぞいてるのはどうかと思うのだけれど。

「さ、食べて！」

「あ……ありがとう」

比較的クツキと呼べそうな物体を一つ手にとり、覚悟を決めて口の中に放り込
む。

「……………お、美味しい？ 嘘っ」

二つ目を手にとり口の中へ。

バナラエッセンスのほのかな香り、香ばしい触感。確かにクッキーだ。見た目はグロテス

クだが、味は格別。めっちゃ美味しい。……このギャップは何？

「部長、どうですか？」

「いや、何ていったらいいのか……美味しいよ。すっごく」

「本当ですかあ！！ 嬉しいですよ！」

とミキは一つ手にとつて口に運び、「っう」と短いうめき声をあげるとその場に突っ伏した。

〈ケケッ……あんなゲテモノが美味しいわけねえだろ〉

「……何、したの？」

〈カスミの味覚を狂わせた〉

「は？」

〈もうひと欠片食ってみな〉

恐る恐る手を伸ばし、口にすると……。

「クソmaz……いつものミキのクツキーだ」

〈そうそう、それをだな、俺の力で——〉

と堕天使が得意げに語り始めたところで、私のお腹は悲鳴をあげた。

「お、お腹が痛い……」

〈あんなゲテモノ、バカバカ食うからだろ〉

……この、馬鹿天使！！

へもうちよつと幸福度満点で帰れるところだったのに。お前、天使慣れしすぎ〜
そうでしょうとも。私はあるたのせいで幸せなことがあつたらまず疑つてしまうのだ。
だから、私が簡単に幸福になれるわけが無いわけで。

こうして、四度目になる私の不幸な日々は始まった。

弁当

喧騒としたそれまでが嘘のように、まるで穴の中にでも落ち込んだかのように閑散とした静寂が訪れるのは決まって昼時。

弁当を買い出しに行く者、外食へと出る者、申し合わせたようにいなくなり、自分ただ一人が取り残される。

誰もいないことを確認し、俺は課長の鞆を広げ、渋い緑色のハンカチに包まれた弁当を取り出す。

ふたを開けてみると、昨日、言っておいた通りのサンドイッチ。

——プルルルルッ

タイマーセットでもされているかのように、決まった時間にそれは鳴る。

俺はサンドイッチ片手に、もう片方の手を受話器に伸ばす。

「あなた？」

第一声は女性のそれ。

「お弁当食べてる？」

言われて俺はいつもより低い声で、食べてると答える。

「そう」

ほっとしたような、嬉しげな女性の声。

「あなたがあんな」と言い出すから……」

と、思い出し笑い。

俺もつられてにんまり笑う。

「どこに売ってるか探しちゃった」

その声に導かれるように、サンドイッチにささったハート型のピックを摘み上げる。

「明日は、手作りのミートボールがいいな」

「ミートボール？ あなた、あんなもの子供の食べ物だって言ってたじゃない？」

「そうだったか？」

酒が入るとよく食べているから、好物だと思っていたんだが。

「甘いのがいいの？ それとも甘くないのを作りましょうか？」

「甘いのが良い」

よくそんなものつまみに、焼酎なんて飲めますねえ。尋ねた自分の言葉を思い出し、笑えてくる。

「どうしたの？ 何がおかしいの？」

「いや、何でもない」

「じゃあ、お仕事がんばってくださいね」

「ああ」

がちやりと電話は切れる。

女の感は鋭いというが……今日もばれなかった。

俺は大きく息をつき、女子高生の弁当のような可愛らしいサンドイッチを大急ぎ

で片付ける。

誰も帰つてこない間に空になった弁当箱を課長の鞆に戻しておく。最初は心臓が狂ったほど高鳴っていたものだったが、今では慣れたものだ。

仕事が終わればだいたい呑みに誘われる。参加するのは、課長を筆頭に同僚二・三人。俺もその一人。

通いなれた、チェーン展開している飲み屋で、毎回飽きもせず同じような肴を注文し、同じような酒を飲む。

飲み始めてすぐ、愚痴り始めるのは課長。

「うちの古だぬきが最近色づきやがって、男でも出来たに決まってるんだ……俺の稼ぎが悪くからって、何もそんな嫌味な真似しなくってもよさそうなんだろう？ 嫌なら家を出てきやいんだ。俺の家について、他の男を作んなくてもよさそうなんを……（中略）……騙されてたんだよ、俺はよう。若くて優しいといい女に見えちまうんだよ、若気の至りつてやつだな。でも、今じゃ見る影もねえ、古だぬきだぜ？ まったくよう、俺は騙されてたんだよお……」

なんて話が延々続く。毎回同じことを聞く部下の身にもなつてほしい。

「でも、いいじゃないですか。最近奥さん優しいんですよ？」

「ありや下心あるに決まってるあ」

「綺麗にもなつたんですね？」

「男が出来たんだよ」

課長も年の所為か、ひがみっぽくなっている。

「だから、この間言つてやったんだよ。おまえ好きな奴がいるのか？つてな。そしたらなんて言つたと思ふ？」

尋ねつつ、酒をぐいっとあおる。

「課長だつて言われたんですか？」

「……なんでわかつたんだよ？ そうだよ、俺のことじいっと見て、『あなたに決まつてるじゃないですか』なんて言いやがる。ありや絶対に他に男がいるんだ」

そう言う課長の顔は、アルコールではない朱が混じる。

「課長、明日はお弁当を食べてみられたらどうです？ 奥さんの愛情がこもったお弁当なんだから」

「……でも、なあ」

「奥さんが課長の好きなもの、入れてくれてるかも知れないじゃないですか」

考え込むように静かに飲み始める。連日の押し問答で、課長の心も徐々に傾きつつある様子。後もう一押しつてところだろう。

「明日は奥さんの弁当、食べてあげてください」

課長はどこか上の空の表情。こうなればやっと俺も息がつける。延々上司の愚痴に

付き合わされる酒など、胃が痛くなるばかり。

翌日。

俺は久々に弁当を買いに出かけた。これからは呑みにもあまり誘われなくなるかもしれない。

私の魔法

四月半ばのある朝突然、天使たちは我が街に降臨した。キリスト教徒なんて、ほとんど居やしないこの街に。

腰まである長く美しいプラチナブロンド。長いまつげ。白い、陶器のような透き通った肌。そして、背中にはお約束の真つ白な翼。

ローブのような真つ白な服は……舞い降りてから人々の善意で着せ掛けられた。舞い降りたときには、そりやもう大変だった……なんせ全裸だったのだから。

思いつくと笑えてくる。あのころのドタバタ劇を。PTAやら、婦人会やらが目くら立てて動き出し、天使が舞い降りた翌日には服が着せ掛けられたのではあるけれど——っと、ついつい話がそれってしまった。

天使の光臨はそりや荘厳なものだった。天使は胸の前で両手を祈るように組み合わせ、瞳を閉じ、ゆっくり、静かに——と見ていたように言っているが、実際、そのうちの一人（天使を数える単位って一人でよかったのかな？）は私の家の隣の空き地に舞い降りたのだ。

私は啞然とそれを見上げていた。なんたって、うちの二階の屋根の一番高いところがちようど膝にあたるくらいに巨大さだったから。

天使は舞い降りしたものの、それからピクリとも動かなかった。そこに昔からいたかのように悠然とたたずんでいるだけ。

夕方までには報道関係者、自衛隊、警察、科学者、宗教団体、野次馬……諸々の

人々が集まってきて、大騒ぎになった。

翌日。気が付くと天使は金色の霧を放っていた。目が覚めた頃にはすでに街中にその金色の霧が垂れ込めていたから、夜中から放っていたのかもしれない。

『天使の祝福』と後に呼ばれるようになったその金色の霧に、何が混じっていたのかは知らないが、それは電波を遮断する性質のものらしかった。その日以来、テレビやラジオ、無線、携帯なんかがまったく使えなくなってしまった。

天使の影響はそれだけじゃなかった。

天使はまったく微動だにしないが、なぜか頻繁に羽が生え変わるのだ。つまり、たびたび巨大な羽がひらりひらりと舞い落ちてくるというわけ。

ただ抜けるのならば良かったのに、羽は抜けた瞬間、黒く変色し奇妙な臭いを放ち始める。その臭いがずっとしているのならば近隣住民の誰もが引越しただろう。

けれど、その羽は何かに触れた途端、シャボン玉のようににはじけて消えるのだ。すると、先ほどまでの臭いは完全に消える。不思議なことだ。

そして一番の影響が――。

「ちよつと、いつまで寝てんの翔子！ いい加減起きなさい！！！」

母上の怒鳴り声で目が覚める。枕もとの時計を見ると八時過ぎ。

天使が舞い降り、ごたごたしたのは半年も前のことになる。それ以前と以後。比べても、私の生活はあまり変わっていない。私はあいかわらずこの町にある大学に通っているわけで――。

「今日は日曜なんだからゆっくり寝させてよ……」

愚痴りながら布団から這い出し、大きく伸びを一つ。

「今日は……いい天気なのかな？」

カーテンを開けてみたものの、外は真つ暗。

「昨日風強かったからなあ……」

窓からはいだし、真つ暗な屋根の上を十数年来の記憶力で歩き、幾重もの布をくぐれば――

「お、良い天気」

「変態」

すがすがしい朝に感動している私に、嫌味な声。まあ、天使のスカートの中から登場すれば言われても仕方ないわけで。

「おっはーっ」

パトロール中の植木さんに挨拶すると、渋々といった声でおはようと声が返ってくる。

この陽気に制服着て巡回なんて警察官も大変だ。

「今日も良い天気だねえ」

天使が無い降りてから我が街だけは毎日が小春日和。ますます平和ボケしそうなほどの上天気な日々。天国つてこんな感じなのかもしれない。

屋根の一番高いところに腰を掛け、胸から煙草を取り出し一服。

「お前そんなもん吸ってちゃ体に毒だぞ」

「あら、植木さんこそポケットに入ってるのは何よ」

言つてやると、面白くなさそうな顔をしてポケットから煙草を取り出し、ふかしはじめ。

「そうそう、素直が一番よね」

「大人をからかうもんじゃないぞ」

「私も、もう二十歳こえてるわよ」

大空を仰ぎ見ながら吸う煙草は格別。

「植木さん今日も警護？」

「ああ」

と苦虫をつぶしたような顔。

「今日も俺は一日この天使様の警護だよ」

と、植木さんが天使を見上げるので、私も顔を上げる。

金の粉。

光の筋。

散乱する虹色の光。

「今日もご大層なこと——」

「ああ、本当にいつ見ても……まるで天国にいるみたいだよなあ」

「うん」

素直に頷く。何度目の実感だろう。感動は薄れるどころか、増してゆく。

「これ見るとさ、この生活もいかもしいれないなあって思うんだよ……」

しみじみとした呟き声が聞こえてくる。

それは私もそう思う。でも、

「それ、大声で言ってみたら？」

植木さんは舌打ちし、

「お子ちゃまと遊んでる暇はないんだよ、俺は」

どこかへ行ってしまった。この辺の近所を、パトロールごと、散歩してくるだけだろうけど。

私は携帯灰皿で火をもみ消すと、朝食を食べるためリビングへ向かった。

トーストとミルク、目玉焼きの簡単な朝食をすまし、デザートのヨーグルトを食べべ

「はい、珈琲」

「ありがと、母上」

インスタント珈琲とはいえ、こうやってタイミングよく出されると嬉しいもの。

「あんたさあ、」

鼻をくんくんと空中で鳴らし、

「煙草つて体に悪いんだよ」

「わかってるよ。だから、一日二本しか吸わないって言ってるでしょ」

と型にはまった答えを返す。

「周り人間の体に悪いのよ」

特に私の、と嫌な顔をする。

「へいへい……で？ 今日は何？」

「ああ、何でわかつたのお？」

気色悪い猫なで声。

「母上が珈琲出してくれるときって、頼み事がある時だけだもん」

そんなこと無いわよと、一瞬むくれた顔をするがすぐに先ほどまでの気味の悪い

笑顔になり、

「はいっ」

目の前に広げられる、通販カタログ、広告の数々。

「ちよつとこれ、頼みすぎじゃありません？」

「いいじゃない。楽しみつてこれだけなんだから」

「母上の珈琲つて高くつくよねえ」

「だって、世界で一番美味しいもの。じゃ、お願いね」

「ここにこ顔で腰をあげる。」

「どこか行くの？」

「集会よ」

私にこんなこと頼んでおきながら、集会に参加とは。母もいかげんなものだ。

珈琲を飲み終わりあらためて頼まれたそのカタログや広告を見直し、その量の多さに圧倒される。でも、ま、最近魔力が増した気もするし、何とかなるだろう。

なーんて言っていると怪しい人っぽいなあと自分でも思う。けれど、どうしようもない。天使様が舞い降りてきた日から、なぜだか一部の人は魔法を使えるようになってしまったのだ。

TVゲームのRPG等のように魔力が数値化されてない分、自分で力をセーブしないと使いすぎたら死んでしまう——というまことしやかな噂もある。

で、なぜだか私もそんな一人になってしまったのだ。ある朝起きたら突然だったので、どうしてなのか、なんてことは誰にもわからない。

人によっては超能力が目覚めた……とか言ってるらしいが、私は『魔法』って言葉の

ほうが合うと思う。

能力をもてなかった人々は力のあるものと、無いものに対する政府の対応について各地で集会を開いたり、デモをしている。力の無いものに何らかの援助が必要だとかなんとかつて主張してゐるらしい。

だが、一家に一人までとはいかないが、かなりの確立で能力者がいるので本当に活動に熱心な人つてごく少数だけだったりする。大多数はうちの母みたいに付き合いで参加してゐるのだ。

「お、また母さん頼んだのか」

父が新聞片手にリビングに現れる。

「父上も何かあるの？」

「ない」

いつもながらに無愛想な父である。

私は大きく息を吐き、魔力を集中し始める。

頭の中で金色の光が収束していくイメージ。

その中心から先ほど見た品々が浮かび上がってくる――

「ハイ、ハイ、ハイ、ハイーっ」と

ぜいぜいと肩で息。カタログ中の印がつけてあった品、五品ほどを出現させる。

「終りか？」

「……………三分の一は」

「そうか」

父上は新聞に目を戻す。私は一服しようとして立ち上がり、部屋を出かけたところで呼び止められた。

「お前も気をつけろよ」

「は？」

「魔法を使った事件が流行ってるようだ」

読んでいた新聞のある記事を指差す。

「なになに？」

その指差す記事を見る。

「天使の力の保持者たちが暴動——つて!？」

その記事の隣に載せられた逮捕者の一覽写真に首付けになる。

「やはりそうか。ここに写ってるのはお前の友達か」

頷くことしか出来ない。

特に親しい友人つてわけでもなかったのだが、写真に写っていたのは確かに近藤春奈。

中学・高校と同じ学校で、何度か同じクラスにもなったことがある。

でも、彼女はこんな暴動に参加しそうな性質じゃない。同い年とは思えないくらい

大人なんだけど、ものすごい面倒臭がりな宿題や忘れ物では常に女王だった。

「なんで？」

「そういえば——これ」

と、どこからともなく父は一通の封筒を取り出す。

「何？」

「いや、新聞取りにでたときにな——お前宛てだ」

不信に思いつつその手紙を読んで私は再び驚きを隠せなかった。

「ちよつと出てくる」

慌てて家を飛び出した。

村木翔子 様

あなたも能力者ですよね？ この手紙をご覧になったら下記の場所までなるべく急いで来てください。

能力者ならば絶対知っておかなければならないことがあります。それをあなたにもお知らせしたいので。

近藤春奈

手紙の下には住所と地図。

よくよく考えてみれば面倒くさがりの近藤春奈が手紙なんて書いたりしないってわかったのに、新聞のこともあり動転していた私はこのこと指定されていた公園へやつて来ていた。

「ここ……だよねえ？」

そう言いたくなるのも当然。そこは公園のど真ん中。噴水の前。恋人同士が待ち合わせするような場所。

「村木さん？」

私の前に現れたのはどう考えてみても見たことのない女性。優しい近所のお姉さんって感じ。白いふわっとしたワンピースがフェミニンな印象。害のなさそうな人。

「失礼ですが、どなたですか？」

「ええつと……村木翔子さんよね？ 私は鈴木景子よ」

名前を名乗られても一体どこの誰なのかわからない。

「何か？」

「手紙——読んでないの？」

手紙つて、近藤春奈の手紙のことだろうか？ そこに鈴木さんなんて女性のことは

書かれていなかったが。手に握り締めていた手紙を彼女に見せながら――

「近藤さんの知り合いの方ですか？ お知らせして何です？」

「近藤さん？ お知らせ？」

鈴木さんは怪訝な顔をして手紙を覗き込む。じっくり見入った後、真剣な顔をしてくこう言った。

「こんな胡散臭い手紙を見て来ただなんて……あなた馬鹿なの？」

私の目は点になる。誰だつてそうだろう。知らない人から突然こう言われれば。

「胡散臭すぎるわ、この内容は。唯一、信用できるのは手書きのことだけね……」
なんだかぶつぶつ独り言を言い始める。

「あの、」

「あら、ごめんなさい。私、推理小説が好きなものだから――」

推理小説が好きだからって、初対面の人間をいきなり『馬鹿』呼ばわりするのはどうかと思う。

「それで、あなたは確かに能力者なのよね？」

「それって、魔法が使えるってことですか？」

私の言葉に鈴木さんはむっとする。

「私たちの組織じゃ、それを『能力』って呼んでるの。だから、使える人は『能力者』。有無を言わせない口調。なんだか目が怖い。」

「もう一度聞いわ。あなた、能力者なのよね？」

「はあ……まあ——そうですね」

「そう！ それなら組織はあなたを大歓迎よ！」

急に満面の笑顔。両手を大きく広げ、強く抱きしめられる。

「あの、私、入るとは……」

「入るべきだわ、能力者ならば！」

ある意味怖い、この人。

「——けど、組織って何です？ ——と、とっと、きやつ」

いきなり鈴木さんに突き飛ばされ、私は噴水にお尻から座り込んでしまう。鈴木さんは怪しい笑みを浮かべ、

「組織の活動は秘密なの」

ふふふと笑う。私は頭から噴水をかぶりながら、彼女を見つめるだけ。これ以上この危ない人に関わらないほうがいい。暖かい時節なことを感謝しつつ、起き上がる。

「今日のところは帰ります」

「なぜ？」

本当にわからない様子で彼女は尋ねる。こういう人種を邪険にして後々面倒ごとに巻き込まれたくない一身から、

「濡れてしまったので……」

申し訳ない、こちらのミスで……みたいな声色で答える。こういう調子が良いところはお母さんの血かも知れない。

鈴木さんはまじまじと私の姿を見、どうしてずぶ濡れなの？ とでも言いたげな顔を一瞬見せ、

「あらまあ……それは大変だわ——それじゃ、新しい服を出してあげるわ」

「……はい？」

私は通販カタログや広告なんかの媒体が目の前にないとそれらを出すことができない。けれど、鈴木さんは違った。

「これどう？」

言ったときにはすでに、彼女の手には一着のワンピースがあった。薄いピンク色の生地、白い輪郭だけの花が描かれている。全体的にふわふわとした乙女チックなデザイン。

「はあ……」

哑然とする。私とはタイプの違う魔法を目の前で見た驚きと、そのワンピースとに「可愛いでしょ？」

私の反応が気に入らないらしい。気に入らなくて当然だろう。私はジーパンにTシャツってラフな格好が好きだし、黒や紺等のどっしりした色しか着ない。そういう乙女チックな服は着たいとも思わない。

「はい、これ着てみて」

有無を言わさない口調。これって何の罰ゲームですか。

「いえ、あの……」

「遠慮しないで」

半強制的に私はその服を着せられた。スカートをはくのとって高校以来だ。

「さ、ここが秘密基地よ」

連れてこられたのはごく普通の、住宅街の一角だった。それもうちの近所。変人と名高い、柏木さんの家。

「柏木さんも能力者だったんですか？」

「いいえ違うわ」

鈴木さんは嬉しそうに笑い、

「柏木さんは組織の中で唯一の、無能力者なの」

引き戸の玄関を開ける。

「いらつしゃい！」

パンパンとクラッカーがはじけ、細長い紙テープが私の頭の上に降り注ぐ。玄関には柏木さん含めて三人。

「一体なんですか？」

「歓迎会よ」

「は？」

鈴木さんの顔をまじまじと見る。

「だから、私たちは能力者なの」

やっと理論立てて話してくれる気になったらしい。私は神妙に頷く。

「だから、あなたが能力者だつてこともわかつたのだし、組織に参加してくれるつてこともわかつたのよ」

「いつ参加するなんて言いました？」

「忘れたの？」

まじまじとそんな悲しそうな顔で見つめられても、私は一言もそんなことを言った覚えはない。その上、説明になつてないし。

「この組織は一体何なんですか？」

鈴木さんを置いて他の方々に尋ねる。鈴木さんよりもマシな答えを期待して。

「聞いてないのかね？」

そういったのはごくごく普通の格好をした、この家の主の柏木さん。たしか七十歳近い年齢のはずなのに、元学校教師だとかで、やたらいろんなことを知っている。

「能力者の権利を勝ち取る会だよ」

「……………は？」

「だから、能力の使えない人よりも能力的に優れてるんだからもっと良い権利を得るための会なのよ！」

鈴木さんが言い直す。

「いや、私は別に——」

「能力のない人と同じ権利しかなくてもあなたは平気なの？」

「はい」

とは答えられない気迫。どんなことをしても鈴木さんから逃げるべきだった。主義主張なんてもの私にはない。

まだまだ言い足りない様子の鈴木さんを柏木さんがなだめる。

「彼女も話を聞いていないんじゃないじゃ仕方がない。説明するから上がりなさい。ああ、鈴木さん、君は今日のところは引き取ってもらってもいいかね？」

さすが元高校教師。有無を言わさない雰囲気。鈴木さんは大人しく帰っていった。

「根はいい娘なんだがなあ……」

柏木さんはため息を漏らしつつ呟いた。とりあえずのところは助かった。

茶の間に通される。テーブルの上にはウーロン茶の入ったグラスが三つ。

「君は適当な場所に腰を下ろして」

私は愛想笑いをしつつ、グラスのない場所に腰を下ろす。部屋には先ほどの紫色の

つぎはぎだらけのシャツに、レースがこごこてついた黒いスカートをはいたショートカットの女の子と、龍のイラストの描かれた青いTシャツにジーンズ姿の男の子が残った。柏木さんが台所だと思われる場所に引つ込むと、

「私は山田仁美。こっちは弟の幸成」

と、たぶん中学生くらいな女の子が、小学生くらいの子を紹介してくれた。

「私は村木翔子——あの、これなんなの？」

まともそうだと判断して仁美さんに答えを求める。この組織について。

だが——予想は見事に打ち崩された。

「歓迎会つてやっぱジューズとかご馳走とか……部屋飾ったりしないとダメですよ
ね？」

「いや……そればつにいいんだけど——」

何も聞き出すことができないうちに、柏木さんが戻ってくる。

「はい、どうぞ」

ウーロン茶とお菓子。私は少し遠慮しつつ受け取り、

「お知らせってなんですか？」

鈴木さんにも見せた手紙を柏木さんにも渡す。

「ああ、これは私が書いたものだ」

柏木さんは頷きながら受け取り、

「不思議に思わなかったかね？」

逆に質問された。

「いや、何がですか？」

私が間抜けなんじゃない。質問の意図が分からなかったただけだ。

「たとえばだ、」

と、長いたとえ話をしはじめたのを少年——幸成だったつけ？ がさえぎり、簡略に説明してくれた。彼がいなけりや、通常、二十分は話を聴かなけりやならないはずだった。柏木さんの話が長いのは、町内でも有名だから。

「僕的能力なんです。村木さんがここに来たのは」

「は？」

間抜けな私の声。能力つてのにはいろいろあるらしいってことは知っていたが、このときにはまだ、幸成君の能力がよくわからなかったからだ。

「どんなことがあったって、村木さんはこの家に来ることはないし、どんな名称であれ組織にかかわろうともしないですよね？」

そりやそうだ。興味ないもん。

「でも、今日は朝から何か違っていましたよね？」

違つてたこと……そういわれればちよつと納得せざるを得ない。

普段ならば朝から父上に会うことはない。私が新聞やニュースを見ることも無い。

私宛の郵便物は家に届いてから半月から三ヶ月以上かからないと私の手元には渡つてこなし、まして怪しい手紙に誘われて出かけるような事はしない。それに強引だったとはいえ、知らない人について来たりはしなし、柏木さん宅に来ることも、こんな組織があることを知ることもない……

「つまり、私がここに来たのは幸成君の魔法つてことなのね？」

「そう……いうことになる……か」

歯切れ悪く柏木さんが答え、ウーロン茶を一口すすする。

「それにしても組織つていうわりに、四人だけなの？」

鈴木さんが言っていたわけのわからない活動内容は聞かない事にした。

「いや——」

柏木さんがむつと顔をしかめ、

「ここは第三支部だから」

「支部つて——え？ 本当は大きい組織なの？ ……つてことは新聞に載つてた暴動つてこの組織がやつてんの？」

私は帰ろうと立ち上がる。どんなことだろうと私は面倒ごとには一切、巻き込まれたくない。だいたい私の能力つて微々たるものでしかないわけだし。

部屋から出ようとしたところで、何かに上から押さえられ、また座り込んでしま

「今が私の能力なんですよ」

得意げに笑っているのは仁美さん。

「能力って……」

問い掛けて黙り込む。他人の行動を制御できる能力だろうか……？ だとしたら、『絶対』の上に『超』がつく、関わりあいたくない人間ってことだ。私は先ほどまで座っていた位置に座りなおした。

見ない、聞かない、騒がない——そして嵐が通り過ぎるとのひたすら待つのが、こういうヤバイ時の一番の対処法だ。

「とりあえず、仁美さんと幸成くんさえいればこの組織ってパーフェクトでしょ？ 私みたいなちやちな能力者はいらなんでしょう？」

デモを起こしたり、権利を主張するのであれば私の能力は絶対に必要ないはずだ。三人は困った私の問いかけのような、驚いたような、それでいて可笑しそうな顔をして私の顔を穴があきそうなほど見つめた。

「な……なに？」

「いや、君がそう思ってるのならそれでもいい……」

そう、このときの思い違いに後で私は気づくことになる。

「君が来るまで話していたことなんだが……天使のことだ」

「はあ……」

いまさらワイドショーなんかで議論し尽くされた話題を持ち出されてもこんな反応しかできない。

「君はあの天使、どこから来たと思うかね？」

ワイドショーなんかで幾度となく検証されたけれど、結局いまだによくわからない。『宇宙人説』とか『魔法で出現させた説』とかいろいろ出回っているけれど。

「わかりません」

「君はあれ、天使が出現する前に、どこかで見たことないか？」

そんな風に言われても、昨日の夕食だつてまともに思い出せないような鶏並みの記憶力しか持ち合わせていない頭なのだ。

「以前、君は見ているはずだ。そして、深く感動している」

「どこかで読んだのかも知れないです」

幸成君が言う。

「読む？」

「天使が世界中に現れるような小説……絵本とか、漫画とか、映画とか……とりあえず天使が出てくるような作品を見たことは？」

「いや天使なんてあっちこっちに出てくるし……でも、たぶんあれに似た天使は見たことはないけど」

私の言葉に三人は、

「村木さんでもなかったのか」

「今度こそ、そうだと思つてたのに……」

「はずれか」

柏木さん、仁美さん、幸成君、口々に落胆の声を漏らす。

「一体何が!？」

どう考えても蚊帳の外に置かれた状態の私としては、いい加減腹立たしくなる。

「私はね、『魔法による出現説』を指示してるんだ」

半分落胆した表情の柏木さんが話し始める。

「魔法が使えるようになったのは、天使が出現する直前だと考えているんだ。それに
はわけがある——」

「結構です」

長い話を聞かされそうだったので直ちに断る。

「興味がないようですね」

幸成君があきれた顔をし、仁美ちゃんは菓子に手を伸ばす。

「私は別に魔法があつてもなくてもいいもの」

立ち上がりかけた私は再び、腰を降ろすことになる。

「質問を変えてみたら?」

菓子を食べながら仁美ちゃんが提案する。何が何でも私を犯人に仕立て上げたい

のか、この三人は。なんて思いたくなる場の雰囲気。

「天使が降臨した日、あなたはどこでどのようにご過ごしていましたか？」

それって、ワイドショーで散々魔法使いに質問していた内容じゃん、なんて軽く受け流せる空気はそこにはなかった。

つまりはあれだ。『急がば回れ』。質問にさえ答えれば帰らせてくれるだろうと淡い期待を抱きつつ、私はあの日のことを思い出す。

四月半ばのあの日、私はいつものように目を覚ました。

むつくりと起き上がり、換気もせずに一服する。部屋に紫煙がただよい、カーテンや衣服に匂いが染み込んでゆく。

吸い終わるとやはりその光景には我慢できず、カーディガンを羽織って窓を開け、紫煙と匂いを追い出す。

そのころになって階下から母上の起きろコールが始まる。手早く着替えを済ませ、忘れ物がないか嚴重に点検し階下へ降りる。

トーストにそのころはまっていた黄粉胡麻。ペーストなるものを塗り、コーヒード流し込む。ふとテレビに目をやれば、街角アンケートなどやっている。興味はないものの、目を離すことも出来ず見ていればあつという間に家を出る時間。慌てて仕度を済ませ、玄関から転げ出る。

バスを二本、電車二本を乗り継ぎ、山奥に立てられた学校に到着。

電車もバスの中も溢れかえす人々の臭い切れで酔いそうになる。バスを降りたらずぐに深呼吸を繰り返す。

校舎までの長い長い道のりをとぼとぼ歩いていると、

「おはよー！」

いきなり背中をたたかれ、前のめりにこけかける。

「ごめんごめん、大丈夫？ それよりさあ——」

悪びれる様子もなく、いつも通りのおしゃべりをはじめるのは佐藤尚子。とは言ってみても話しているのはいつも彼女一人なのだ。

私はいつもながらに上の空で話を聞きながら、適当なところで相槌を打つ。

尚子はこの学校に入って出来た友達だ。でも私は尚子のことを何も知らない。友達であるにもかかわらず、尚子に関しては学校に関することが全て。誕生日も、家も、住所も、電話番号も知らない。尋ねようと何度も思ったのだが、尚子のおしゃべりは止め処ない川の流れの如し。私が口をはさむ隙間など一ミリもなく、今日まで来てしまっていた。『なおこ』が『尚子』という漢字を書くのだということを知ったのもつい最近のこと。

「私自分の名前好きじゃないのよ。だって、和尚の『しょう』って字を書くんだよ」

そう聞いて、『直子』じゃなかったのかと感心したくらいなのだから。

「綺麗だねえ……」

尚子が指差す方を見る。遠くの山には未だ雪が残っているらしく、真つ白く輝く山と手前の淡い黄緑色の山との対比が見事。

「私はこの時期が一番好きなんだよね」

しみじみと言葉を吐き出す尚子。

「銀白の雪原が一番好きなんだけど、寒いでしょ？ あれには耐えられないんだよね、それに黄緑色も好きだから……今の時期って一石二鳥でしょ」

「確かに」

上の空でうなづく。遠くの雪山を眺め、寒そう……なんて思いつつ。

「それに、前から思ってたんだけどさ、ちょうどここいらから見た景色って——」

不意に言葉をとぎらせ、何か重要なことでも言うかと思えば、別の話題に移る。

尚子はこんな会話を良くするから私も気にとめない。

今日の日程は午前中で終わる。ドイツ語と、パソコン実習を受けたら終わり。さつさと帰って、部屋でこの間買った雑誌でも読みながらいたら過ごそう。

「——あ、そういえば、今日休講って知ってる？ 休講にするんなら二日前には掲示板にでも張り出しとけばいいのにねえ」

「えっ何が！？」

と私は尋ね返し、尚子は再び言い直す。

「ドイツ語もパソコンも休講だって。せっかく休講にするんなら二日前には掲示板にで

も張り出しとけばいいのにねえ」

その言葉で立ち止まる。

「どうしたの？」

不信そうな尚子に私は一言、

「……帰る」

来た道に戻る。

話し相手を突然無くした尚子は、寂しそうな顔を見せるがすぐに知った顔を見つ
け、駆け寄ってゆく。相手が尚子に気づき微妙に迷惑そうな顔をするに気づく様子
もなく。

実質的に学校へいたのは十分少々。なのに往復するのに三時間。本当に時間と体
力とお金の無駄。無駄なことは大嫌い。

自宅近くのコンビニでサンドイッチとストレートティー、クッキーなどを買い込み家
に帰る。

ジーパンにトレーナーとラフな格好だったので、そのまま窓の外——屋根の上へと向
かう。

屋根の一番高いところに腰をかけ、まずは一服。紫煙はあつという間に春風に運
ばれ霧散する。吸い終わるとサンドイッチを食べる。風は冷たいが日の光は暖かい。ぽ
かぽか陽気の中で私はまどろむ、この時間が昔から一番好きだ。

「おい」

下のほうから呼びかけられる。

「植木さん……だっけ？」

「いいかげん名前を覚えろ。お前はそこで何をしてるんだ？」

不信そうな顔。その目つきも声も小さな子供ならば泣き出してしまいそうな凄みがあるのだが、何せ相手は地上、こっちは二階の屋根の上。私は何の気負いもなく、半笑いを浮かべ答える。

「趣味よ、趣味。日向ぼっこってやつ」

「いい年した若い女がそんなところでタバコ吸って、昼食取るのは関心しないが」

「まあ、考え方が古いのねえ。そんなだともてないわよ」

「別にかまわない。近々見合いもするからな」

「……そう」

見合いなんて小説やドラマの中の話だと思っていたのに、実際にする人がいることに驚く。

「お見合い写真あるの？」

「あるがお前には見せない」

私の言葉を予測して先に釘をさされる。

「なんで？」

「見せる必要性がない」

シンプルかつ的確な答え。

再びタバコをくわえ、大の字に寝転がる。布団を敷いていないので、こつこつした瓦が痛い。

「危ないぞ」

「大丈夫よ、昔からしてることだから……今日は本当にいい天気」

大きく伸び。

春にしては綺麗な空色。

「そうだな」

植木さんはいつも律儀に答えてくれる。忙しいと口では言いつつ、結構暇なのかもしれない。

いつまでもこんな日が続けば良い。眠くたくなるくらい平和で、のんびりしてて、穏やかな日だ。そんな願いが適わないってわかっているからこそ願ってしまう。

しばらくそうやってぼおーっとしていたが、飽きてきたので部屋の中に入って雑誌を読んだりテレビを見始める。

クッキーを食べつつ、ストレートティーを飲んでいると気が付けば夕方。肌寒くなってくる前にもう一服するか、と窓の外に出て定位置に座り空を見上げる。

昼の鮮やかな空とは違い、ほんのり灰色と朱色を帯びだした空。こういう空色も

好き。

徐々に空は紅みを増し、太陽はその輝きを失いつつ、山の背に沈んでいく。金色の光の帯が街の一角を射る。

「本当に。こんな日がずっと続けばいいのに——あれっ？」

私は目をこすり、沈み行く太陽を良く見る。

「あれえ……っ？」

首を傾げてみるが、絶対にいつもの太陽とは違う。太陽と同じ色、同じ形をした物体が太陽の手前にある。

「何、あれ……っ？」

声に出してはみても、誰も答えてくれる人は居ない。

頭の中にいろんなことが浮かんで消えてゆく。思い出せないような些細な記憶、小さなころの思い出、思い出したくもない過去、そんなものすべてが頭の中で自動的に流れてゆく。

「何？」

混乱。

頭だけが別物のように必死にすべてを思い出そうとしている。

「何なの？」

私は混乱した頭を抱える。目は太陽から離せない。

(……ソウ……)

声。

耳元、いや、頭の奥のほうで聞こえる囁き声。

(…………ミル……ナタノ……)

何を言っているのか、何が言いたいのかはまいちつかめない。でも、敵意がないのはわかる。

「一体、何？」

(……メル……ユルシヲ……)

やつと単語が現れた。けれど『許し』って何だ？

私は落ち着いていた。こういう混乱しているときのほうが、落ち着いていられる性質の人間だから。

「雪……銀白……白？」

不意に浮かんだイメージ。

(……シイモノ……ミル……)

「白、翼、天使、髪、長い……」

たぶん、私の記憶の中に埋もれていたイメージをこの声が頭の中に浮かび上がらせているのだろう。何らかの法則にしたがって。

(……ワカッタ)

『わかった』って何が……？』

声は唐突に途切れ、記憶の再生も終わる。太陽はいつのまにか沈んでしまい、宵闇に包まれている。先ほどの出来事がまるで嘘のように。

大きく息をつき、体を起こす。記憶を呼び起こすためにフル回転した頭は疲れきっている。ゆっくり風呂につかって、さっさと寝よう。

屋根から降りかけて、空が妙に明るいの気づいた。

頭の真上。天の高いところ。白く光る星——光。徐々に大きくなり、それが銀白の天使だと気づく。

「——なるほど」

男の声に我に返る。

「あれ？ あれ？」

目の前にいるのは柏木さん、仁美ちゃん、幸成君。それに植木さん。

「原因は君か」

「え？ 何？」

私からすれば授業中に気づくと当てられてたみたいな感じで、まるで状況の判断がつかない。

「俺も能力者なんだ」

植木さんが語る。

「鮮明な記憶を相手に呼び起こさせることが出来る……なんてちんけなものだが、犯罪捜査には便利だ」

不適に笑う。普段の顔も怖いのが笑い顔はそれ以上だ。

「私が犯罪者だったってこと？」

「そうだ」

植木さんはため息をつき、柏木さんは大きくうなづく。仁美ちゃん、幸成君は面白そうに私の顔を見つめている。

「あの、何がなんだかさっぱりわからないんだけど」

面倒くさいことに係わり合いになるのは嫌だけれど、当事者ならば事情を全部知りたいというのが人情つてももの。だが、

「君の言葉を借りるならば、『さっぱりわからない』」

柏木さんは言う。

「原因である君にわからないことが、我々にわかるわけがないだろう」

「じゃあ何の原因なのよ、私は」

「天使だ」

柏木さんは言って、窓から天使を見つめる。

「でも、私天使なんて見たことないって言ったでしょ？」

「言葉が足りなかったみたいですね」

幸成君が気の毒そうに言い、

「人には想像力があります。それに記憶はあやふやで、思い出せない部分は他の記憶で補うこともあります」

小学生とは思えない言葉。

「幸成つたらおじいちゃん子で」

仁美ちゃんが可笑しそうに笑う。

「おじいちゃんって変わり者ね」

言おうとしたところで、同じように笑っている柏木さんに気づく。よく見れば、幸成君と柏木さん雰囲気似ている。

「じゃあ、私が天使の原因なのね」

開き直ったように言ってみて、あることを思い出す。

「でも私、鈴木さんと違って、カタログなんかの商品を物体化させることしか出来ないんだけど……」

鈴木さんは私の目の前でワンピースを取り出した。

「彼女は物体移動が出来るだけだよ。しかも、自分の部屋の中にあつて在り処がはっきりしているものだけね」

柏木さんは冷たく言い放つ。

「君はゼロからでも物を出現させることが出来るが、それが出来ないと思ひ込んでい

る。一から創造することは難しいから仕方がないとも言えるが……」

「でも、それだったら私にはあの天使は出せないでしょ？」

「そのときは、君の言う『声』が天使のイメージ作りを手伝っていたと考えられる
そういうものなのか。」

「では君の疑問も解けたところで、そろそろあの天使を消してくれないか」

「……は？」

私は聞き返す。

柏木さん、植木さんは絶望的な眼差しで、

「消すことが出来ないのか？」

「たぶん……」

というか、消そうと思ったこと自体ない。

「そうか……」

柏木さんは小さく頷く。

「力が消えるまでは無理か」

「消えるんですか？」

私は驚いて尋ねる。

「さあ……なんとも言えないが、突然始まったことは突然終わりを迎えることは良
くあることだ。ずっとこの非現実的なことが続くことも十分ありえるが……」

植木さんは言葉を濁し、ウーロン茶を一口飲んだ。

「あの、ここって『能力者の権利を勝ち取る会』とか言っていましたよね？」

私の問いかけに、柏木さんは何でもないことのように、

「あれは鈴木君を仲間に入れるための方便だよ。『天使と魔法の因果関係を調べる会』と言ったら良いか——特に正式名称があるわけじゃないが」

じゃあ、第三支部ってのは間違っていないって事？　なんでそんなに多くの人が魔法や天使について調べているのか私には興味も無いし、理解できない。

*

話し合いは良くわからないまま終わり、私は帰途につく。すっかり夕闇が立ち込めた街は、なんだか寂しい。

部屋に辿り着き、屋根に上がる。一服しながら夜空を見上げると、星星が光り始めている。

妙な話を聞かされたからか、なんだかイライラして仕方ない。大きく煙を吸い込んで、吐き出す。

羽毛にくるまれたような、暖かで柔らかな毎日。何も心配が要らず、天気も毎日穏やかで。変わらない日々が何故だか腹立たしくて。

「明日は雨になればいいのに」

棘のある言葉を呟いた直後、

(……タカ……)

不意に声。あの声。

(……タチノ……ワカツタ)

「何よ、何が『わかった』のよ」

声がそれに答えることはない。

(……レテ……ガトウ……)

「え？」

天使は淡く光り始める。祈りが終わったのか、長い睫の下の瞳を開ける。そこには澄んだ春の空色。白い翼をゆっくり広げ、ふわりと空に浮かび上がり、高く高くあがってゆく。

突然始まったそれらの出来事は、何の説明もされず、誰も納得出来ないままにこうして終わりを告げた。

天使が小さな点になってしまうと、

「今日は星がたくさんだ」

私は呟き、紫煙を夜空に吐き出した。

金魚

「暑い……」

こぼして、あたしはこてつと縁側に寝転がる。

手を伸ばせば届く位置に、昨日の縁日でもらった金魚と、いかにもな金魚鉢。

すい、すいと一つ。

赤い影が水面を滑る。

すい、すいと一つ。

それを追うように走る波紋。

「涼しそうだな、お前は」

金魚は不思議そうな顔をして、ガラス面に映る自分の不細工な顔をコテコテとつつく。

「あほだな、お前は」

暑くてたまらない。

うだるような夏の午後。

十

「やっぱり日本人は浴衣だね」

会つていきなりじじくさいことを言う。

「あんたさあ、似合つてるとか素敵だねとか気の利いたこと言えないの？」

浴衣は見た目は涼しいが、着ている者には意外と暑い。来がけにもらったどこかの商店の名が入った団扇が手放せない。バタバタ仰いでいると、

「似合ってるよ」

困りきった顔。

「そういう顔で言われて嬉しいわけないでしょ。よく覚えときなさい、じゃなきや恋人の一人もつukれないわよ」

幼馴染の腐れ縁。言いたいことをはつきり言つてさつさと歩き出す。目指すは林檎飴、綿菓子、クレープ、たこ焼き、七色ソーダ水！ 軍資金はたつぷり準備してきた。

「さて、用事は最初に済ませなきやね」

町内会の用意したしよぼいくじを引く。一等が三千円相当の商品券(近所のスー

パーのもの)に始まり、ゴミ袋、ゴム手袋、台所用荒い桶、タオル、亀の子だわし、洗剤、石鹸、歯ブラシ……おばちゃんでもなきや欲しがらないような商品。

手製らしいくじの入った箱を引つ掻き回す。手に触れた紙を適当につかみ持ち上げる。三角形に折つた赤の折り紙。

当たつたのはタオル。これで三等。しかも、どこかの商店の名前入り。馬鹿にしてる。がっかりしてる横であいつは、一等を当てる。別に商品に興味もなけりや、欲しくもないがなんとなく悔しい。

それが顔に出たのか、あいつは毎年同じ言葉を繰り返す。

「交換しようか？」

私が返す答えが同じことを知っていながら。

「いらぬわよ、そんなもの。来年こそは勝つてやるから」

「……そう」

いつもながらに腹の立つ態度。つかかってくれば可愛らしいものの、ヤツは三日早く生まれた私に遠慮してか、昔からとにかく大人しい。

たこ焼き、いか焼き、バーベキュー。お好み焼きにたこ焼き、林檎飴、クレープ、カキ氷、バルーン、綿菓子、人形焼、七色ソーダ……とりあえずは一通り制覇。

近所の田舎祭り。私ぐらいの歳になるとだれも祭りには来ていない。知り合いもないので、さっさと帰りかけた私はあいつの姿を見つける。かがみ込んで金魚すくいをしている姿を。

「捕れた？」

尋ねつつ覗き込んでみるが、ヤツの手元の器にいるのは赤い金魚が一匹と、黒い金魚が一匹だけ。

「あんたいくらつぎ込んだの？」

そう聞きたくなるのも無理はない。手元に積み重なる敗れたポイの数は……ぱつと見には数え切れない。

「久々にやるとはまるもんだね」

「そういう問題じゃないでしょ？ あんた……お土産買わずに帰ったら怒られるんじゃないかった？」

毎年の事ながら、ヤツは言われて初めて気づいたかのような顔をして、私をじっと見つめる。無表情で財布の中身を確認し、視線はゆつくりと私の手元の品々に移り、もう一度絶望的な顔で私を見る。

「いくら残ってるの？」

「千円くらい」

「今晚は何を食べるの？」

「お好み焼きか焼きそば……安いほう」

語尾が小さくなる。

とすればお好み焼きか。でも、お祭りの焼きそばは高い。一人前が五百円。三人家族のヤツからすれば一人分足りない。

すがりつくような顔で私をじっと見つめる。

「そんな顔で見られても知らないわよ、私は」

「焼きそば、買ってるよね？」

ソースの匂いに気づいてか、私が左手に持つ袋をじっと見つめる。

「確かに買ったわよ？ でもね、あんたにあげるわけにはいかないのよ」

「……交換して？」

「は？」

「ええつと、これと……」

出してきたのは赤い金魚。

「これと焼きそばとを交換しろと？」

「うん」

うなづく顔は子供と変わらない。だが、くじ引きで当てた一等の商品券を出してこないあたりが計算高いとも言えるか。

「あんたが金魚なんか大金つき込むのがいけないでしょ？　なんで私が金魚と焼きそばを交換しなきゃいけないのよ」

言いつつも、私の心はあげるほうに傾きつつある。三日早く生まれた宿命か、どうも姉的性格が身に染み付いてしまっている。

私は金魚と手元の焼きそば、そして情けない顔をしたヤツを順番に見やり、

「今回は仕方なく交換してあげるけど……今度何かおごりなさいよ？」

私が差し出した袋をヤツは受け取り、焼きそば屋に向かって駆けてゆく。
やれやれと私はため息を一つついて帰途につく。

十

縁日があったのは昨夜のことです。

生ぬるい水の中、赤い金魚はただ独りゆらりゆらりと泳いでいる。水草でも入れてやるか？ いや仲間を増やしてやったほうがいいだろう。一人でいるのは寂しすぎる。思い浮かんだのはヤツの黒い金魚だった。

スノーホワイト

■ 十二月五日 ■

「ちくしょう……」

世間様の行事に疎い私に、有難迷惑にもそれを気づかせてくれるのはこのエンドレスのクリスマスソングと年末セールの謳い文句。

「……もうそんな時期か」

華やか過ぎるほどの飾りつけ、音楽、人々。

何が楽しくてこれ程うかれているのかと問われたら、日本人は根っからのお祭り好き体質だからとしか答えようがない。なんてどこかで聞いたセリフをいまさらながらに思い出す。

けれど純粹な日本人であるはずの私はそれを素直に喜べない。

年末年始は悪夢だ。ただでさえ忙しいのに、それに「超」が付く日々が始まる。はっきり言って、去年死んだ爺ちゃんの後を継ぐまでこの仕事がこんなに大変だなんて思ってもいなかった。

「ぼっきやろー」

真冬の海に叫んでやる。

ぎよつとしたカップルが振り向き、「振られたのかしら？」なんて哀れんだ瞳で見てるので、ギロリと蛇のような目で睨み付けてやる。

まったくやってられない。

一つ重いため息をつき、きびすを返す。

「ただいま」

旧式、というよりもボロい玄関の戸をガラガラ開けて家の中に声を掛ける。

「……………お帰り」

奥の部屋から暗く沈んだ、ジンさんの声がした。

「どうしよ……………もうクリスマスの時節やあ……………」

よたよたと私を出迎えに来てくれたが、怪しい呪文でもつぶやくような様子で言葉を繰り返す。他にも何か言っていた様子だが、聞き取れなかったし、聞き取りたくも無かった。

ぼさぼさに伸びきった髪の毛のわりに清潔そうな身なり。いつ購入したのか分からない黒い薄手のダンガリーシャツにストレートのジーパン。時々寒くないんだろうかとちよつと心配もするが、体温の低い彼にはそれほど問題は無いらしい。

彼はいつもは無表情、無愛想、何を考えてるかまるでわからない。けれど切羽詰ると泣き事を言い出し切れる、はた迷惑な性質。

「今年は大丈夫やて」

ジンさんの後ろから顔を出したのはメイさん。肩までの髪に、仮面のように張り付

いたような笑みを浮かべ、言葉の語尾には常にハートマークつき。色の淡いタートルネットに、事務的なスカート、薄汚れた白衣をまとっている。いつでもどこでも誰にでもこういう接し方。人懐こいのはあるが、どこか計算しているようにも思え時に殴りつけてやりたくもなる。

ジンさんとメイさんつて、二人を足して割ったぐらいが絶対ちようどいい。「で、準備はどの程度まで進んでるの？」

私は二人に声をかける。

「まだ……全然やねん……」

ジンさんが涙ぐみながら答え、

「もうちよつとや」

特大の笑顔でメイさんが答える。

二人の異なる言葉に首を傾げつつ、

「仕事の状況を確認させてもらいまししょうか」

作業部屋へと向かう。

袋に詰められ、圧縮されたそれは予想していたよりも多い。

「数、足りてるんじゃないの？」

「せやから心配することあらへんって言うてんやけどね」

とメイさん。

「そんな大雑把な仕事でええと思うてんか？ 俺等の仕事は繊細で——」

「数があれば良いと私は思うけど？」

ジンさんが熱を込めて語り始めたところで私は強制的に話をさえぎる。

毎年のこととはいえ、仕事の大雑把なメイさんと、繊細なジンさんは揉めていたらしい。

「せやけど、こんなんあかんて」

と近場の袋を破つて中身を散乱させる。

「ジンさん！」

「こんなんでええと思うんか、お嬢は！」

と、数袋を駄目にしたところで袋の中身を片手にとり、私に突きつける。

「ひどいやん、うちの仕事を台無しにしよつてからに！」

メイさんとともに湧き上がった怒りは、『超』粗悪品の前に急速にしぼみ、言葉を失った。

ジンさんから手渡され、ふわりと片手に乗せたそれは、一見してどう見ても明らかに粗悪品。もう片方の手に持ち替えようとすれば、小さな音を立てて形が崩れる。

なんやねん、これ。

どうつくつたら、こうなるねん。

どうやったら出来んねん。

こんな阿呆な品が。

「この時期になつてあんた、この量を作り直すつちゅーんか？」

メイさんが笑顔のまま声を張り上げる。それはそれで怖いものがある。

「こんな粗悪品、誰が望むつちゅーねん！　ワシらの仕事はもつと繊細で美しく芸術的で——」

ちよつとマニアックなことを言い出すジンさん。いや、匠ゆえなのか？

「材料の質が落ちとるつちゅーにそんな手間隙掛けられるか、阿呆うつ！　昔みたいな良品作つとつたら時間がいくらあつても足らへんわ」

「せやけ言うて妥協しとつてもあかんやろ！」

「なんやて？　アンタみたいな職人気質しとつたら仕事にならんへんねん。ウチが仕事せえへんかったら誰がこの仕事片付けられんねん！」

毎年のパターンに巻き込まれている。確実に。

「二人とも五月蠅い！！」

ジンさんとメイさんは肩で息をしつつ、私の顔を見る。喧嘩両成敗。どちらの言い分も正しくて、どちらも間違つてる。

「ジンさんにも一理、メイさんにも一理ある。ジンさんはもうちよつと仕事のスピードをアップさせて。メイさんはもうちよつと繊細な仕事して、ね？」

私が微笑むと何故だかいつも喧嘩は収まる。不思議なことに。

パン、パンと手を打つて、二人を仕事に追いやる。

しづしづと言った様子で仕事を始めた二人だったがすぐに熱を入れ始める。二人は似ていないようで似ていると私は思う。

ジンさんは茶色い紙袋から取り出した白い粉を蕎麦打ち用の鉢へ適量入れる。といつてもこれから蕎麦を打つのではない。

また別の袋から取り出した虹い粉、銀色の粉を少量それに加え、水を加えつつゆっくりとそれらの粉を混ぜるようにほぐしていく。途中までの肯定は蕎麦うちとほぼ同じ。

ジンさんの仕事はほとんど同じ事の繰り返しなのだけれど、何時間見ているも飽きることはない。

カチン、と硝子の当たる音。私は大きなため息をつきつつ私の背後で仕事をしているメイさんを見る。雰囲気を出すためだとかいう理由でなぜだかぐるぐるの伊達めがねと薄汚れた白衣を羽織り、薄ら笑いを浮かべつつ——時にくすくす不気味に笑

いながら——作っているのはジンさんと同じもの。

どこかで手に入れてくるのか、緑色の沸き立つ液体の入ったフラスコ、薄く甘いおいのする煙、赤紫色の液体が入った回転するビーカー。常に液体で満たされているところを見ると、これも白衣なんかと同じでただの雰囲気を出すための飾りなんだろう。

ボン、とメイさんが右手に持った試験管から金色の煙が吹き上がり、

「出来たで♪」

メイさんが怪しく微笑む。何でこの人は、こんな姿が板についているんだろう。

三角フラスコの中からあふれ出す出来立てのそれを私は少し分けてもらい、念入りに見やる。確かに、今度のはまともだ。

「今度のはOK。だけど、あの粗悪品はどうやって作ったの？ 作り方は同じでしよ？」

私の問いにメイさんは怪しく微笑みながら、

「作業工程を二・三省いてん。それに全部目分量やったし」

「ああ……」

それ以上の言葉がつけない。

しばらくしてジンさんのほうも出来たらしい。

出来上がったばかりのそれはダイヤモンドのようにいろいろな色に輝いている。ジン

さんは絶対天才だ。その出来に思わずため息を漏らす。

「芸術的……」

メイさんがむっとした表情で、

「なんやの、ウチへの感想とえらい違いやね」

「メイさんもこれと同じものが作れば言ってあげる」

私の言葉にメイさんは何も言わない。言葉をつむげない。彼女だってジンさんの腕前は認めているのだから。

「ま、今年もぎりぎりセーフで予定量には達つせそうやね」

メイさんが第二弾を作り始めながら、歌うように言う。

その言葉に私は頭が痛くなる。

「今年は風邪、ひかんようにね」

嫌味だ。

「今年は大丈夫やなあ？」

ジンさん、泣きそうな顔して私を見つめないでほしい。本当に心臓に悪い。

「だ、大丈夫……」

「うちの仕事が間に合えばお嬢が風邪ひくし、うちらが間に合わん年はお嬢は元
気やし……作りすぎた年は、お嬢が張り切りすぎて予定日より早ようまいてし
まうし——」

「前向きに善処します」

「おつし、その言葉よう覚えとくわ。な、ジン」

「……ああ」

なんだか楽しそうに頷きあう二人。こういう時は息がぴったりだ。

■ 十二月十九日（一） ■

まあ、何というかご期待通りに事は進み、私は先週寝込んでいた。噂をすれば影、なんていうからメイさんの釘刺しは私の風邪の呼び水になっていたのかも知れない。

なんて事は本人を目の前には、まったく絶対言えないけれど。

「あら、平気なの？」

玄関先で肩で息をしている私の顔を見てのメイさんの第一声。妙に親切ぶった声色が嫌味つたらしい。

「お嬢、大丈夫ですよねえ……」

よよよ……と私の顔を見て泣き出すジンさんは悪意が無い分、よけい性質が悪い。

「はい、今度のことはすいません、ごめんなさい、申し訳ありませんでした、以後気をつけます、絶対にこのようなことは今後無いように……」

ここ一週間、言いなれた台詞は私の脳をかえさずともべらべらと口から飛び出る。なんだかどこかの政治家のようだと思つた自分自身あきれ返りながらも。

「この忙しい時期に一週間も寝込んでいた身としては、謝り倒すしかない。子一時間ばかりそうしていただろうか、やっとメイさんの愚痴も勢いが無くなり、ジンさんも泣きつかれた表情を見せ始めたところで話を切り替える。」

「で、あれは出来たの？」

「この言葉で立場は逆転。どこか遠いところを見つめ、妙に嬉しそうな笑いを浮かべるメイさん。きよろきよろと視線を泳がせ、挙動不審になるジンさん。」

「あんたの看病してたんやで、そんな……」

「寝込んでいる間、ジンさんが風邪薬と栄養ドリンク、飲むゼリー、それに冷却シートを持ってきてくれていたのはすっかり記憶してるんだけど、メイさんは何をしていたの？ ちっとも顔、見せてないよね？」

「いや、あんたの記憶が朦朧としているから——」

「朦朧としたのは初日だけだったわよ。その間、メイさんは一体何をしていたのかしら？」

と、とどめの一撃。まったく私の悪役ぶりもたいしたもんだ。

「や、今、作ってんねん、こんなとこで油売ってる暇無いわ。さ、作業場行くで、ジン」

「あ……う……ああ」

そそくさと出て行く二人。

二人の気配がなくなるまでじっと我慢し、深々とため息を吐いた。

「足、痺れた……」

神妙そうな様子を見せ付けるため、玄関上がつてすぐの板場でずっと正座しうなだれていたのだ。現代っ子には辛すぎるが、これが一番手っ取り早くメイさんの機嫌が直る方法でもある。

「失敗した」

ここ数日、同じ愚痴をもらしている。

「ねえ今日、暇？」

なんて悪友のシヅに声をかけられたのが先週の金曜日。

シヅは一見すると愛らしい日本人形のような容姿をしている。なのに性格は、同い年の人間としてはあまりにも純真、無邪気すぎる。悪い人間じゃないけれど、他人の心情がまるで読めず、一緒にいて楽しいことも多いが、苦勞すること、嫌なことも同じくらい、いや……そのほうが多い気もする。

けれど、子供のような純真な笑顔で微笑まれると誰も何も言えなくなる。

「面白いものを見せてあげる」

満面の笑顔。とりあえず用事を思いつかなかった私はこくりと頷く。

「何なの？」

「それは、夜までのヒ・ミ・ツ☆」

くすくすと楽しそうに微笑む彼女に、誰が問い詰めることができるだろう。

約束は夜の七時。私はシツの家へ赴いた。そこにはシツに捕まったらしきユカリとミホ、リエ、キョウコといういつもの顔ぶれ。

挨拶代わりに、乾いた笑みを互いに浮かべる私たち。

「暇やね、私ら」

ユカリ声に、再び浮かぶ自嘲の笑み。

「ええかげん彼氏の一人もできんの？」

ミホの声。お互い様だとばかり互いの顔を見る。

「来年こそ『シツの集い』には不参加するで〜」

時々開かれるこういう集まりを私たちは『シツの集い』と呼んでいる。メンバーが増えることはあつても減ることはない、ある意味怖い集会だ。

「あはは、そりゃ無理やつて」

リエの言葉にキョウコが突っ込む。さすがは姉妹。ボケとツツコミの息がぴったり。

「何が無理なの？」

ちよこんと沸いたように登場したのは当のシツ。小首を不思議そうに傾けている姿がまた愛らしい。

「何でもないよ」

私が答え、

「それより、見せてくれるって言ってた『面白いもの』って何なの？」

シヅはふふふ……と怪しく微笑み、

「ジャン！」

掛け声とともに『冬の星空を見よう会』なんてご町内の、家族向けの行事予定が書かれたチラシを取り出す。

「……………参加するってこと？」

嫌な予感はいちいち当たる。

「そうよ！ 素敵でしょ！！！」

「……………ええつと……………」

みんな言葉を詰まらせ、互いに顔を見合わせている。顔には大きく『困った』の文字が。けれどシヅはそれに気づく様子もない。

私はシヅの家に来るためにちよつと厚着をして来てはいるが、夜の星空を見上げられるほどの厚着はしていない。こんな格好で外でぼおーつとしていたら絶対に風邪を引く。

「いや、あの……………ね？」

何とか気づかせようと皆、薄着であることを暗に主張するが、シヅは不思議そうな顔をして微笑み、

「……ミルクティー持って行って、向こうで飲もうか？」

なんて、シヅで無ければ殴りつけたくなるような勘違いをかましてくれた。

「いや……そう……ね」

誰ともなく漏れる諦めに似た声。

「——行きましょう」

私はため息を一つ付きつつ、青い顔に無理やり笑みを浮かべた。

開催場所はシヅの家から一キロばかり離れた丘の上。私たちは近所だからとそこまで歩いて来た。歩いている間は温もっていた体も、徐々に熱が逃げ、今は寒くて震えている。きっと唇は青いだろう。

シヅは準備万端に赤い頭巾つきのコートをすっぽりかぶり、白いざつくりしたマフラーをぐるぐる巻いて、同じデザインのリトンの手袋をはめ、赤頭巾ちゃんのごとき様子をしている。その姿がまた可愛い。

「あ、これ皆の分ね」

なんて家を出る直前に、カイロを一個づつ分けてくれたのはシヅの優しさだろうが……今となつてはぜんぜん足りない。

開催時刻より少しばかり早いというのに気の早い親子連れが数組良い場所を陣取り、シートに望遠鏡、はたまた TENT まで張つてそれはそれは準備万端に整えていた。「シートくらい持ってくれば良かったねえ」

「あと、毛布……寒い」

リエとキヨウコの声に、私たちはため息を漏らす。横目で見やる楽しげで暖かな家族連れが本当に羨ましい。

寒い寒いと呟きながら永遠とも思えた十分を過ぎ、開催時刻を迎えた。

どこだかのアマチユア天文家だとか言う人が三人ほど現れ（しかもサンタクロースの格好をして）、

「向こうの空に見えるのがオリオン座で……」

といった具合に明らかに手作りと思われる紙芝居で、星座にまつわる伝説を交えつつ星の話をしていった。けれど、寒さで震える私たちの耳には届かない。

白い息、凍りつくような寒さ、そして泣きたくなるくらい美しい星空。

私たちは震えながら、ただただシヅの気が済むのを待っていた。

「寒くなってきたね。そろそろ帰ろうか」

シヅが声を上げたのはそれから一時間くらいして。それはまさに天の声。小躍りしたいくらい嬉しかったが、冷え切った筋肉は動きもせず、こくりと頷く事しかできなかった。

シヅの家の前でみんなと別れ、朦朧とした意識のまま私は家にたどり着いたらしい。

寒さで脳が死んでいたのか、帰ろうといったシヅの声以来、あの日のことは何も覚えていない。

家に帰ってボタンキューとベットへ倒れこんだ私は翌朝、起きることもできず数日熱にうなされ、その後しばらく伏せていた。

何とか体調も良くなってきたので街へ繰り出した途端、シヅの姿を見かけたもので、逃げるようにしてここへやってきたのだ。

「失敗した」

私は何度目かのため息を漏らす。

シヅは恐ろしいほどに目ざとい。さつき見かけたときはシヅの後姿だったからきつと気づかれていない……ことを祈りたい。

ぼーっとしていても時間は過ぎる。私はよろよろと立ち上がる。今日は久々の小春日和。掃除をするにしろ、陰干しするにしろ丁度良い。

「寒い……」

なんて、真冬用のコートを着込み、向かった先は業務用冷蔵庫。

なんで一般家庭にこんなたいそう代物があるんだろうと幼い頃は不思議でならなかったが、爺ちゃんの手伝いを初めた数年前、その理由を知った。

全体重をかけて扉を開ける。一年近く閉じっぱなしなものだから、まったくもって重い。

中には去年、入れた時と同じ格好をした大きな卵が一つ。

世界で一番大きな卵はダチョウだなんていわれているけれど、これはその二倍近くはゆうにある。割れないように、慎重にそれを冷蔵庫から取り出し、台車に転げのせる。

「ふう〜っ」

大きく息をつく。

本当に重い。しかも表面がつるつるだから持ちにくいし。

冬の弱い光に、卵の表面は紺碧にも銀色にも波打つような光を示す。真冬だつてこ
と、卵の中にもわかるらしい。

『——続いて、天気予報です——』

ラジオから響く男性の声に、私は手を休め、じっと聞き入る。

『……地区、夜半には気温が下がり、氷点下になることもあります。夜中から明日
の昼にかけて雪が——』

「雪か」

呟いて思わず笑う。

白い白い雪の世界。

真つ黒な世界にしんしんと、絶え間なく降りそそぐ雪。

「雪……だよね」

もう一度呟いて、作業再開。

卵を家の中で一番寒くて日の当たらない場所へ。

裏庭の一角。苔くらいしか生えることのない、薄暗くて夏でも寒いと感ずる場所。

昔はここに幽霊が出るような気がして怖くて仕方がなかった。そんな場所に、台車の上の卵をコロシと転がし落とす。これで夜まで放っておけばいいわけで、とりあえずは一つ目の作業終了。

「次は……車か」

裏庭に面するように作り付けられた車庫。道路に面していないので、中には車を入れ様もない。それに車を入れるにしては、高さも幅も、妙に大きい。

うんしょ、と特注のシャッターを開けて中へと入る。

一年近く閉じっぱなしのそこはほこりっぽい。

けほけほと軽くむせ返り、やはり掃除しなきゃだめだなあとげんなりする。

中にあるのは真つ黒な蒸気機関車の客車が一两。昔は古い映画なんかに出てくる、

しやれた箱馬車を使つてたらしいんだけど、爺ちゃんが三十年くらい前に見た宇宙を走る蒸気機関車アニメに感動し、これに変えたらしい。

それを聞いてげんなりする一方、爺ちゃん、アニメなんて見るんだ……なんて妙なことに感心したりもした。

「ほこりを払うのと……中にストーブがいるなあ、絶対。あとは——」

「何これ！」

人が驚いたとき、頭の中が真っ白になるなんていうけれど、それは本当らしいと実感。

「ねえ！」

「……え？ ああつと、どうしてここにいるの？ シヅ」

入り口には真っ赤なマフラーに、白いコート。と、この間の夜と同じような格好をしたシヅが興味津々といった顔で立っていた。

「なんで？」

再び口をつく疑問。こういう場合は誰もが口にする言葉だろうけれど。

「それ、何？」

シヅの方は答えようともせず、同じ質問を繰り返してくれる。

「列車」

短く返す。見ての通り、どこからどう見ても何の仕掛けもへったくれもない、ただの

客車車輻。

「じゃなくて、なんでこんなところにあるの？」

「爺ちゃんの趣味…なの」

「あ、そう」

なんて、素直に返事をしてくれるが、どう見たって納得した顔をしていない。先週寝込んでいたせいであたでさえ時間が無い時に、シヅの相手をしてもらえない。

「シヅ、用がないのなら忙しいから帰って」

単刀直入に切り出す。非常に邪魔扱いしてる上に言葉がきついことはわかっているが……背に腹は変えられない。

「汚れてるね、これ、掃除するんですよ？」

「え？」

私の格好といえば、汚れてもいいような適当な格好にカッパ、長靴、ゴム手袋とどう見ても、今から掃除しますよファッション。

「手伝ってあげる」

「いや、いいから」

「何で？」

「悪いから」

「どうして？」

「……どうしても」

シヅのおねだり攻撃に私は弱い。そんなこんなを繰り返すこと数分、ついに、

「じゃあ手伝って」

ああ、ついに言ってしまった。馬鹿な私。

言つてすぐから後悔と自責の念にさいなまれていることなど……シヅにはわからないだろう。鼻歌交じりに、

「水道どこ？ モップは？ 洗剤は？」

なんて、浮かれた様子だし。

「五月蠅いで！」

髪の毛をかきむしりながら姿をあらわしたのはメイさん。

やはり今年も切羽詰ってきている様子。

山ほどの嫌味を私に機関銃のようにまくし立てようとしたところでシヅの姿に気づく。

「……誰？」

「始めまして、シヅといいます。ところでどなたですか？」

シヅのまっすぐな瞳に見据えられて唯我独尊なメイさんがちよつとたじろいでいる。シヅ最強か。

「わ、私はメイって言ってもなんやけど……誰？」

と、今度は私に尋ねる。

「私の友達のシヅ」

「と、友達って……なんでこんなところにおんねんな!？」

「あそこ越えてきたの」

なんてシヅがご丁寧に指差す先は裏庭の垣根。登ったのか、その格好で。しかも、それって無断進入とか泥棒って一般的に言われる行為なんだけれど。

「非常識やん!」

「玄関にベルはついてないし、いくら呼びかけても誰も出てこないだもん」

可愛らしくふてくされて、大粒の涙がポロリと一滴。友人達でなければ見抜けない、迫真の嘘泣き。

案の定メイさんはばつが悪そうに、

「いや、あんな、泣かんでもええやろ?」

「だって、お姉さんがいじめるから」

『お姉さん』とか言ってるあたりが確信犯、シヅの計算づくの芝居だ。シヅはいくら年上だろうと人の名前は呼び捨てにするタイプだから。

困りきった表情でメイさんが私のほうを向く。

「あー、シヅ。大丈夫だから」

なんとも言葉をかけずらい。

「メイさんも『あれ』急いでね」

「え、そ、そやね」

慌てた様子でメイさんは家の中に引込む。

途端、シヅの目がキラリと光る。

「ねえ、一人暮らして言っただけじゃなかったっけ？」

シヅの何故なに攻撃。

「あー、掃除しながらでいいかなあ。時間無いから」

なんて言いつつも、シヅを無視した形で黙々と掃除。水をかけて、洗剤かけて、モップでゴシゴシ。そしてもう一度水をかけて洗剤を洗い流し、窓を磨いて、車内に掃除機をかけて終り。と内容は簡単だけれど、車よりも大きな客車。これがかなりの重労働。

「ねえ」

何度目かの「ねえ」と共に、シヅにカップの裾をつかまれる。

「あの、離してくれない？」

「一人暮らして言っただけじゃなかったっけ？」

「……事情があるの」

「何？」

「人には話せない事情」

「親友でしょ？」

「そうだったわけ？ と出かけた言葉を飲みこむ。

「せ、先月までは一人暮らししてたわよ」

「どうして今は一緒に住んでるの？」

「……親戚の——」

「いないっていったじゃない。天涯孤独だって」

私の馬鹿。なんでその時にいないって言ったんだ。シヅにのせられて身の上話なんてするんじゃないか。

「と、遠縁の遠縁がいたの」

確実に声は裏返ってる。嘘がつけない性格ってのはこう言うときに分が悪い。

「それって他人って言うんじゃないの？」

鋭い突っ込み。

どう答えようかと考え込んでいると、

「お嬢——あ」

ジンさんとも鉢合わせ。最悪だ。

「はじめまして、シヅといいます。あなたは何な人ですか？」

シヅは気遅れる様子など微塵もなく挨拶する。誰がどう見ても可愛らしい娘さんって様子で。

「え、ええつと……ジンといいます。あの、お嬢——」
ジンさんに手招きされてそちらに向かう。
とりあえずは助かった。

「予定よりちよつと多く出来そうなんです……」

「あ、そうなの？」

「メイが結構頑張つてたみたいで」

お嬢が寝込んでいたときに……と小さく口にしながら私の背後——シヅの様子をうかがっているジンさん。

「大丈夫ですか？」

「……何とかしなきゃなんないんだけど……メイさんがたじろぐような人間つて、どう対処すればいいと思う？」

シヅをちらりと見て、目に涙をためるジンさん。
泣きたいのはこつちなのに。

「何とかするから——でも、最悪の場合には……覚悟しといてね」
ジンさんのもとをはなれてシヅのとこに戻る。

「帰れつて言つても、帰らないわよね？」

「うん」

当たり前だといわんばかりの表情。質問も山いっぱいつてその目は嫌いだ。

「じゃあ……しっかり働いてもらおうことになると思うから、よろしくね」

「さっきの——」

「質問も全部、夜に回してくれる？ 私はこれから寝なきやならないんだから」

「まだ、お昼過ぎだけど？」

「これから夜まではお昼寝タイム。徹夜になるから寝ておかないと後がつらいの」

言い置いて、家の中に入る。シヅが後ろからついてきたので、客間に案内しておいて、私は無理やり眠りについた。

目が覚めると夜だった。

カチリと、念のために掛けておいた目覚し時計のベルが鳴る三十分も前にとめる。『血が騒ぐ』って表現がぴったり合うのが今の気分。眠っているとき夢を見た。初めて爺ちゃんの仕事を手伝ったあの日の夢を。今でもあの興奮と感動を思い出すとウズウズする。

寒いしもうちよつと時間があるなあと布団の中で身じろぎしていると、ふと戸口に人の気配を感じ、

「誰？」

声を掛ける。

「起きた？」

予想していなかった少女の声。どこかで聴いた事のある声に首をひねり――

「シツッ!?!」

ガバリと布団から抜け出す。

何でこんなところと言いかけて、そう言えばと思いつく。夕方、何の説明もせずシツを客間に通しておいて、自分はさっさと寝るために部屋に引き上げたのだ。

シツの手元にはカップにお皿があると、ジンさんが気を利かせて差し入れを出したのだろう。

「目覚ましが十一時にセットしてあったから、あなたが起きるの待ってたの。こんな時間から何をするの?」

口調がいつもの『可愛らしい』『シツじゃない』。年相応の言葉遣い。こういうときは大抵怒っている。

「あのね、」

と声をあげかけたもののどこから説明すればいいのかがわからない。それに口で説明するよりも見たほうがわかりやすい訳だし。

「すぐにわかるよ」

言いつつ着替える。あの夜とは違って、きちんとした防寒着に。

ちらりとハンガーにかかっている真っ黒のロングコートにため息をつき、それを手にとる。爺ちゃんが生前、プレゼントしてくれたやつだ。裾に黒いファーがついているシンプ

ルだが洒落たデザインのそれは物が良いらしくかなり暖かい。

遠赤の婆シャツにアングラの薄手セーターを二枚。背中にカイロを貼り付けて、この間買ったばかりのNASA開発の超薄手毛布と、コートとおそろいの帽子と手袋を持って部屋を出る。

「お嬢……」

階段を下りたところでジンさんに手招きされる。

「あのお——」

言いづらそうなジンさんの顔。シツに聞こえないよう声を落として、

「何？ あれ、出来てないの？」

「いえ、出来てます——そうじゃなくて……」

ちらりと私の後ろをついてきているシツを見やる。

「彼女にはアシスタントしてもらおう」

ため息と共に小さな声を吐き出す。

唾然とした顔のジンさん。

「だって、仕方ないでしょ？ 説得できる？ メイさんも言い含められるような相手
を！」

逆切れだつてのはよくわかつてるけれど、どうしようもないんだから、説明を求めないで欲しい。

「……お嬢お」

だから泣きたいのはこっちだつてば。

意味をこめてちらりと睨み付け、私は荷物を客車車輻に詰め込むために外に出る。生まれたばかりの雛鳥のように私の後をシヅがついてくる。

「シヅ、私、今から仕事なの」

「アシスタントって何の？」

そうとう声を落としていたのに聞こえたらしい。

「説明してる時間はないから荷物運び手伝つてくれる？」

「わかった」

手にもっていた毛布なんかをシヅに手渡し、私はジンさんが作業場から運び出した白い袋を一つ持ち抱える。

「これをあの客車車輻の中に全部積み込まないといけないから」

歩きながら言う。見た目よりは重くない、けれどいつべんに二つはもてない。シヅの協力もあり、数往復で袋の積み込みが終わる。

「シヅ、こっち来て」

家の中で一番暗くて寒い場所、卵を置いた場所へとシヅを連れてゆく。

卵にはひびが入り、中からうつすらと銀色の光が漏れていた。

「……これ、何？」

さすがに驚いた様子のシヅが声をあげ、私の横顔を見やる。

「もうすぐわかるよ」

私は卵から目を離せない。何度見ても見飽きないくらい、『隊長』が卵からかえる場面は綺麗で感動的だ。

見る間にひびわれは大きくなり、漏れる光の量も増す。銀色の光の線が徐々に七色の帯になり、金色の光の渦へと変わる。

「隊長」

ほうと息を吞みつつ、呼びかける。

卵からかえったそれはバタバタと姿勢を正そうと空中をもがいている。見る間に大きくなるその姿。白く輝く胴体、銀色のたてがみ、真白の翼。

「――へガサス？」

シヅの声。驚いたつて様子はしているものの神話上の生物を目の前にして、この程度の驚き様で済ませられるなんてシヅの神経の凶太さってどのくらいものだろう。私が初めて隊長を見たときの狼狽振りを思い出して苦々しく笑い返す。

ぶるりと体を震わせて、隊長は馬らしく一声、いなないた後、

「よお寝た」

と大きく伸びをする。メイさんたちと同じアクセントの発音。どうしてこの容姿で標準語をしゃべらないんだろう。

「あのさ、」

シヅが声をあげるのと隊長が声をあげたのはほぼ同時だった。

「仕事ってなんなの？」

「なんじゃこの娘っ子は？」

両方が私に説明しろ視線を向ける。私はため息を一つつき、

「シヅ、仕事の説明は後でね。隊長、こっちはシヅ。今年からアシスタントをしてもらうことにしたの。シヅ、こっちは隊長。見ての通りのペガサスよ」

隊長とシヅは顔を見合い、とりあえずはと言った様子で互いに挨拶しあう。

「じゃ、挨拶も済ませたところで仕事始めと行きますか！」

何か言いたげなシヅと隊長を尻目に私は客車車輛を車庫から出そうとしているジンさんとメイさんの手伝いに向かう。

「あんたほんまあの娘、アシスタントにする気なん？」

メイさんがため息混じりに言う。シヅを見ようとしてもしないあたり、好いていないことが伺える。

「他に良い方法がありますか？ シヅを五分で納得させることができるような現状説明の文句とか」

「………思いつかん」

メイさんしては珍しい言葉。嫌味をいい始めたら百科事典をひっくり返すくらい

しゃべる人なのに。

「なんや……あの娘苦手や」

ぼそりとした呟きに私は苦笑する。

数分かかつて客車車輛を運び出し、隊長にくくりつける。隊長は例年のごとく、

「昔の箱馬車が懐かしいわ」

しみじみと呟く。箱馬車と客車車輛、軽いのはどちらでしょう？と問うが如く。

「箱馬車なんてどこに売つてんねんな、今の時代。寝言言うとらんでしつかり働きや」

メイさんと隊長は毎年同じ台詞を言い合つてる。私の記憶してる限り。

「お前にはわからんじゃろうが、こいつは重すぎる。ユキのヤツが……ユキは？」

不満を吐露しかけて隊長は不信任にあたりを見渡す。

ユキつてのは爺ちゃんの愛称。ユキノスケが長くて言いづらいから、みんな爺ちゃん

ことをユキと呼んでいた。

「爺ちゃんなら去年の暮れに死んだ」

「……死んだ？ ユキがか？」

隊長が眼を見開いている。ただでさえ大きな瞳がさらに開かれて、受けたその衝

撃の大きさが伝わってくる。隊長と爺ちゃんは兄弟みたいなものだって死ぬ前に爺

ちゃん自身が言っていた。

「死んだのか、ユキも」

隊長は悲しそうにつぶやくも、キリッと私のほうを見て、

「ほんなら、改めてよろしゅう頼むわ」

人間で言うところのにやりとした笑みを浮かべてみせる。馬面でされても気味が悪いだけけれど。

私は返事の変わりに隊長の顔をぼんぼんと叩き、台所へ足を向ける。

ペガサスの寿命は長い。隊長は何人の人間を今まで相棒にしてきたんだろう。そして何人の人間が相棒になるんだろう。

隊長が数人の名前を呟き、

「——ユキも死んだのか」

台詞を棒読みしているような声だった。

台所には例年通り黒い、旅行かばんというよりもスーツケースに似たカバンが置いてあった。

「弁当入れときました」

ジンさんが私にそれを渡しながら言う。

「爺ちゃんもないし、今年普通のカバンでも良かったんじゃない？」

弁当を入れるにはこのカバンは入れにくい。

「ええやん、ユキがせつかくあんたに買ってくれたもんなんやから」

「……そうですよ、ユキ、めつちや喜んでたやないですか……」

コート、帽子、手袋、カバン。この四点セットを渡されたのは爺ちゃんが死ぬ少し前。あのアニメの再放送を見た直後だったから、私はすぐにこれらが何を意図するのかに気づいたけれど、爺ちゃん孝行のつもりで黙って受け取った。

けれどその頃、肩より十センチくらい長めのロングヘアにしていた私は翌日にはペリーショートに髪を切った。爺ちゃんがすぐく寂しそうな顔をしていたけれど、こればかりは譲れないというか……私の気持ちにもなつて欲しい。

ジンさんとメイさんはあのアニメを見たことがないらしく、この格好をした私に『似合う』と繰り返し返していたが、私は仕事のとき以外、この四点セットは使わないことにしている。

「あれ、全部まいてもいいの？」

積み込んだ荷物の事を聞く。

「半分くらいにしとき」

メイさんは楽しそうに笑いながら答える。こういう顔をしたメイさんの言葉は信用ならない。

「ジンさん？」

「三分の一くらい……」

メイさんを横目に見つつ、ジンさんは答える。やはりメイさんの言うことは信用ならない。

客車に乗り込み、隊長に窓から声を掛ける。

「出発進行！」

「行くでっ」

隊長は鼻息荒く気合を込めると、天に向かって駆け出した。重いはずの客車車輛が隊長に引かれてふわりと浮き上がる。

夜空に向かって駆け上がる。ガサと真つ黒な客車車輛。もし目撃したとしてもあまりにもおかしな光景に、誰もが見なかつたことにするだろう。

遠く、小さくなつてゆく街の明かり。私はうっとりとしてそれを見下ろす。空に輝く星も綺麗だけれど、街の明かりも負けていない。

「ねえ」

掛けられた声に、シヅの存在を思い出す。

私と向かい合うように座つたシヅは、まじめな顔で、

「いい加減説明してくれても良いんじゃない？」

眼が怖い。

「ええつと、どこから話せば良いものか——」

「全部よ」

間髪いれず言葉をはさむシヅ。そうとう頭に來ているのだろう。

「ぜ、全部つて言つてもね……」

おろおろと周囲を見渡す私を誰もとがめないで欲しい。私は説明するとか、論理的に話すことが大の苦手だ。

「うちの家業を継いだの」

やっとそれだけ口にした。

「家業って？」

「これ」

「これって？」

「今やってること」

「……説明になってないんだけど？」

私もそう思う。けれどこの現実離れた家業の全てを説明するための文句が浮かばない。

「もうちよつとしたら全部わかるよ」

私はあいまいに微笑み、窓の外を見つめた。シズが私の横顔をじっと見つめているけれど、それには気づかないふりをして。

なだらかな丘を登る様に上昇していた客車車両は、ゆつくりと一定の高度で螺旋を描くように旋回し始めた。

「さて、終点ってところかな？」

私は窓から視線をはずす。

「シヅ、手伝って」

席を立ち、後ろの扉を両方開ける。ビュウウと渦巻く冷たい冬の風。足元にははるか下に輝く街の光。

「白い袋の中身をここに撒くの。危ないから気をつけてね」

言いながら袋を一つ、手渡す。

受け取った袋を開けて、シヅは不思議そうな顔をする。中には銀色に輝くパウダー。

「撒くって……これ、何？」

「素つてやつよ」

ふふふ……と笑いながら私はそれを撒き始める。ここまできたら種明かしだなんて野暮なまねはしないほうが無難だ。

私の手から離れたパウダーは拡散し、風に撒かれてゆつくり街へと降りしきる。

私と同じように反対側のドアのところからパウダーを撒いていたシヅは、恐る恐ると言った様子で声を上げる。

「これ、もしかして雪？」

にやりと頬が緩むのを止められない。

数年前、私と同じセリフを口にしたとき、爺ちゃんがしていた顔と同じものだろう。だから同じセリフを返す。

「そう。雪の素だよ」

パウダーは冬の冷気を身にまとい、徐々に雪の結晶へと姿を変えて夜の街へと降り積もってゆく。

「雪……これが……」

シヅはパウダーを手に乗せ、まじまじと見つめている。あのとときの私と同じ反応。私はすっかり毛布を巻きつけて、夜の闇の中にパウダーが広がっていく様子を見つめる。いつ見ても幻想的。何度見ても綺麗。

あつという間に袋一つが空になる。私は手近な袋を解き、再びそれを撒き始める。一時間ばかりそうしていただろうか。

「今日はもうやめにしようか」

と、振り向いたときには遅すぎた。

そこに山のように残っていないならばならない袋は、すでに一つも残っていないかったのだから。

「……シヅ？」

「ものすごく綺麗ね、これ！」

感極まったって風なシヅ。そのそばに置かれた中身の無い袋の数が尋常じゃない。顔から血が音を立てて引いてゆく。

「もしかして……撒いたの？ 全部……」

うまく言葉が紡げない。頭の中を記憶とも呼べない何かがマツハで通り抜けて行く。私の頭はそれが何であるのか理解しようとは働くこともない。

—— あ、私は今、混乱してる。

冷静な自分の分析に、やっと反応できたのは乾いた笑い声を漏らすことだけ。

それをどう受け取ったのかシツは可愛らしい笑みを浮かべ、

「撒くんでしょ？」

—— 三分の一だけ。

つて言葉は喉から上にはでて来なかった。

—— 覆水は盆に返らず

どこかで聞いた言葉だ。今の状態はまさにそれ。どこだったっけ？ なんて考えているうちに私は意識を失った。

「なんやねんな！！！」

耳元でそう叫ばれて、重い意識からようよう抜け出す。

「………何？」

私の頭はまだ眠ってる。昨日というより今日、明け方まで起きていたものだから、目を覚ますのが辛い。頭、というよりも意識が重い。

枕元に鬼の形相でメイさんが立っているのを認識する。メイさんは私の部屋に入っていない。作業場か、茶の間が彼女の生息領域だ。

「さつと起きて外見て見いや」

苦々しい言葉とともに布団を剥ぎ取られる。冷気に私の体は縮こまるが、眠気は強力で起きる気力などおきない。

「外……?」

何とか答えつつも、もぞもぞと暖かい場所を求める。

「起きんか！」

再び耳元で怒鳴られて、いやいや私は起き上がる。

ベットの近くについてる窓を開けるが、その動作はゆるゆるとしたもの。メイさんは私の一挙手一投足を二白眼で見ているが、目覚めていない私には何の意味も無い。

窓の外には見慣れない景色が広がっていた。黒いはずのうちの瓦屋根は真っ白。隣の家の屋根も、向こうの家の屋根も。この時期ならば薄い灰色掛かっているはずの空も真っ白。

「……白……?」

小さな眩きだったが、メイさんがピクリと眉を吊り上げる。

「雪や！ なんやねんな」の量は！！」

「まだ降ってる——」

のほほんとした響きの私の言葉とは裏腹に、メイさんはテンションをあげる。

「そうや。あんたどれだけ撒いてん？ まさか、全部とか言わんわな」

嘲笑するような顔。

「そういえばと思ひ出す。

「シツが——」

「まさか全部撒いたんか？」

「こくり、と首を縦に振る。あの後何かがあつたはずだが……。

「アホか——————！！！」

街中に響きそうな絶叫をあげた。

全身が総毛立つ。耳がキインとなつたまましばらく何も聞こえない。メイさんが私の両肩を押さえ込み、乱暴にゆすりながら何かを訴えているが、何も聞こえない。

しばらくしてジンさんが現れ、メイさんを引き離してくれた。私は妙な疲れと、引きずり込まれるような眠りが押し寄せてくるのを感じた。

「もうちよつと寝かせて……」

布団をずるずるとかけなおして、次に目覚めたのは昼過ぎだった。

「お早う！」

テンション高い少女の声。

誰の声だっけ？ と考え込んで、ガバリと身を起こす。

「シツ！」

「お早う！」

再び同じ声。目の前にはピンクのざっくりしたセーターに、チェックのスカート姿のシツ。いつ見ても、同年代だというのになぜにこんな服が着こなせるのか問いただしたくなる。

「面白かったね、昨日ってより今朝」

夢見ごこちな様子。

その姿は可愛いが、やったことは可愛くない。どうやってシツにそれを怒ろうかと考えていたところで、

「大変だったんだよ、あの後」

「……あの後？」

「倒れたでしょ？」

言われて今朝方の記憶が途中までしかないことに思い当たる。

「そういえば——」

私は起きたときにはきちんとベッドに寝ていた。服は——今朝方の服のままだけけれど。

「あの後どうなったの？」

隊長は慣れているから何とか帰ることはできただろうけれど、倒れた私をここまで運ぶには……眠つてたメイさんとジンさんを起こしたのだろうか？

疑問はすぐに払拭された。

「私、こう見えても力持ちなのよ」

「……シツがここまで運んでくれたってこと？」

「うち農家でしょ？ 手伝いで米俵運んだりもするから意外と力あるのよ」と、両腕で力瘤を作つて笑う。

セーターの上からじゃ見えないけれど、触つて確認しようなんて思わなかった。可愛い子が筋肉むきむききなんて姿を想像したく無い。

私は引きつった笑みを浮かべながら、礼を言う。

「ありがとう」

「で、次はいつになるの？」

「……次？」

何のことかわからなかった。

「私、アシスタントなんだよね？」

私がそう宣言したことを思い出す。時が戻せるならば、あのときの私の頭にハリセインでも叩きつけてやりたい。

「次も絶対手伝ってあげるから！」

嬉しそうにシヅは言う。無邪気そうな笑顔が非常に可愛らしい。が、それに騙されてはいけない事は今わかった。

「次はいつなの？」

せかさされる様に尋ねられ、頭を今朝のメイさんの顔がよぎった。

「たぶん、来年。この冬撒く予定だった雪は全部撒いちゃったみたいだから」

誰が、と言わないところが私が大人な証拠。

「ええ、もう無いの？」

「メイさんとジンさんが今、作ってるはず——どこ行くの？」

シヅはドアを乱暴に開けて駆け出してゆく。

「作ってるよ！見せてもらう！」

声は部屋の外から響いてきた。

そして、下の階からはメイさんの怒鳴り声、ジンさんの泣き声、シヅの嬉しそうな

声が響いてきた。

私は大きく息を吐いてから起き上がる。

さつさと服を着替えておいたほうがいいだろう。十分もしないうちにメイさんが怒鳴り込み、ジンさんが泣きながらやってくるだろうから。

「でも、なんか楽しいかも」

全ての音を消し、全ての色を飲み込んで降り注ぐ雪。

素を巻くのは楽しいけれど、冬も雪の日も大嫌いだった。けれど、好きになれるかもしれない。

窓の外をもう一度見つめ、白い景色にため息をつく。

メイさんもジンさんもシツも変わっているけれど、自分が一番変わっているのかも知れない。

魔女の鍵

私の名はウォルフガング・クルツリンガー。十一の歳で家を飛び出し早十七年。今では国外からも名を知られる騎士にまで上り詰めた。無論、王の信望も厚い。そんな私が北の山のふもとにある辺境の町にやってきたのには、それなりのわけがある。

現国王は聡明な王として知られている。唯一、問題があるとすれば後の数が多いということ。王妃が十四人に、愛妾が三七人。それでも先代、先々代の王に比べれば数が少ない。

今年で二十一歳になる第一王位継承者、エアハルト王子も多分に漏れず、成人して数年になるがいまだ王妃はおらず、そのかわり愛妾は九人。彼女らはいずれも王子に求婚を受けたもののだが、数ヶ月もすればお払い箱になる有様。

王子は賢明であり、お優しい方であり、誰からも好かれるお方なのだが七人目の愛妾となったエルザという占い師は理解できなかつた。体中に施された刺青、無数のピアス。不気味なアクセサリーに引きずるような衣装。

東洋的な神秘さだといえは聞こえがいいが、はつきりいつて不気味だった。美しくないとはいえないが、得体の知れない薄気味の悪さが常にあつた。

ある日、そのエルザが、

「これは呪いですわ」

などと不気味な笑みとともに呟いた。『これ』というのがそのとき話題に上つていた

王妃、愛妾の数の多さにあることはすぐにわかったのだが、呪いという言葉は理解できなかった。

「いったい何の呪いだというんです？」

突然会話に割り込まれたとは言え、王子の愛妾、邪険にするわけにもいかない。

「古の魔女と呼ばれるニナ・ルッツ様をご存知？」

「知らぬものなどおりませんよ」

私と話をしていた財務大臣のフランツ殿が答える。女達の数の多さに一番頭を悩ませている方だ。

魔女のことに疎い私でもニナ・ルッツの名を幾度と無く耳にしたことがある。

五百年ほど前、この国を作った時に力を貸したという史記から始まり、ありとあらゆるこの国の重要な局面には必ず登場している名前だ。百年ほど前を境にその名は歴史から消えているが。

「尊敬すべき素晴らしい方ですわ」

うつとりと遠くを見やる。この女はいつもどこか遠くで漂ってでもいるかのような雰
囲気がある。

「彼女がいまだご健在なのをご存知？」

「……いや、」

フランツ殿が私を見るので、私も同じ言葉を口にする。

「以前と同じく、北の山の裾野のお屋敷で暮らしていらつしやるそうですわ」

この城に入つて二年にもなるが、ほとんど誰とも話をしていない上、手紙などのやり取りも見ることが無いのに、ついこの間聞き知ったかのような口調。

「へえ、面白い」

この時点で聞きたくない声だった。

「これはエアハルト王子、ご機嫌麗しゅう」

フランツ大臣と同じくうやうやしく頭を下げる。

「いにしえの魔女が健在ならば会つてみたい」

易々という。そして、そんな役目を仰せつかるのは決まつて、

「連れてきてくれるか？ ウォルフ」

上役に言われて断ることなど出来ないことをこの人はわかっているのだろうか。ちらりとフランツ殿を見やると『気の毒に……』なんて目をしてはくれたものの、

「それは名案ですな」

エアハルト王子に調子を合わせている。

私も嫌々ながらも同じく調子を合わせ、

「必ずや連れてまいります」

出立したのはそれから二日後だった。

一週間も馬を走らせて、やっと北の町の外れまで来た。

町外れにある小間物屋の店先に良い土産の品を見つけ、買い求めるついでに、

「二ナ・ルツツ殿の屋敷はこちらの道で間違いないか？」

小間物屋で店番をしていた二十歳くらいの娘に道を尋ねる。この国では珍しい黒髪に、小麦色のワンピースを着た娘だ。

娘はまじまじと私の顔をみて、

「二ナ・ルツツついでにしえの魔女のこと？」

「そうだ」

「まあ、何の御用なの？ 王宮の騎士様が」

「……会いたいと言われているお方がいて……な」

仕事とはいえこんなところまで来たくは無かった。

娘のほうもそれ以上深入りしようとはせず、大変ねえといった様子の笑みとともに、

「まあ、道は間違いないといえれば間違いないけれど……」

はつきりしない返事。

「何かあるのか？」

「朽ち果ててなければお屋敷、まだ残つてると思うわにこりと微笑む。

「交流が無いのか？」

「まったくね。生きてるのか死んでるのかさえ誰も知らないわ」

魔女とはいえあまりにも哀れだと思いつつも、ちらりとエルザのことが頭をかすめ、
「そんなものだろうな。とりあえず行ってみるよ」

「まあ物好きね。気をつけてね、何が出るかわからないし」

「魔物がいるというのか？」

魔物など今はほとんどいない。年に二度、伝統的に行われている討伐隊は野犬の
始末が専門になっている有様。

「さあ」

彼女は邪気の無い笑みをみせ、

「誰も近づかないから」

魔女の屋敷以外何も無いのよ、と笑う。

どつと疲れが沸きあがるのを感じたが、私は馬にまたがり、

「……有難う」

別れを告げ、出立する。

半時ほどゆるゆる駆けて、屋敷らしきものへとたどり着いた。『らしきもの』という
のも、少女の言っていた朽ちているという言葉でしか表現のしようが無いほどの荒れ
果てよう。これではとても人が住めるものではないし、打ち捨てられて数十年の月日
が経過しているのは誰が見ても明らかだった。

街へ取って返して宿を取ろうかとも思ったのだが、このまま帰ったのでは何を言われるかわからない。とりあえずはここに一泊することにし、大木の木陰に簡単なテントを張り、薪木を集め火をたく。

野犬が少なくなつたとはいえ辺境。一応の準備をしておいたほうがいい。

夜も更け始めた頃、

「騎士殿、」

若い女の声なのだが、妙に不明瞭な響きがある。

「なんだ？」

「騎士殿、我が館にどのような御用か？」

騎士が怖がつてなどいられない。

「二ナ・ルツツ殿か？」

「私が問うておる」

彼女の言葉には感情がない。それが気味の悪さを増徴させている。

「失礼した。私はウォルフガング・クルツリンガー。第一王子エアハルト様があなたにお会いしたいと申されている。私は使いで参つた」

「そうか。ウォルフガング殿、屋敷へ入れよ。そのようなところで野宿をされては邪魔になる」

周囲を見回すが誰の姿も無い。

「あなたはどこにいらつしやるのです?」

「屋敷の中だ」

屋敷——扉は堅く閉ざされているものの、二階の一部は崩れてしまっている。近づくのさえ危険な様相をしている。

「心配せずとも良い。あなたを屋敷に招こう」

重い扉が音も無く両開きになる。

心臓が飛び出そうではあったが、ごくりとつばを飲み込み、ようよう立ち上ると屋敷へ向かつて歩を進めた。

一歩、足を踏み入れると内部はずいぶん様相が違った。何も古びてなどいないし、崩れたところなども無い。田舎の別邸といった装いの、住み心地のよさそうな内装だった。

「魔法……なのか?」

「そうだ」

すぐ近くで声がした。先ほどよりも明瞭で、どこかで聞いたことのある——

「こんばんわ、騎士様」

弾んだ明るい声。

「……小間物屋の——」

店番をしていた娘だ。数時間前と異なり、黒の喪服のような服を着ている。魔道士

服だと気づいたのはしばらくしてからだった。

「なぜここに？」

「ここが家だから」

「……家？」

私は物事に動じないタイプの間人だが、これほど大掛かりな魔法を見るのは初めてだったから混乱していた。

「——家？」

「そう、家」

娘は繰り返して、

「玄関から入らなければ、きちんと家の中には入れないよう魔法が掛けてあるの。一時期、腕試しが流行ったことがあって命知らずの馬鹿が山のように押し寄せてきたのよ。その対策としてこんなことしてるのよ」

玄関は私しか開けられないけれど、と娘は付け加える。

「魔法なのか」

私がそれまでに見たことのある魔法はもつと規模が小さいものばかりだったから、私の反応は大げさすぎることは無い。

感心して屋敷内を見回していたのだが、役目を思い出し、

「二子・ルッツ殿はいらっしゃるか？」

「もう死んでるわよ、あなたの探してるニナ・ルッツならば」

「いつのことになる?」

「私が生まれる前」

がつくりと肩を落とす。エルザが言っていたことは、嘘だったのだ。なんのために私はこんな辺境まで来たのだろう。

「あら、がっかりしなくてもいいわよ。私もニナ・ルッツだから」

「……どういうことだ?」

「ニナ・ルッツっていうのはね、称号のようなものなの。歴史上に何度、何百年に渡ってニナ・ルッツが現れたと思う? 不老不死でも無ければ無理でしょう?」

言われてみればなるほど。ニナ・ルッツは不老不死の老婆のイメージがあるが、残されている絵画や彫像は若い娘だった。年代によってニナ・ルッツの顔が違っているのはそのためだったようだ。

「なるほど」

「ま、それだけじゃないんだけど……」

含みのある笑みを漏らす。

「さ、夕食にしましょうか。屋敷の前にテントなんて張られたら、屋敷に入れないわけにも行かないでしょ?」

「見ていたのか?」

「見たくなくても見えるのよ、あの位置だと」

案内された食堂からは私の張ったテントが目の前に見えた。

「いつから見ていたんだ？」

照れ隠しもあつて尋ねる。

「私が帰ってきたのはついさっきだから、そんなに長いことじゃないわ」

夕食がテーブルから湧き上がるように出現する。これも魔法らしい。いちいち驚いては馬鹿みたいだから、なるべく平常心でいるよう努める。

「ずいぶん豪華だな」

「魔法は何でも可能よ。食べたいものがあつたら、コックたちに言いつけてね」

台所から鍋やフライパンが空中を踊るように現れる。

「……なんだ？」

「有名料理店なんかで使われた子たちよ。使われなくなつたのを貰い受けてるの。料理の作り方はこの子達がよおく覚えてるから、いつでも美味しいものが食べられるわ」ただし、とメニューを差し出される。私も時々訪れる名店のものだった。

「決まつた料理しか出来ないけれど」

差し出されたメニューから好物を数点あげる。

出来たものから目の前のテーブルに湧き上がるように出てくる。

「ほう、これは便利だな」

「この魔法の開發に三十年近くも掛かったけどね。さ、召し上がれ」

私は料理に手をつける。さすがにどれもおいしい。私の食べっぷりに呆れたのか、彼女は楽しそうに笑う。

「何がおかしい？」

「おいしそうに食べるなあって思つて」

「そうか？ 私より君のほうが若いのだからもつと食べたらどうなんだ？」

「そんなに食べられないわよ。私もう二二歳よ？ 成長期は終わつてるの」

言つて彼女はばちくりと目を瞬いた。

「そういえば私、名乗つてなかつたわね」

ニナ・ルッツが称号であるのなら、彼女の名前を聞いていない。それなのに一緒に夕食をしているのだからおかしな話だ。

「何がおかしいの？」

「いや何でもない。改めて挨拶をしよう。私はウオルフガング・クルツリンガーだ」

「ウオルフツと呼んでもいいのかしら？」

私はうなづく。親しい人にはそう呼ばれている。

「私はニナ・ルッツのカテリナ・ローゼンバーク」

「カテリナと呼べばいいのか？」

「ニナ・ルッツでもかまわないわよ」

笑い顔は爛漫で、エルザのようないかにも魔女というイメージからは程遠い。

「それで、エアハルト王子にお会いしていただけるか？」

「うーん」

彼女は首をひねり、

「バイト、明日が休みだから明日中だったらいいわよ」

「明日中？ 王都まで、どんなに馬を飛ばしても四日は掛かる」

「私、バイトを休みたくないの」

バイトというのは小間物屋の店番のことなのだろうが、

「なぜ小間物屋などでバイトをしているんだ？ 君ほどの腕があれば仕事はいくらでもあるだろうに」

「一日中魔法の研究して、魔術師達と魔法論を語り合うなんて私の性には合わないのよ」

言い置くと黙々と食べ始める。

私は言葉を掛けるのをやめ、同じように食べた。

「さて、お腹も良くなったことだし、ちよつと待っててね。支度するから」

「支度？」

私は食後の珈琲を飲みながら問い返す。

「この格好じゃあ謁見もままならないでしょ？ もうちよつと魔女っぽい格好するか」

ら……」

食堂から姿を消し、すぐに戻ってくる。

エルザ顔負けの刺青と、ピアス。ジャラジャラした悪趣味なアクセサリーに、引きずるような黒の服。いかにも魔女然とした格好。

「さて、参ろうかウオルフ殿」

最初に聞いた魔女の声だ。無機質な女の声。

「まるで別人だな」

「この格好で、いつも通りのしゃべり方したんじゃおかしいでしょ？」

明るい声は確かに変だった。

「ウオルフ殿、そちらの魔方陣の上に立たれよ」

長い裾から、真っ黒なマニキュアの塗られた長い爪がのぞく。

指差されたそこにはデザインのような魔方陣。それが飾りではないというように、うっすらと光を発している。

「何かあるのか？」

言いつつも珈琲を飲み干し、指定された場所へ立つ。

「王都へ移動する」

言葉とともに、魔方陣の光が増した。一瞬のことだった。

「……」

尋ねたのも無理は無い。先ほどの気持ちのいい空間とは違い、いきなり物置小屋に変わっていたのだから。

「もう、おばちゃんたらっ」

黒ずくめのカテリナは荷物に足をとられ、ジタバタともがいている。裾の長い服なうえ、アクセサリーがあちこちに引っかかっているらしい。

私は手をさしのべ彼女が立ち上がるのを助け、

「はいはごさだ？」

もう一度尋ねる。魔法にいちいち驚いてなどいられない。

「王都にあるニナルツツの別邸」

カテリナは短く答え、ケホコホと舞い上がる埃に咳き込む。ずいぶん長い間使われていないことは明白。

「いとこのおばちゃんが管理してくれてるはずなんだけど……まったく」

盛大なくしやみを一つして、何か呪文を唱えようと、真つ暗な空間が明るくなった。白く光る玉がふわふわ頭上にいくつか漂っている。

見なければ良かったと後悔するほどの乱雑に積み上げられた荷物。

「ええつと扉がこつちにあつたはずなんだけど、」

カテリナの言葉に、私は彼女が通りやすいよう道を作る。十数分かってようやく扉にたどり着き、物置小屋から出ることが出来た。

「まったく、嫌になるわね」

カテリナは、バタバタと服についた埃を払いながら、辺りを見る。

「ちよつと、何よ、これ」

カテリナが驚くのも無理は無い。物置は二階にあつたらしく、見通せる階下は酒場だった。それも下町の、あまり柄の良くなさそうな奴らが集っているタイプの。カウンターの途中で酒をついでいた女将が顔を上げ、

「おや、ニナ・ルツツ!？」

「おばちゃん!？」

二人は大きな声を上げた。

女将に通された部屋で、

「王子に会うため参じた」

ニナ・ルツツはまず、そう言い置いた。一瞬前までのカテリナと同一人物とは思えない雰囲気。

女将は深々とため息をはき、

「ニナ・ルツツ、あんたとこうして対峙たいじするのは三十年ぶりかい？ あんたは変わりやしないね」

運んできたグラスを置きつつ、ニナ・ルツツの目の前に座る。女将は五十過ぎ、二二歳だと答えたカテリナと二十年ぶりの再会などありえるわけが無い。

「そんなになるか」

ニナ・ルッツは答え、不気味な笑い声をあげる。魔女つぼく振舞っているのだろうか、カテリナと同一人物だとは思えない。

「王子はなんであんたに会いたいなんで気を起こしたんだい？」

今度尋ねたのは私にだった。

「エルザ様が——」

「ああ、王子さんの七人目の愛妾になったあの胡散臭い占い師か」

コホン、と咳をして女将の言葉を遮る。いくら胡散臭くても、気味が悪くても、一応王子の愛妾。悪口を聞くわけにはいかない。

「エルザ様が、王や王子の女好き——いや、奥方が多いのは呪いだ。それを解決できるのはニナ・ルッツ殿しかないと申されたのだ」

「へえ」

女将は煙草に火をつけながら、

「あの女にしてはなかなか目の付け所がいいね」

不敵に笑う笑顔には妙な迫力がある。

「ニナ・ルッツ、あんた何か覚えてるか？」

「わからない。百年ほど前までの王には后は一人だったはずだが……その後の記憶がない」

「つてことは、あんた、何か知ってるって事だね？」

疲れた、といった態度で煙を長々と吐き出す。

「そのようだ。思い出すには鍵が必要だ」

「鍵とは何だ？」

私は尋ねる。

「ニナ・ルツツつてのは、記憶を代々受け継いでる娘の総称なんだよ。だけど知られたたくない記憶とか、覚えていたくない記憶つてもものもあるだろ？ そんなものは本人が記憶を受け渡す際に封じちゃうのさ」

「鍵が何であるかはわからない。言葉か、行動か、場所か……。どんなものであるのかはわからないが、それが揃えば記憶は自然、蘇る」

「ほお——」

他人の記憶を持つ娘。だから妙な落ち着きようがあり、この歳でレベルの高い魔法が使えるのだろうか。

「では、その鍵を探さなければいけないのか？」

「そうだ」

と、言われたところでどこを探せばいいのだろうか。形の無いものを探すとすると。

「考えてたつて始まらないよ。今日はもう遅いから泊まっていきな」

案内するよ、と女将が席を立つ。

「私の部屋は——」

「数年前に改築するって手紙出しただろ？ 読んでないのかい？」

ニナ・ルッツが固まっている。

「ここを改築して酒場と宿屋を兼ねた商売を始めるって……この私がわざわざ手紙を出したってのに」

女将は大きくため息をつく。

「——すまない」

謝つてはいるが、まったく感情がこもっていない。

「まあ、別にいいけどね」

案内されたのは街道に面した部屋だった。窓から外を見ると、見覚えがある。自分の家から歩いて十分ほどの場所のようだ。

「隣がニナ・ルッツの部屋だから」

女将がシーツを整えながら言う。

「私は家に戻ってもいいが……」

「何言つてんだい、ニナ・ルッツを一人きりで置いていくつて？」

「いや、女将が——」

「あたしゃあの娘につきつきりつてわけにはいかないんだよ。あの娘は記憶はもっちゃいるがここに来るのも、あたしに会うのも始めてなんだよ？ 頼れるのはあんただけ」

「さ」

口答え無用とばかり、部屋を出てゆく。

私も今日会ったばかりだ、と言う暇は与えられなかった。仕方なく休むことにする。明日はもつと酷い日になりそうな予感がした。

「……うぎゃー!!!」

朝っぱらから妙な叫び声をあげてしまった。穴があつたら入りたいと思いつつも、自分にこんな声が出せたんだと感心する。

「起きた？」

目の前にはカテリナが、ニナ・ルツツの格好をしてたらずんでいた。刺青、ピアスに奇妙なアクセサリ。黒ずくめの引きずるような衣装。昨日とはまた少し格好が違っていたが、夜の暗闇でも見たくはないし、起きざまにも見たくない格好であるところは相変わらず。

何らかの殺気でも発してくれていればそれなりの覚悟をして目を開けることが出来るのだが、穏やかな人の気配でこの格好は……心臓にきつい。

「朝からなんだ？ いや、それよりもどうやってこの部屋に入った？ 鍵を掛けたはずだが……そういえば君は魔女だったな」

「低血圧じゃないのね、目覚めてすぐにそれだけしゃべるところをみると」

「カテリナ、頼むから元の姿に戻ってくれ」

頼むと、彼女は一瞬で普通の娘の格好に戻る。

「ウオルフはこちのほうがいいの？」

「ああ」

ニナ・ルッツは心臓にも悪ければ、精神衛生上も良くない。

「王子様がニナ・ルッツをお召しだからずっとこの格好をしてなきやいけないかと思つたの」

いたずらっぽく目を細めて笑う。先ほどの私の失態を思い出しているんだろう。

「先ほどのことは頼むから忘れてくれ。王子に会うときはニナ・ルッツの格好のほうがいいだろうが、私といるときは普通でいい」

「……わかったわ。朝食にしましよ」

部屋を出てゆく。

私は急いで身支度を整え部屋を出る。

「きやつ」

なぜか扉を開けてすぐのところのカテリナはたたずんでいた。つい先ほどの草色のワンピースから、空色のワンピースに衣装換えして。

「すまない」

「……私こそごめんなさい。あなたが出てくるの遅いから、声かけようかどうしようか考え込んだの。そうよね、あなた騎士様なんだから、身支度つて簡単にはすまないわよね」

言われて自分の格好を見る。旅用の略式な騎士服ではあるが、確かに普通の服とは違って多少時間が掛かる。だが、

「この格好では登城するわけにもいかないから、私はいったん着替えに戻る」
「戻るつて、家に？」

「そうだ。君の事も早く城の者に報告しておかなければいけない」
カテリナは不満げな表情を見せ、

「王子様にすぐに面会つて出来ないの？ 人を呼びつけておいて」
「王子は何をするにも予定があり、約束がいる」

「私も明日はバイトがあるわ」
小馬鹿にしたような顔をし、

「でも、今日中には会えるんでしょ？」
「早くても夕方、晚餐を一緒にすることになるかもしれない」

「晚餐？ 面倒臭いわね」
普通の娘であれば喜ぶことなのだが、カテリナは盛大にため息をつく。
気づけば店の玄関まで来ていた。

「朝食は——」

「外で食べろつて。ここ、夜中まで店開けてるから朝食はしてないの」

「そうか」

連れだつて店を出る。

「この辺で朝食が食べられる店は——」

「ウォルフの家でいいわよ」

「わ、私の家!?!」

「奥さん、いるんでしょ?」

カテリナの言葉に私は首をひねる。

「……そんな者はいないが」

「嘘! じゃ、誰へのお土産だったの? あのブローチ」

昨日、カテリナに見立ててもらつて小間物屋で買ったのだ。小さな淡い桃色の石と

虹色のガラスを編みこむように連ねたブローチを。

「……姉だ」

「姉? お姉さんの為にあんなブローチ買ったつての?」

高らかな笑い声。

家を飛び出し転がり込んだのは騎士をやっていた叔父の家だった。姉、というのはその叔父の妻であるアンナのことだ。彼女は『おっかさん』を地で行く人で、家を持つ

てからも世話になりっぱなしなので何かの折には彼女にプレゼントを贈るのが決まりごとのようになっていた。

最近、彼女は私の結婚の話でうるさい。家に帰ればまた、大量の見合いの書類が郵便受けからはみ出しているかもしれないし、姉本人が待ち受けているかもしれない。考えると嫌な予感がして、

「君はついて来るな。姉に会ったら面倒——」

「ウオルフ！」

言っているそばから姉の声が背中に掛かる。私が姉の声を聞き間違えるわけが無いのだが、そのときほど聞き間違いであつて欲しいと願つたことは無い。

「ウオルフ！」

こちらが逃げ隠れできないほどの距離にまで近づいてきているのに、先ほどと同じ大きさの声を上げる。早いとはいえないが、まだ朝。近所迷惑この上ない。

「ウオルフ！」

二回目はずぐ背後。肩で息をしながらだつた。走つてきたのだろう。

「お早うございます」

振り向き何事も無かつたかのような笑顔で挨拶。

「こちらにはカテリナ・ローゼンバーク殿。王子のお招きでこちらにいらつしやるため私が案内を——」

「まあまあまあ、カテリナさん？ あなたお幾つ？」

姉は話を聞いていない。

「姉上！」

「まあ、いいじゃないのウォルフ。私は今年で二二ですわ」

カテリナがいたずらを思いついた子供のような顔をする。

問題を混乱させる気だ。

「まあまあまあ」

姉の口癖。

「あなたのお相手にぴったりなお年頃の娘さんね！」

「いや、姉上。カテリナ殿は王子の招きで——」

「愛妾が九人もいるような方のことはどうでもいいのよ」

王子に対してこの言いよう。姉は怖いもの知らずで、誰に対しても容赦ない。

「それよりも問題はあなたよ、二八歳にもなって妻が一人もいないんじゃないや格好がつか

ないでしょ？ 騎士としても、男としても」

余計な世話だ。それに妻は一人で十分だ。

口元まででかかった言葉を呑み込む。妻をめとる気はまだ当分無いのだと何度、ど

んなに平たく説明しても理解してくれないのだ、姉は。

「まあ、奥様がいらっしやらないんですか？ ウォルフ様には」

カテリナを睨みつけるが、彼女は嬉しそうに微笑んでいる。悪魔の笑みだ。

「仕事がありますからこれで……」

「これでって、家にお連れするところだったんでしょ？ こっちに向かっているってことは？」

城とは反対方向の道の上。

「……微妙に違——っ痛」

「そうです」

カテリナに足を踏まれ、否定しようとしていた言葉を肯定される。

「ウォルフ殿が朝食をご馳走してくださいと」

そんなことは言っていない。

「まあまあ……仲がいいのね？」

妙な笑顔で私の顔を覗き込まれても困る。

「それではこれで」

カテリナを促し、姉のそばを離れる。声が聞こえないくらい離れたところできっと後ろを振り向くと晴れやかな顔で微笑む姉の姿。盛大にため息をつく。

「まったく、君は何がしたいんだ？」

「ウォルフのうちに朝ごはんが食べたいのよ。有名料理店の料理ばかり食べてるとね、たまには素人料理も食べたくなるの」

「そんなものか？」

「そんなものよ」

途中マーケットに寄って食材を買い込み、アパートにたどり着く。

「あなた、アパート暮らしなの？」

驚きを隠せない表情のカテリナ。

「帰って寝るだけなのに家を持つことは無いだろう？」

一階の一番奥が私の部屋だ。日当たりがほとんど無いから、借り手がなかなかつかなかったと部屋を借りたとき、大家の爺さんがぼやいていた。

預けておいた鍵を爺さんから受け取り、部屋に入る。十日ぶりの部屋は相変わらず愛想が無い。朝だというのに灯をともしなければならぬ暗さ。

郵便受けの手紙を振り分け、姉からの手紙は開けずに直接ゴミ箱へ放り込む。

「何、このシンプルス！ 何も無いじゃない！」

私の後をついてきたカテリナは素つ頓狂な声を上げる。

ここには帰って寝るだけだと先ほど説明したはずなんだが。

台所へ買ってきた食材を持っていき、簡単に朝食をつくる。レタスとトマトだけのサラダにプレーンオムレツ、珈琲、買ってきたクロワッサンを添えて、テーブルに置く。

「うっわー！ 感動すら覚えるわ、このメニュー」

嫌味にしか聞こえない。

数種のフルーツが一口大に切られ、盛り付けられ売られていたそれをテーブルの真ん中に置き、椅子に座る。

「これだけ？」

「ああ」

「ふうーん。ところで私の椅子は？」

「そこら辺にあるものに腰を下ろしてくれ」

きよろきよろと辺りを見渡すが、気に召すような椅子の代用品が無いらしくカテリナはパンパンと手を鳴らし、椅子を出現させる。昨日、夕食のときに屋敷で座っていたものだ。

「もうちよつと明るくするわね」

指を鳴らすと昨日、物置に出現した光球が頭上に三つ現れる。

「さ、これで朝つぼくなったわ」

確かに明るい。この明るさで見るとこの部屋の物の無さが非常に寂しい。

「さつきマーケットで会った男に君が来たことを城に伝えてくれるよう頼んでおいた。ここで待っていれば連絡が来るだろう」

食事をしながらの会話など何年ぶりだろうと、ふと思う。

「あれから考えてたんだけど——」

「何をだ？」

「王様の女癖の悪さについて。百年くらい前まではよく登城してたのよ、ニナ・ルッツ。なんでお城に行かなくなっちゃったのかしら？」

「私に聞かれてもわからない」

「そうなんだけど……鍵、何なんだろう？」

デザート用のフルーツ盛り合わせから苺だけ選り分け、口に運びながらカテリナは言った。彼女が悩んでいるとは思えない。

「連絡が来るまで何するの？」

私が食べ終わるのを待つて、カテリナが声を上げる。

「何つて……」

言葉に詰まる。

「その辺にある本でも読んでいてくれ」

「本？ 剣技やら、武術の専門書を私に読めつて？」

確かにそんな本しかこの部屋には無い。それらも叔父から貰い受けた品なのだが。嫌ならば魔法で何でも出せばいいだろ？」

私の言葉にカテリナはむっと顔をしかめる。何が気に障ったのだろうか？

「……ウオルフはどうするの？」

低い声で問われる。

「私は——」

休日には散歩がてらに競馬場や闘技場に向かうのだが……行くわけにも行かないだろう。

「することが無い」

私の声にカテリナは嬉しそうに顔をほころばせる。

「じゃ、久々の王都なんだし、案内して」

「だが連絡を待っていなければ——」

「さつきのお爺さんに頼んでおけばいいでしょ？ どうせ早くても夕方まで登城は出来ないって言ってたじゃないの」

押し切られる形で散策することになってしまった。

「百年もたてばずいぶん街の様相が変わったわね。あら、あの演劇場、前のほうがおもむきがあつて良かったのに！」

街の案内を始めて数分で思い知らされたことがある。カテリナは私より街について詳しい。安価なガイド誌を購入し、それを読み上げていた私が悪いのはあるが、古の魔女ニナ・ルツツは確かにこの街へ良く来ていたらしい。

「有名な建築物は百年以上前に出来ているからな」

嫌味のような台詞を思わず吐いてしまう。

「けれどずいぶん建物も変わったし、人も増えたわ」

懐かしそうな瞳。

「どうして百年もここに来なかったんだ？」

「さあ……あら、あれ——」

指差しているのは中央公園の噴水の真ん中にそびえ立つ巨大なオブジェ。巨大な彫像の女の周囲に水が湧き上がり、その周りに彫刻で出来た鳥が集い、彫刻の花々が咲き乱れている。

「あれ、ニナ・ルッツよね？」

戸惑い顔で尋ねられ、ガイド誌を開く。

『古の魔女を愛しんで王が創らせた』ものだそうだ」

「……愛しんで？ どういうことかしら？ 確かに歴代の王とは親しくしていたけれど、こんな彫像を創られる覚えはないわ」

じっと見つめていたが何も思い出せないらしい。

「この彫像が創られたのはいつ？」

手元のガイド誌によると、

『公園が作られる五年前』だから——」

「公園は後で作られたの？」

「そうらしいな」

計算をやめてカテナを見る。先ほどよりも深刻そうな顔をして、
「何があったのかしら？ 早く鍵を思い出さなきゃダメね」

行きましよう、と歩き始める。

彫像のために公園が作られたともなると、確かに事態はずいぶんややこしくなる。どこへ向かうのかわからず、私はカテリナの後を追いかけた。

たどり着いたのは王立図書館だった。

「彫像が作られた頃の事を調べれば、何かわかるでしょ」

図書館の案内図を見ながら、配置が変わったのね、なんて言いつつ調べ物を始めた。私などはどこから手をつければいいか戸惑うが、流石は魔女。一日の大半を研究で費やすと言われているだけあり、調べ物は手馴れている。

さつさと五冊ほどの年鑑を探し出し読み漁り始める。私でも五冊持つと重いと感じるほどの分厚く、大きな本に小さな文字でびっしり文字が書かれている。見つめているだけで頭が痛くなってきた。彼女の指定する本を運び、元に戻す係りに私は徹する。騎士としてはあるまじきことだが。

「この本はもういいわ。ゴシップ系新聞の年鑑は残っていないのかしら？」

「ゴシップ系？」

「あんな彫像を立ててゴシップ誌が騒がないはずが無いでしょ？」

まるで他人事。

「なるほど」

司書にそれを尋ねるが、ここ三十年ほどのものしか残っていないと告げられる。そ

れをカテリナに伝えると、彼女は疲れきった息をつき、

「じゃ、日記や日誌でも見るしかないわね」

「日記や日誌？ いったい誰の？」

「ゴシップ好きな人——」

ぱつと顔を輝かせる。

「アンナの店に戻るわよ」

片付けもせず歩き始める。

「片付けは？」

背中に声を掛けると、カテリナは両手の指を鳴らした。本は空を滑るように飛び、もとあった場所へ収まってゆく。

私は大股で歩いてカテリナに追いつく。

「……魔法って便利だな」

「あなたが思うほど万能じゃないのよ、案外ね。今回は収まっていた場所を本たちが覚えてたからできたの」

ニコリと微笑む。

「君のコックと同じか」

「そうよ」

気づけば昼も過ぎていたので、途中喫茶店へ寄る。

「朝はとんでもない内容だったから、今回はまともに食べるわよ」

妙に意気込みながらメニューを物色している。

「これ何？」

指差しているのは去年辺りから流行っている、南の国の伝統料理だとかいう代物。それを説明すると、

「じゃ、こっちは？」

東の国の名物料理だ。十数年前に友好を結んでからあつという間に、なじみ深い物になった。

「……王都には珍しいものがあるわね。どうして私、百年も来なかったのかしら？」
カテリナはいぶかしがりながら、知らない名前の料理を片っ端から注文してゆく。

「そんなに食べるのか？」

「心配しなくても大丈夫よ。お金は持つてるから」

「いや、量がだな……」

男でも食べ切れない。夕食、朝食を見る限りでは大食いの兆候などなかったのに。

「さすがに今、全部は食べないわよ」

おかしそうに笑い、運ばれてきた料理を一口づつ食べてゆく。

「もしかしてそれ、残すのか？」

「残さないわよ」

心外だとばかりの表情をし、両手の人差し指を立ててくるくる回す。すると料理は、濃い霧が晴れるように皿の上から姿を消してゆく。

「——なんだ？」

「時空に封じたの。いつでも好きなきときに取り出して食べられるのよ」
悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「面白い魔法でしょ？ 開発するのに十五年ほど掛かったんだから」
言いつつも一口だけ口をつけ、料理を消してゆく。
店を出たのはそれから一時間ほどしてからだった。

「まだ開けてないよ」

店のドアを押し開けるとベルがカランカランと鳴り、奥からアンナの声がした。

「アンナ、私よ！」

カテナが声を掛ける。アンナは準備の最中だったのだろう。作りかけの鍋を片手に現れる。

「何？ なんか用なの？」

「ずいぶん愛想の無い言いようだが、言葉通りでないのは顔を見ればわかる。昨夜に比べればずいぶん愛想のいい表情。」

「ロルフ、日記書いてたでしょ？」

アンナは誰だ、と言った表情を一瞬見せたものの、

「——曾爺さんのことかい？ 私にやちよつと……処分してなきや、物置の中にあるだろうけどさ」

「物置って『通路』のことよね？ わかったわ、勝手に探すわよ」

勝手に二階へ上がっていく。

「店は四時から開けるから、それまでに片付けてよ」

「わかったわ」

四時というと後二時間も無い。『通路』というのは、あの魔方陣のあつた乱雑な物置部屋ことだろう。あの中から日記帳を探し出すのかと思うとげんなりした。

扉を開けると昨日同様、すさまじい埃が舞い上がる。

「ゲホ、コホツ……まったく何でも押しこんどきや良いつてもんでもないでしょうに」
カテリナは両手の指を鳴らす。

荷物たちは空中に浮き上がり、きっちり隙間なく積みあがる。が、数冊の本は空中を滑るように私の目の前にやってくる。思わず差し出した手に、どさりと重さが加わる。

「これが日記か？」

「そうよ」

先に立つて階段を下りていくので、私はついていくしかない。

「アンナ、ロルフの日記借りていくわよ」

「はいはい。別に返さなくっても良いわよ」

奥から顔を出すことも無く、アンナの声が返ってくる。

「まったく、価値ってものがわかってないんだから」

カテリナは不満そうにつぶやく。

「価値？」

この日記に価値があるというのか？

「記録は全て価値があるの。古きことを知ろうと思えば、個人の日記を読むほうがいいのよ。史記なんて王様に都合のいいことばかり書いてあるから、いまいち役に立たないのよね」

個人の日記には余分なことも多いけど、とにんまり笑う。

私の部屋に着き、日記帳をあけてその意味を思い知った。ロルフは食事のメニューばかりを日記に書いていた。

|||||

四月二一日

朝 根菜のスープ、クロワッサン、
昼 キノコの Pasta、

夜 鶏肉のリゾット、根菜サラダ、赤ワイン

聖堂で小火騒ぎ。犯人は酒屋の悪ガキだろう。

|||||

日記ってこんな風に書くものなのか？

小さな頃書かされていた日記はこんなメモのような書き方をすれば怒られたものだから、ずいぶん無い頭をひねったものだった。弟の日記をそのまま写した時にはずいぶん怒られた、何てことも思い出す。

日記に目を戻す。

延々、食事のメニューが続く。せめて、美味いとか不味いとか書けないものなんだろうか。

|||||

八月七日

朝 トマトのオムレツ、バターブレッド、

昼 サラダ。 Pasta、スイカ、
夜 バターブレッド、まぐろのステーキ、根菜サラダ、白ワイン

惚れ薬など可能か？ 大臣も苦労性だ。

|||||

奇妙な記述を見つけ、

「これはなんだ？」

「何？」

カテリナは覗き込み、

「——鍵じゃ無いけれど……近いわね」

「近い？」

「なんか、ここの喉元まで出掛かっている感じなのよ。何なのかしら……？」
私が見ていた日記を奪い取り、パラパラとめくる。

ちやうど十日後の日記には、

『『マリアにトラブル。こうなるだろうとは思っていた』』

「マリアとは誰だ？」

「二ナ・ルツツよ」

「じゃあ、二ナ・ルツツにトラブルがあつたつてことか？」

わからない、と首を振りながら、

「気持ち悪いわね、思い出せないつて」

大きくため息。

「——いったい何があつたのかしら？」

ノックの音。

時計を見と五時過ぎていた。

瞬時に灯りが消え、カテリナは二ナ・ルツツの格好になる。

「どうした？」

「お城からの使えの者かも知れないでしょ？」

「まあ、そんな時間ではあるが……」

出てみると、騎士見習のミハエルだった。私同様、田舎を飛び出してきた少年で、今年で確か一四歳になる。騎士見習は雑用係を兼ねさせられている事が多いから、ほとんどのものが一年もすれば挫折して田舎に帰ってしまう。半年目のミハエルは今、思案の最中だろう。

「これをエアハルト王子からお預かりしてまいりました」

シンプルだが上質な封筒に入れられた手紙を受け取る。二ナ・ルツツ宛てになっているが、勝手にあけて中を見る。予想していた通り、晩餐への招待状。

「ニナ・ルッツ殿、あなたはドレスをお持ちか？」

奥へ呼びかける。

「この装いではいかんのか？」

感情の無い声が暗闇から響く。気味が悪い事この上ない。

「……ニナ・ルッツ殿はどのような装いをされていらつしやるんですか？」

暗闇に目を凝らしていたミハエルだったが、やがて諦め顔になり、小さな声で私に問う。

私は軽く肩をすくめ、同じく小さな声で、

「簡単に言えば、エルザ様をもっと薄気味悪くしたような格好だな。ドレスと言われ
ば、そう見えないことも無い」

「……」

ミハエルは言う言葉が浮かばない様子で、難しい顔をする。それは私も同じで、

「エアハルト王子の招待であれば問題ないだろうが……」

ちらりと奥へ視線を投げる。

「古の魔女らしい格好だからな」

「……そうですか……」

わかりました、ときびすを返す。おかしなことに係わり合いになりたくないのだから、それは私も同じだった。

扉を閉めると、再び灯りが出現し、カテリナはもとの服装に戻った。こっちのほうが断然いい。

日記には、他にめぼしい記述は無かった。

晚餐は七時からだが、六時半までには登城し無ければならない。城まで歩いて三十分ほど。カテリナが日記を読んでいるうちに私は着替えを済ませる。

「そろそろ出るか」

声をかけると、

「ニナ・ルツツの格好のほうがいい？」

瞬時にあの黒ずくめになる。

「……その格好で街を歩く気か？」

「隣に並んで歩いたら、ものすごい嫌がらせよね？」

騎士の正装をした自分と、その隣を歩く怪しい黒ずくめ。私の名が知られている分、後で何を言われるかわからない。私の名が知られてい

カテリナはケラケラ笑い、元の格好に戻る。

「さ、行きましようか。ニナ・ルツツには城の手前でなければいいでしょ？」

「そうしてくれれば有難い」

「ずいぶん建物が増えたわね」

城を見て、懐かしげな声をあげる。

「王妃と愛妾の部屋が二百年程で増えたからな。建て増しが多すぎて、迷う部屋使いもある」

「それは大変ね」

他人事のように。

『惚れ薬』『トラブル』『思い出したくないこと』と三つそろると、ニナ・ルッツが王達の女好きの原因を作ったとしか思えないのだが。

「確証も無いのに人を疑うのは良くないわよ」

私の顔を見ることなくニナ・ルッツは言い据え、人がいないのを確認すると、一瞬で黒ずくめになる。

「参ろうか、ウォルフ殿」

「……そうですね」

控えの間に通される。謁見の間の隣にある小部屋、といつても私のアパートに比べるとずいぶん広い。赤銅色のビロードのソファーに腰をかける。

この部屋に入ったのは数えるほどしかない。天井の下げられた細かな細工の施されたシャンデリアは見事。季節ごとに家具は入れ替えられるから、四季の間とも呼ばれている。誰もがため息を漏らす素晴らしさ。

「ずいぶん派手になったわね、この部屋」

小さな声でカテリナは呟く。だから私も小さな声で尋ね返す。

「来たことあるのか？」

「百年程前まではよく登城していたと言ったでしょ？ 昔は質素過ぎるくらいだった

のよ、ハハ」

「その頃の王は質素儉約を好んでいたらしいな」

歴史の授業で習った。

「美術品には目が無かつたんだけど、飾り立てるのは嫌いだったみたい」

とりとめも無い話をしていると、名を呼ばれる。

王子の名前で晚餐に呼ばれたのだが、食事は王も一緒らしい。古の魔女ニナ・ルツは思っていたよりも有名だということを改めて思い知らされる。

晚餐の用意された部屋には王と十四人の王妃、王子とエルザ、王の妹君夫妻、その他招かれた三十名余りの人々が顔を揃えていた。女性が多いと華やかではあるが、化粧と香水の濃い香りに気分が悪くなる。

「ようこそお越し下された、ニナ・ルツ殿」

王自ら席を立ち、手招かれる。こんな怪しい人間に対してもずいぶん寛大な方だ。いや、ニナ・ルツが女だからなのか？

ニナ・ルツは慣れた様子で王の隣に腰をおろす。片田舎の小間物屋でバイトをしている娘に出来る振る舞いではない。

自分はそんな人物に適当な朝食を出し、普通に話をしていたのだが……問題はなかつたんだろうか？

「ニナ・ルッツ様、王の前でそのような目深な被り物は失礼ではございません？」

嫉妬深い事で有名な第三王妃のエリザベートが声をあげる。ニナ・ルッツの怪しい雰囲気などものともしていない。

「……構わぬだろう？」

ニナ・ルッツは感情の無い声で王に尋ねる。王はかまわない、と頷うなづくが、エリザベートは引き下がらない。仕方がない、といった態度でニナ・ルッツは被り物をとる。

現れたのは魔術的な化粧を施した顔。ジャラジャラした怪しいアクセサリーが耳元に重くぶら下がっている。

「近寄りたくない、知り合いになりたくない、というのが一目見た感想だろう。が、

「我が妻にならぬか？」

王が声をあげる。

「いえ、父上。ニナ・ルッツ殿は私の妃に迎え入れたい」

王と王子は一体何を言っているのだろう。父子が言い争いを始めるまでその場にいらぬ誰かが言葉の意味を図りかねていた。

いくら女好きとは言えど、会ったばかりの怪し過ぎる女に求婚するなど理解できなくて。隣に座っていた王の第十四王妃に、王は何を言い出されたのか、という視線

を向けられる。

私にも答えられない。

「思い出した！」

澄み渡った若い女性の声に父子はぎよつとニナ・ルツツを振り向く。

「私のせいね、本当に……」

カテリナは大きく円を描くように手を交差させ、両手を胸の前で組む。

「——何？」

「——あれ？」

直後に素つ頓狂な声をあげたのは王と王子。

「どちらの申し入れもご辞退いたしますわ」

ニナ・ルツツは言い置いて、戸惑う二人を残し立ち上がる。

「私はこれにて失礼させていただきます」

歩き出した彼女を追いかけるように、私も慌てて席を立つ。コック長の腕によりを

かけた料理にはずいぶん後ろ髪引かれる思いだったが。

城を出たところでカテリナは元の格好に戻る。異様な化粧も瞬時に消える。

「こっちの格好のほうが楽で良いわ」

軽いし、と笑う。見た目も悪いが着ている本人も窮屈らしい。あれほどアクセサ

リーをつけてれば当然だろう。

アンナの店に向かいながら、

「で、何が鍵だったんだ？」

私は尋ねる。

予想していた通り、王達の女好きはニナ・ルッツが原因だったようだ。

「鍵はね、『我が妻にならぬか？』よ」

王の言葉だったわけか。

「質素儉約を旨としていた王がね、女は金がかかると言つてなかなか結婚しなかったの。だから大臣の一人に言われてニナ・ルッツは惚れ薬を作ったの」

そこで苦笑する。

「出来たのは良いんだけど、人によつてずいぶん個人差があつたのよ。でも大臣の矢のような催促に負けて、それを持つて登城したの。その日はちよつど隣国のお姫様とお見合いをするこゝになつていたから、王様の飲む紅茶にそれを一滴入れたのよ」

でも、とカテリナは肩をすくめる。

「王様はお姫様じゃなくて、何故だかニナ・ルッツに惚れちやつたの」

「……『我が妻にならぬか？』か？」

「そうよ。惚れ薬の効果を消す研究に生涯を費やしたんだけど、結局出来なくて、記憶を受け渡す際に封印しちやつたのね」

「だが、先ほど——」

「あれはね、その後のニナ・ルッツが開発した、『すべての効果を消す魔法』よ。最初は毒消し用の魔法として開発したんだけど、妙に強力になっちゃって。使い道に困ってたのよね。でも、それが今回役立ったわけだけれど」

帯に短し、たすきに長しか。

「それにしても惚れ薬の効果が遺伝してるとは思わなかったわ」

「でも良かったのか？ あのままだと君は王妃になれたのに」

冗談めかして聞いてみる。

「あらあら、あなたは国を分裂させたかったの？ あのままだと確実にニナ・ルッツをめぐって父子で争い事を起こすところだったわよ」

カテリナも笑いながら答える。

「君は国を救ったわけか」

「その通りよ」

冗談を言い合っているうちに、アンナの店が見えてきた。繁盛しているようだ。店の客を避けて二階へあがる。

「バイト、忙しいのか？」

私の言葉にカテリナは弾かれたように振り向く。

「……王都案内、またしてくれる？」

「ああ、それは構わないが……」

私よりも詳しい人間に案内など必要は無いと思うが。

「良かった。今日はとっても楽しかったわ」

歳相応の満面の笑顔。

「じゃ、またね」

魔方阵から薄い光が漏れ始めたところで、私は声をあげる。

「待つてくれ！」

「何？」

振り向いた顔はなぜか嬉しげ。

「私の馬が——」

昨日の夜、カテリナの屋敷の玄関先につないだままになっているはずだ。野宿しよう
と水桶に餌は与えておいたから大丈夫だとは思うが……。

「なんだ、そんなこと。いいわ、近々連れてきてあげろ」

照れくさそうにほほ笑んで、宙へと消えた。

指輪

中堅とはいえ地元じゃ大手の企業に就職し、早数年。仕事に慣れ面白くなってきた頃ともなれば、今度は結婚適齢期だ。社会人は忙しい。

仲人が半分生きがいな専務が前方から歩いてくるのを目にし、私は給湯室に非難した。結婚適齢期な全女子社員はマークしてる、というまことしやかな噂がある。

「あら、」

「え？」

振り向くと同期入社村井園子。部署は違うが、高校が同じだった。四大を経て入社した私と、高卒で就職した彼女。その微妙な時間差が、私たちの間に深い溝のように存在していると、私は常々感じてならない。

例えばそれは、落ち着いた雰囲気彼女と、『若い』と称される私の差。結婚適齢期であっても、結婚なんて遠い未来の話にしか思えない私と、妻にするなら……とあちこちで口上に名前がのぼる彼女との差。

会話も無く、気まぜく見詰め合ったままだった私たちだったが、ふと、彼女の右手薬指に目が留まる。

「へえ、それいいわね」

私が声をかけると彼女は嬉しそうにほほえみ、

「婚約したんです」

はにかんだ笑みを浮かべる。相手はかねてから噂の男性だろうか。

「ちよつといい？」

婚約指輪などと呼ばれているものの実物など始めて見たものだから、もつとよく見たくなつて彼女に貸してくれとねだる。

「ええ、どうぞ」

彼女は気軽に答え、私にそれを貸してくれた。

「綺麗ね」「これつて、高いわよねえ」などと声をあげながら、それを私の指へと導く。指を光にかざし「わあ、本当に素敵……」なんて言つてるうちは良かった。

「あれっ？ 抜けない……」

「冗談はやめてください」

私が引きつつてはいても笑みを見せたからだろうか。彼女は私が悪ふざけしているぐらいにしか思わなかつた。

いくら私でもこんな悪い冗談まではやらない。

「いや、本当に」

彼女はやつと事態の深刻さに気づいたようだったが、

「石鹸で取れないかしら？」

それでもまだ、のん気だつた。

しばらく、いろいろな方法を試した。が、どうしても抜けなかつた。

そこで私は最終手段を彼女に提案した。却下されるだろう事は目に見えて解つて

いたことだったのだが。

「切斷、つてのはダメだよね……」

「それは……」

予想していたとおり、彼女は言いよどむ。けれど、顔には焦りの色はまだ見えない。思っていたよりもかなりノー天気というか、楽天家と言うか……。

無理な要求だと言うことははじめから解っていたことなので、あえてこちらでも追求しない。

「そうねえ……」

それでも解決の糸口を見つけようと彼女は思案する。

そんな風に深く悩まれたのではこちらとしてはどうしたらいいだろうか。困ってしまつた。

「ああ！ 澤口さんと呼んできましょう」

彼女は天啓とばかりに顔を輝かせ、給湯室から出て行つた。

しばらくして、彼女は貧弱そうなさえない風貌の中年の男と共に戻つてきた。

「ほら、私が言ったとおりでしょ？ 何度やってもダメなんです」

彼女に説明されながら、中年男は私の指に食い込んだ指輪を抜こうと何度も力を掛ける。指の皮が引きつるし、指は充血してきて痛むが、村井園子の前でわめき散らすわけにもいかない。被害者である前に加害者なのだ。私だってそのくらいの常

識、良識は持ち合わせている。

暫くして、中年男は抜けない事をようやく悟ったのか、

「あれは試してみた？」

森本レオのような口調で十五分ほど前に失敗したものを提案する。見た目通り、頼りにならない。

彼女は首を振り、

「思いつく限りはやつてみたんですが……切るしかないんじゃないかって……」

「それは酷だね。君の——」

「……ええ……ごめんなさい……」

彼女は誰にもなく謝った。

謝らなければならぬのはこっちだというのに。いらいらを募らせるけれど、ここで声を上げるのは逆切れ以外の何ものでもない。

中年男はふと、思い出したように、

「あれは？ 糸持つてる？」

「糸？ 裁縫で使う？」

「糸ならば何でもいいよ。それは試してみた？」

「いいえ」と、彼女は首を振り、「それで取れるんですね？」

男に念を押す。

「間に合えば……何とかなると思うけど」

その案を提案した時に一瞬見せた自信はどこへやら、中年男は心配げに言い淀む。

「ちよつと待つててください」

凜とした様子で彼女は再びどこかへ消えた。

「たしか、指に糸を巻き付けるんだよ。根本の方から。それで……ああ、そうそう。

ちよつときつめにね……」

彼女が私の指に糸を巻き付けている間、中年男は横で不安を煽るような声をあげていた。

煩い。

胡散臭い。

どうして村井園子はこの中年男を信頼しているんだろう。

だが、その不安はすぐに杞憂に終わる。指輪は巻き付けた糸に導かれるように、食い込んでいた私の指から離れてゆく。

「取れた……」

彼女は指輪を電灯の光にかざし、愛しげに見つめる。

私は指にきつく巻き付けられた糸をほどきながら、そつとため息を付いた。

もう二度と、こんなバカなことをやるまいと。

中年男は一言声を掛けると給湯室を出て行った。

「あれ、誰？」

喜びに酔いしれる村井園子に声を掛ける。

「誰って澤口さんのことですか？」

私の顔を怪訝そうにまじまじと見つめ、

「うちの会長ですよ」

村井園子、ごく普通の人間だと思ってたんだけど、違ったらしい。

月夜の晩に

私はバッグから携帯を取り出して、時刻を確認する。一七時半まで後十分。公園のベンチに座って暮れ行く空をぼんやり見上げる。退屈だけれど、何かするに時間は無い。

デジャ・ビュ。

これと同じ光景をどこかで——嫌なことを思い出す。前回と同じシチュエーションだわ。

キラリン

そこへメールの着信音。これもまったく先週と同じ。内容まで一緒じゃなければいいんだけれど……なんて淡い期待はからも崩れる。

『ごめん。今日も残業。また今度』

『また』っていつよ。これで何回目だと思ってるわけ？」

メールに怒ったところで届かない。

『わかった。また連絡して』

しおらしいメールを返す。

彼からの告白で付き合いだし、デートの誘いもいつも彼から。

私は綺麗にめかしこんで、こうやって彼が来るのを待ってる。いつも待ちぼうけを食らってるっての……。

ああなんて健気なのかしら、私つて。

そう思つて、鼻で笑う。

ああ、重症だ。私は彼に惚れている。きつと、たぶん、誰よりも。

しばらく空を眺めてから立ち上がる。

感傷に浸っていたところで仕方ないわけで。

予定してたデートコースでも回ろうか。前回みたいに一人で。

そう思つて歩き出す。

元祖魔法専門店 たかはし

何だこりや。

うどん屋だと思ひ通り過ぎかけた。

渋い紺色の暖簾。年季の入った木目地に浮き上がるように彫られたその文字。

そおつとガラス越しに中を覗きこんでみると、白髪頭のお婆さんが一人、店番をし

ていた。縁側で日向ぼっこでもしているような感じで、うとうとしながら。

和菓子屋さんとか漢方薬屋さんを足して割つたような店内。いくつもの棚に収め

られた漢方薬とも、がらくたとも思える商品。

なんなんだろう。

非常に興味が湧いた。

でも、こんな怪しい店……と躊躇したのだけれど、店番がお婆さん一人つてところ
で入る決心をした。

ガラガラと重い木製の引き戸を引く。

「こんばんわ」

お婆さんは寝ぼけたような顔で、

「あら、いらつしやい。どのようなものをお探ですか？」

「いや、あの……」

言葉に詰まる。探しているものも無ければ、買いたいものと言われても何を売って
いるのかわからない。

「どんなものをあつかわれているんですか？」

「看板に書いてあったでしょう？ 魔法に関するものを取り扱っているんですよ」

私はごくくり、とつばを飲み込んだ。

理解、出来ない。

「お嬢さん、見たところ魔女じゃないようだけれど……」

お婆さんは困ったような顔をしたが、ぽんと手を打ち鳴らす。妙に嬉しそうな顔
をして、

「ああ、そうだわ。これならお嬢さんにも良いかもしれませぬえ」

よいこらしよと立ち上がり、店の奥からガラス瓶を両手で抱えるようにして持って

くる。その中には乳白色に虹色の帯を巻いたようなビー球が半分くらい入っている。

「なんですか？」

「お月様のキャンディーなんですよ」

「月の？」

「お月様はね——」

声を潜める。含んだような笑い顔。

「実はお砂糖で出来ているの。これはね、そのお砂糖で作ったキャンディーなのよ」
嘘か真かお婆さんはほほ笑んでいるばかり。

メルヘンだ。

お婆さんの口からこんな童話的なお話を聞くととは思わなかった。

だが、私はそれに付き合うことにした。

「だからこんなに綺麗なんです」

実際、お話が本当っぽく聞こえるほどキャンディーは美しい。

お婆さんはふふと笑う。

「このキャンディー、人によつて味が違うのよ。昔、私が食べた時はハッカの味だったわ」

「ハッカ……ですか……」

余り好きじゃない。

「人によつて味が違うのよ。あなたはどんな味なのかしらね？」

お婆さんは手馴れた様子で、小さな白い紙袋にそれを数個包んだ。

「はい、三百円になります」

キャンディーにしてはずいぶん高い。

でも、その色合いの美しさと人によって味が違うというのに興味が湧いて、私はお金を払う。

「ありがとうございます。また来てくださいね」

「はい、また」

私は答え、妙に幸せな気分です店を出た。

空にはキャンディーと同じ丸い月。

白い包みの中から一つ、取り出して口に含む。

「……これは……」

ハツカでは無かった。

ミルクのような甘さの中にすうっと好き通るような清涼感。

なんだか嬉しくなって、私は携帯を取り出した。

『綺麗な月が出てる。お仕事中にごめんなさい』

彼にメール。私からメールだなんて初めてかもしれない。

ドキドキしていたらすぐに返信が来た。

『今、見てる。一緒に見たかった。』

そうだった。今日はデートだから、本当ならば一緒に月を見ているはずだった。

『仕事、何時ごろ終わりそう？』

『もう三十分ほど』

彼の職場まで歩いて十分ほど。

待つのに慣れてるんだし、月夜を見ながら散歩するのも悪くない。

十十十

「お婆ちゃんただいま。店番ありがとう」

黒づくめの若い娘が、慌しく店へ入ってくる。

「今日は豪華よ」

両手いっぱい買い物袋。六時過ぎると近所のスーパーはタイムセール。特に今日は

月一の大安売り。

「お婆あちゃん、お客さんあった？」

「ばたばたと品物を冷蔵庫に詰め込みながら尋ねる。

「可愛らしいお嬢さんが一人」

眠そうな顔で祖母は答える。

祖母の手元には乳白色のキャンディーの入った瓶。

「……もしかしてもしかするんだけど……そのキャンディー売った？」

「ええ」

祖母は短い返事を返す。

「いくらお代もらったの？」

不安になり尋ねる。店番を頼んで出かけたものの、祖母に商品の値段などわかるはずがない。

祖母は指を三つ立てる。若い魔女も同じように指を立て、首をかしげる。

「午前中にいらしたお客さんにこうやつてたでしょ？」

来ていたのはお得意さん。

「じゃ、三万……？」

「いえいえ、三百円」

祖母の声がっくりとうなだれる。

「一個三万でも安いくらいなのよ、これ！」

瓶にはしやれた文字で『小さな夢の叶うキャンディー』と書かれていた。

ヴァンパイア1

ヴァンパイア

冷たい……

私の顔に雫が降りかかり、私は意識の底から浮き上がる。

あたりは妙に薄暗い。

側に背広姿の男が手に杭を持ち、振上げている姿がある。杭から雫が垂れ、私の顔に掛かる。

「この世に害を成す忌まわしき化け物め……」

すると、この雫は聖水か……

私は、いまだ混沌とした意識の中で、そんなことを思う。

——ごすっ

鈍い音とともに男はうめき声をあげ、倒れこむ。

しばらくして、ため息まじりの声が聞こえた。

「この学校にまともな奴はいないの？」

薄暗い空間のため、その声の持ち主の顔は見えない。ただ、女だということだけはわかる。

彼女は私の顔に耳を近づける。私の呼吸を聞いているようだった。

「よかった」

彼女は安心したようにつぶやくと、私の顔をじつと見る。そして、私の肩口に頭を

近づけた。

私の意識は再び混沌とした世界へと――

「起きてください、先生！ 大丈夫ですか、先生！」

激しく肩をゆすぶられ私は目を覚ました。

そばに用務員のおじさんの顔がある。

「こんなところで寝ていたら、風邪を引きますよ」

寝ぼけ眼で辺りを見回す。そこは、見慣れた体育用具室。

私は腕に目を落としたが、そこに目当てのものはなく、戸口から外へ出かけているおじさんを慌てて呼び止める。

「あの、今何時ですか？」

おじさんは袖をまくり、目を細めて腕時計の文字盤を見、

「……六時十二分。さつさと家に帰って支度してきたほうがいいんじゃないですか？」

戸口に立てかけてあった箒を手に取り、出て行った。

私はのそのそと起き上がり、伸びをする――体が重い。もう一眠りしたいが、そんなわけにもいかない。今日も授業があるのだ。

気合を込めて、立ち上がる。頭がふらふらするのをぎゅつと目を閉じて耐える。私は大きく息を吐いて、その部屋を後にした。

空は私のことなど気にかけてくれるようすもなく、久々の上天気だった。ああ……太陽が眩しい。

なぜ私は昨日、体育用具室なんかで寝ていたのだろう。疲れが溜まっているということだろうか。用務員のおじさんに起こされなかったら、きつと朝食も食べる暇なく、着の身着のまま授業をしなければならなかっただろう。

そんなことを思いながら歩いていると、

「おはようございます」

私が担任をしているクラスの秋葉原陽子が元気に声をかけてくる。彼女が元気そうにしているのは珍しい。普段は病弱を絵に描いたような娘だから。

「おはよう、今日は気分がいいようね」

「……はい」

答えるまでに妙な間。

「あの、私急ぎますから」

そう言って彼女は駆けるように去っていった。それを見計らったかのように、

「おはようございます」

朝から会いたくない人間ナンバーワンに声をかけられる。

「おはようございませう。あれ、どうされたんですか？ その頭——」

声を掛けてきた生物担当の大神正義の頭には白い包帯が巻かれている。

「ああ、これですか。いや、ちよつと……」

大神先生は気弱な笑いを漏らすと、お先にと去つていった。一瞬、鋭い目つきを私に投げかけて。

二人とも何か変だが、そんなことをかまっていられるほど私の身体状況は良好ではなかった。

夕方。

重い足取りで家路につく。

今日一日よく倒れることなく授業が出来たものだといながら感心する。

「あの、先生」

後ろから声をかけてきたのは大神先生だった。

「ちよつといいですか？」

ちよつとどころか、全然よくないのだが、疲れきつたときにでる柔和な笑みを漏らしたため、彼は続けて話し始める。

「最近は何騒ですね」

私の頭の中で警報が鳴る。いつもの正義感を剥き出しの論説だったら、こんな疲れきったときに聞きたくない話ベストスリーに楽々入る。とりあえず、私はただただいつものように相槌を打った。

「そうですね」

「ところで、この辺でコウモリをご覧になったことはありませんか？
いつたい何が言いたいのだろう……」

「この辺にコウモリなんているんですか？」

「……では、日光に弱い人を ご存知ないですか？」

「さあ、」

私は首を振る。彼と会話するにはかなりエネルギーを使う。

「銀にアレルギーの人は？」

「そういう人も……」

私は再び首を振る。

「それなら、ニンニクの嫌いな人は？」

「さあ」

「十字架の嫌いな人は？」

「さあ、まったく。十字架自体、最近アクセサリとして誰でも身に付けていますし

「……あの、もういいですか？」

「気づけば私のアパート近くだ。」

「最後に一つ。色白で、力が強くて、暗いところのほうが目が利いて、嗅覚の鋭い人を
ご存知ないですか？」

「……それつて、ご自身のことじゃないですか？」

「この生物教師、見た目は何処にでもいるサラリーマンのだが、中身はそうとう変
わっている。本人もそのことに思い当たったのか、

「あ、いや……じゃあ、これで」

「きびすを返すと去っていった。」

「私は大きく安堵の息をつく。」

「先生、デートだったんですか？」

「その声に振り向くと、秋葉原陽子が立っている。」

「私はもう一度大きいため息をつき、

「違うわよ。それより、あなたは何でここにいるの？ 家の方向は違うわよね？」

「越してきたんです。そこに」

「と、指差したのは私と同じアパートだ。」

「一人、暮らし？」

「このアパートは狭い。」

「はい、両親が十五歳にもなったんだから一人で暮らせて」

言つて、微笑む。

「いいわね……」

思わず、本音が漏れる。

めちやくちや羨ましい。私はこの学校に通うには実家から車で三時間以上かかるからと、親に頼み込んでやっと一人暮らしを許されたのだから。

「引越し祝いを後でもっていきますね」

そういつて、階段を上つてすぐの部屋の中へと姿を消した。

……あれっ？ そういえば前ここに住んでいた人、いつ引越していったんだろう……

+

——トントントン

私が部屋に入つてしばらくするとノックの音がした。

秋葉原洋子だろう。さつき引越し祝いを持ってくると言つていたから。

——カチャリ

私はなんの用心もせず、ドアを開けた。

白いハンカチのようなものが顔に押し付けられ、すつと意識が遠くなる。昨日学校から帰ろうとしたときに見たのと同じ、背広姿の黒いマスクをかぶった男……

真ん丸の月が頭上にある。

あれっ？ 今日十五夜ではなかったはずだ。

その月に、大きな鳥——蛾がたかっている。

……なんだ、電灯か。

ここはどこだろうと、左右を見渡す。

その電灯の光はあたりには届いていないのか、暗い。

起きあがろうとして、気づいた。

私は十字に置かれた机の上に、張り付けにされている。

「な……」

声が漏れる。

「気づいたようだね」

聞き覚えのある声だ。

声の聞こえてきた方向に目を向けるが、姿は見えない。男は続けて言う。

「まったく、私が推理ものが苦手なことは知っているでしょう」

「なんのこと？」

「私が尾行していることに気づいて、ここ何日は事件を起こさなかったようですが、」

言いながら、ここそこそと物音を立てている。

「これですよ」

壁面にスライドが投影される。

どの映像にも首筋に、均等に二つの傷が映っている。

「あの、これは……？」

「もちろん、ヴァン・パイアの仕業です」

「はあ……」

私は間拔けな声を出す。

男——大神先生が何を言っているのかまったく理解できない。

そういえば、一週間ほど前から、職員室で『吸血鬼を滅ぼす方法』とか、『ヴァン・パイア消滅計画』なんて本を読んでいる姿を見かけてはいたが……。

「ヴァン・パイアは、夜行性で、コウモリ・オオカミをしもべとし、日の光を嫌がり、ニンニクを嫌う。不老不死で、力が強く、嗅覚が鋭い。夜行性だから、夜も目が利く。十字架も嫌いだ。そして、黒ずくめの格好をしている。奴等を滅ぼすには、銀の銃弾、聖水に浸した杭、そして朝日だ。なぜなら——」

私は大神先生の話をも自嘲笑味に聞く。

なるほど、大神先生の説からすると私はヴァンパイアである可能性が極めて高い人間だ。金属アレルギーがあり、強い匂いにもアレルギー症状が出る。目は強い光り（日光）に弱く、サングラスをよくかけている。趣味はオオカミのグッズコレクション。不老不死とまではいかないが、実年齢よりは若く見られがち。体育教師をやっているだけあって意外に力もある（でも、見た目よりもという意味だ）。黒が好きなので、黒のトレーニングウェアを着ていることが多い。十字架に対しては、全然興味がないだけなんだが……。

大神先生は、銀の聖性がどうか、朝日の清浄性どうか詳しく説明してくれ、「貴方は、理想的ヴァンパイアだ」

最後にそう締めくくった。

何が理想的なのか、わからないが。

「そして私は、ヴァンパイアを滅ぼした偉大な人間として後世に名が残るでしょう」
ホロボシタニンゲンとしてコウセイにナがノコル……？

「それって、私は殺されると言うことですか？」

「殺すのではなく、滅ぼすのです。悪しきものを滅ぼすのは正しきものの宿命！」

「ちよ、ちよと待つて下さい、私はヴァンパイアじゃありません！」

「悪者はいつもそう言うんです」

言つて、光の中に現れる

手には見覚えのある杭が、滴をしたたらせている。

「……あの、昨日は……」

声が震える。それまではなかった恐怖感が私の中に広がり始める。

「昨日は邪魔が入りましたが、今日は大丈夫。悪は必ず滅びるものです。正義は私の方にあるのですから……」

大神先生は低い笑い声を上げる。

どっちが悪だかわかっているのだろうか。

頭の中では意外に冷静な自分が、大神先生の言葉につっこみを入れる。

「あの、ちよつと……」

言つても無駄だろうという気はするが、話しかけずにはいられない。冤罪で命を落とすなど、考えたくもない。

——ガン

びくつと、大神先生は振り向く。

扉が開いたらしく、冷たい風が部屋に忍び込む。

「誰だ！」

大神先生が外へ向かつて尋ねるが、応答はない。

大神先生は気を落ち着かせると、暗がりへと消える。扉を閉めに行ったのだろう。

——ゴン、……ドサツ

何が起こったのか私には見えない。

暗がりから、一つの人影が近づいてきた。大神先生、ではない。

「先生、昨日あんな目に遭いながら、今日も襲われるなんて無用心なんじゃないですか？」

……この声は、

姿を現したのは秋葉原洋子だった。

「あなた、どうしてここに？」

「先生を見張ってたんです。大神先生、授業中に吸血鬼を滅ぼすなんて言ったり、誰が吸血鬼だと思うかなんてアンケートとったりしてたから」

声が出ない。やっと、

「それで、私が……」

彼女は頷き、

「でも、先生をヴァンパイアだなんて……」

くすくすと笑い始める。

「そうね……」

言つて私も笑う。

ヴァンパイアなんているわけ無いじゃないか。

「これ、解いてくれる？」

私が彼女に話し掛けると、彼女は笑うのを止め、じつと私の顔を見る。

「どうか、したの？」

何だか嫌な予感。

彼女はにやりと笑いつつ、私の肩口に顔を近づけた。

「だって、私がヴァンパイアなのに——」

私の意識は混沌へと……

ヴァンパイア2

美味しい食べ物

「ヴァンパイアは、町内に一人いれば十分。数が多いということは、血を吸われる被害者が増えるということだ。それはヴァンパイアを滅ぼすことに熱心な狂人達に居所がばれやすいということにもなる。だから、十五歳になったら一人暮らしをしない」

父からそう言われたのは確か、ヴァンパイアの血に目覚め始めた——十二・三歳頃だったと思う。その時はただ単純に「一人暮らし」という言葉の響きに嬉しさもあつたのだが……今にして思う。父と母は年若く結婚し、私をもうけたために失つた青春を取り戻したいだけなのではないか……と。今でも二人がいる部屋は熱くつて仕方がないのだ。

ま、そんな諸事情はどうだつていい。一人暮らし、大歓迎だ。でも、やはり住むなら美味しい血を持った人間のいる近くがいい。血の美味しそうな人間を探しだして吸うなんて、昔はともかく現代のような忙しい毎日では、暇がない。

私は自宅から電車で二時間かかる学校で入学以来何人かの美味しそうな血を持つと思われる同級生、先輩の血を吸つてみたのだが……そこそこ美味しい人はいるが、最高級、パーフェクトな血を持つ人物は今の所いない。それに、集団行動をする生徒が多く、なかなか一人行動や私との二人行動をする機会、血を吸う機会がなかった。

血を吸わなくても一応、普通の食事でも生きてはいけるのだが、ヴァンパイアの体

は消化吸収率が良くない。そのため私はよく貧血を起こしていた。

十十十

私の誕生日が一週間後に迫ったある日のこと。

「さて、今日は授業をしない」

生物担任の大神正義は教室へ入ってくるなり、そう断言した。勉強に熱心な学生もいないため、誰も何も言わない。

「いまからアンケート用紙をくばるので、思うことがあれば全て書き出すように」
一番前の席のこに、B四サイズの紙を配っている。

「前後で相談してもかまわないから、なるべく質問事項を埋めるように」

まわってきた紙をみる。いつものように無記名で、「はい・いいえ」のどちらかに丸をつけ、理由を書けというやつだ。質問は全部で一六項目にも及んだ。その内容は……授業をつぶしてまですることだったのだろうか

大神はその時間、『ヴァンパイアを殺せ！』という本を読んでいた。嫌なタイトルの本だ。

翌日から、大神が杉田和泉の後をつけている姿を目撃するようになった。……予想通り。

体育教師でクラス担任の杉田和泉はいつも黒ずくめで、黒いサングラスをかけている。趣味はオオカミグッズコレクション、色白で実年齢よりかなり若く見え、八重歯が大きい。匂いのきついものアレルギー、金属アレルギーがある。昨日のアンケート用紙にも、杉田和泉をヴァンパイアだと思うか、という項目があった。

決して正義感からではないが、ああいう狂人を野放しにしておくわけにはいかない。私は彼女の警護をすることにした。そのおかげで、ますます血を吸う機会がなくなつた……。

放課後。

校門脇で杉田和泉の出てくるのを待つ。彼女がアパートへ帰るのを見届けると私の日課は終わる。今日は、いつもより遅いようだ。

午後七時。あたりはもう暗い。ただ、空に浮かぶ細い月が、冷たい光を投げかけている。

彼女はまだ、出てこない。大神正義もだ。

私は、校舎の中へと足を向ける。嫌な予感がする。

職員室に彼らの姿はない。

部活動を終えた学生が帰ってゆく。

もし大神がヴァンパイアの処刑を行うとしたら、人気のない時間、人気のない場所

で行う可能性が高い。それはどこか……とりあえず、片っ端から部屋を覗いてまわる。

ああ、血が吸いたい。

独特の乾きが体を襲う。あまり動いていないのに、体が重い。時計の針はすでに八時半を指している。私は休憩を取ることにした。はやく血を吸わないといつ貧血で倒れてもおかしくない状態になりつつある。

——ゴ
ン

微かだが、何か音が聞こえた。私は耳を澄ます。

——ゴ
ン
ゴ
ン……ゴ
ン

確かに音がする。学生は皆帰ってしまったはずだから、この音の主は探していた人物である可能性が高い。私はその音の方向に向かった。

その音の主はすぐに見つかった。黒いマスクをかぶった、背広（この背広は今日、大神が着ていたものと同じもの）姿の男が、大きなバケツを抱え歩いている。そのバケツ中には、何かが液体と共に入っているらしく、歩く振動でバケツの側面にぶつかり曇った音を立てている。

彼は私のことなど全く気づいていないようで、楽に後をつけることが出来た。

男は会議室へ入っていった。

杉田和泉はこの中にいるのだろうか。しばらく様子を見ることにした。中からはなにやら読経のような演説が聞こえてくる。

細く、扉を開け中の様子を伺っていると、男が杭を振り上げた。

「この世に害を成す忌まわしき化け物め……」

私は急いで中へ入り、近くにあつたパイプ椅子を男に向かって投げつけ、二脚目を手に取り、一脚目をよけるためかがんだ男の背中目掛けて叩きつけた。

男は「うっ」というようなうめき声をあげ、倒れこんだ。

はあ……疲れた。

「この学校にまともな奴はいないの？」

いまの動作でかなりエネルギーを使ってしまった。くらくらする。血が吸いたい。

杉田和泉は焦点の合わない目でぼんやりと宙に視線をさまよわせている。様子がおかしい。とりあえず彼女の呼吸を確認する。

「よかった」

何か薬でもかがされているのだろうか。ふっと、彼女の白い首筋が目に入る。血が吸いたい。三十路前の女の血など気分的に嫌なのだが、この際我慢しよう。彼女の首筋にヴァンパイアだけが持つ特殊な歯をたてた。

「……美味しい」

思わず声が漏れる。これほどの美味しい血は初めてだ。

もう少し吸いたいが……我慢だ。あまりたくさん飲んで彼女に貧血を起こされては吸いたいときに血が吸えない。

これ以上彼女が襲われないように、意識の無い彼女を抱えあげ、別の部屋へと移し、その日は帰宅した。

十

翌日。私の気分を表したようない天気だった。

前に行くのは杉田和泉だ。

「おはようございます」

「おはよう、今日は気分がいいようね」

彼女はかなりだるそうだ。昨日、血を吸いすぎたかもしれない。

「……はい」

いけない、あの味を思い出して顔がゆるむ。

「あの、私急ぎますから」

駆けるようにその場を去る。彼女を見ているとあの味を思い出して吸いたくなってくる。

+

夕方。杉田和泉はいつも通りアパートへ帰っていく。

大神が彼女に声をかける。彼女はかなり、疲れ切った顔で振り向く。誰が見ても、「今疲れてるんで、話は今度にしてもらえますか」といつているような顔で。

大神はかまわず、話を始める。

彼女に気づかれないよう尾行しているため、二人が何を話しているのか聞こえない。かといって、二人に近づくわけにもいかず……。

彼女のアパート近くまで来る。二人はそこで立ち止まり何か言葉を交わした後、大神は去っていった。

頃合を見計らい、彼女に声を掛けた。

「先生、デートだったんですか？」

彼女は大きく息をつくくと、疲れたように

「違うわよ。それより、あなた何でここに居るの？ 家の方向は違うわよね？」

「越してきたんです。そこに」

小さなアパートを指差す。彼女が住んでいるアパートだ。

「……一人、暮らし？」

「はい、両親が十五歳にもなったんだから一人で暮らせて」

「いいわね……」

彼女はしみじみとそういった。

杉田和泉のあとに続いて階段を上る。

「引越し祝いを後で持っていきますね」

言つて、階段上がつてすぐの部屋へと入る。中にはまだ開けてもいないダンボールが積み重なっているだけ……。引越し祝い、どれに入ってるんだっけ？

十

—— トントントン トントントン

やつと見つけ出した引越し祝いを携え、彼女の部屋のドアをノックをした、が返事がない。ノブに手をかけると、簡単に回った。鍵はかかかっていない。

部屋の中へ入る……誰もいない。

彼女と部屋の前で別れて、三十分も経っていない。後で引越し祝いを持っていくと言ったのだから、彼女が出かけることは無いだろう。だとすれば……私はすぐにその部屋を飛び出した。連れ去られたとしても、まだそれほど遠くまでは行っていないはずだ。

けれど、どこへ……？ 無駄だと思いつながら、

「あの、変わった男の人を見かけませんでしたか？」
アパート前を掃除していたおばさんに尋ねる。

おばさんは頷くと、

「黒いマスクをした男のことかい？」

「え、ええ、そうです。どこへ行ったかご存じですか？」

「ほら、あそこ、」

指さす方向には彼女を背負つて歩く男の姿があつた。

……なんだか、むなしい……。

「有り難うございます」

言つて、駆け出そうとする私の腕を掴み、おばさんはこういつた。

「なんなのいつたい。面白そうね、良かったらおばさんに話してよ」

良かったら、とは言っているが話さなければ放してくれないだろう事はおばさんの目にありありと伺えた。かといつて、本当のこと、私がヴァンパイアだということを話すわけにもいかない。適当に作り話をして、おばさんに解放されたのはそれから二十分後の事だった。

ああ、全く腹が立つ。だいたい大神がヴァンパイアを滅ぼうという気を起こしたのが

いけないのだ。なぜ、善良なヴァンパイアが滅ぼされなければならぬんだ！

ヴァンパイアについての話はいろいろとあるが、あれはほとんど嘘だ。ニンニク、十字架は平気だし、日光を浴びても死ぬことはない。銀の玉、聖水に浸した杭を心臓に打ち込まれればヴァンパイアでなくなつたつて死ぬ。ヴァンパイアとはいえ普通の人間とそうかわりはない。ただ、私達は血をうただけだ。

昔のヴァンパイアは血を吸うために、黒ずくめの格好をして身軽に、夜でも目・耳が利くよう訓練し、昼間は寝ていたという話だが、現代のヴァンパイアは社会的生活を営んでいる以上、そんな怪しい行動はとれない。

獲物として狙う人間は今も昔もそう変わらない。気づかれても抵抗されにくい、女・子供を狙うのは当たり前だが、老人・幼児だと一回に吸える血の量が少ないので狙わない。ヴァンパイアも社会的生活を営んでいる以上、人間を殺すわけにはいかない。まあ、男の血を吸つてもなんの問題もないのだが、生理上、若くて綺麗な女性の血のほうがいい。

私はアパートから二十分ほどの所にある、川岸にいた。

「黒いマスクをかぶった男を見かけませんでしたか？」

と数人に尋ねながら歩いてきたのだが、最後の一人——この川で数十年釣りをしてきたという老人——が、

「ああ、それなら川辺の掘つ立て小屋ん中に入るの見たよ」と教えてくれたからだ。

辺りはもう、最後の名残のように残る、夕日の明かりだけなので暗い。私は川辺に立てられた一軒の掘つ立て小屋を睨み付けた。小屋からはわずかに光が漏れている。間違いなくあそこにいる。

——ガン

扉を思いつきり蹴る。中には相変わらず黒いマスクを被った大神と、十字に組んだ台の上に彼女が縛り付けられている。

「誰だ！」

大神が怒鳴る。中から外の様子は見えないようだ。

私は扉の陰に身を隠し、ここへ来る途中に拾った棒きれを振り上げ、待った。

——ゴン、……ドサツ

大神が小屋から頭を出した所で、棒きれを頭上から思いつきり振り下ろすと、又しても簡単にのびた。

「先生、昨日あんな目に遭いながら、今日も襲われるだなんて不用心なんじゃないで

すか？」

彼女に近寄りながら言葉をかける。彼女の意識は昨日に比べあるらしく、声のする方、こちらへ視線を向ける。

「あなた、どうしてここへ？」

不思議そうな顔をする。

「先生を見張ってたんです。大神先生、授業中に吸血鬼を滅ぼすって言ったり、誰が吸血鬼だと思うかアンケートとったりしてたから」

彼女は大きく目を見開くと、怖々と私の後ろ、大神の倒れている辺りを見た。

「それで、私が……」

「でも、先生をヴァンパイアだなんて……」

「そうね……」

私の笑い声に彼女も笑い始める。しばらくして、彼女は私にこういった。

「これ解いてくれる？」

そう彼女はまだ縛られている。今なら抵抗されずに、あの美味しい血が吸える。

「どうか、したの？」

「だって、私がヴァンパイアなのに」

私は彼女の首筋に歯をたてる。

……美味しい。

ヴァンパイア3

美味なる想い

「ねえ、ヨウちゃん。聞いてる？」

その声が念仏に聞こえはじめた頃、軽くジャブ。このとき適当に返事を返そうものならば、今までの数十分が無駄になる。数度の失敗から学んだ私は、話を聞いていた証拠として長大巨編小説を一行に要約して返す。

「だから、父さんが血を吸ってくれないって言うんでしょ？」

「もう、そんな言い方って無いんじゃない？ これは夫婦の危機なの！もしかしたら別居……最悪の場合……」

と、涙で声を詰まらせる。

「——離婚するかも知れないんでしょ？」

ため息とともに聞くと、

「そんな単純な問題じゃないの！ 父さん殺して、母さんも死ぬから——！」

日曜の真昼間、これから遊びに出ようかなんて計画立ててた人間の身にもなつて

欲しい。

「あのさ、父さんは元気なのよね？ 母さんの血を吸ってないって言うんなら、誰の血を吸ってるの？」

「……ないの」

絞りだした声はあまりに小さく聞こえない。母は自分の哀しみに酔っている気もする。

「何？ 聞こえない」

健康補助食品のゼリーを飲みつつ聞き返す。

ああ、美味しい血が吸いたい。

杉田和泉は三日ほど前から交通事故で入院してしまった。命に別状はないらしいけど、病院に押しかけて……なんてわけにもいかない。

最近は杉田和泉の血ばかり吸っていたから、他の不味い血では満足できない。贅沢に慣れるとこういうとき辛い。

冷蔵庫には健康補助食品のゼリー、クッキー、栄養補助ドリンク。こんなものであると何日過ぎせばいいんだろう。

「ヨウちゃん、話聞いている？」

「えっ聞いているよ、父さんが血を吸ってないって話でしょ？」

「そうよ。父さんね、ほとんど血を吸わないの。ねえどう思う？ ヴァンパイアだって食事をしなけりゃいけないでしょ？」

涙声。

「ねえ、どうして？ どうして父さんは血を吸ってくれないの！？」

絶叫。

私は受話器を耳から離し、母さんがおとなしくなるのを待つ。意味不明な言葉を高音域で発していたが、しばらくしてそれは嗚咽に変わる。

「母さん、人が来たみたいだから切ってもいい？」

嘘を言い、返事も無い間に電話を切つて電話線を根元から抜く。

これで一時間くらい放つとけば、あきらめるだろう。

盛大にため息。

時計を見上げればもう昼。午前中の予定が全部狂ってしまった。

冷蔵庫の健康補助食品と、栄養補助ドリンク数本片手にテレビをつける。午後からの計画を建て直さなきゃ……なんて数分。本当に来客を告げるベルが鳴った。

「はい」

いつもの癖で返事を返す。

ドアスクープを覗けば、見知った男が私と同じように覗き返している。居留守を使いたいところだが、返事を返したものは仕方ない。

ぶつぶつ言いつつも、ドアを開ける。

「何？ 父さん」

「玄関先で親と話をするような娘に育てた覚えはない」

「約束も無いのに人の家に来るような人だったなんて知らなかったわ」

「人の稼いだ金で暮らしている人間にとやかく言われる覚えは無い」
ずかずかと押し入るように部屋に上がりこむ。

母がいないと鉄仮面でもかぶったかのような顔に、堅い態度、厳しい口調。逆にこの父しか知らない人間は、母がそばにいる父を見たとき「嘘だ」「別人だ」なんて声をあげるわけだけれど。

父がテーブル代わりに使ってるユタツにどっかり座り込む。テレビが一番見やすい特等席に。

「で、何？」

「父さんの分の昼食を持ってきて、座れ」

こめかみの辺りが引きつるのを感じたが、言われたとおり冷蔵庫から栄養ドリンクなんかを出して、ユタツの側面にすわる。ここからだテレビを見るのに首を曲げなきゃならないから疲れるんだだけれど。

「で、何なの？」

繰り返す。

「沙世から電話があつただろ？」

栄養ドリンクを片手に言いにくそうに顔。沙世というのが母さんの名前。

「父さんが血を吸ってくれない。離婚するくらいならば、父さん殺して自分も死ぬていつてた。いつも通り」

物騒なことだが、母さんの興奮したときの常套句だから心配する必要性なんてこれっぽっちも無い。

「そのことなんだ」

父は妙に重々しくため息をつく。

「沙世、最近美用補助食品に凝りはじめてな、」

一気に栄養ドリンクを飲み干し、ポツリとつぶやく。

「味が変わったんだ」

ぱちくりと目を瞬く。

「味つて、血の？」

「ああ」

重苦しい声。

人生にかかわる一大事に、私も同じく重い息をつく。

自分の舌に合う血の持ち主なんて、千や万に一人いるかいな。いちいち味見しなければ確かめようがないのだから、出会ったときは『運命の人』って感じた。それなのに、その味が変わるだなんて……。

「だから吸わないの？」

「最初は我慢してたんだ、」

苛立った声。

「だが、とてもじゃないが口にあわん。何とも言えん妙な味だ」

「ふーん」

と、しか言いようが無い。母さんの血つて私の口には合わないのだけれど、父さんにとっては『運命の人』だったようで。

「逃げてきたの？」

この様子じゃ、母さんにそのことが言い出せず、かといって飲まないわけにもいかず、でしばらく過ごしていたんだろう。

父さんは照れた色を一瞬浮かべ、

「俺のために綺麗になると頑張ってる沙世を止めることなんて出来ないだろうが」
結局はそこに行き着くわけか。

「で、どうするの？」

一応たずねてみる。結果は見えてるが。

「母さんにそれとなく言って、美用補助食品をやめさせてくれ」

思ったとおり。思い込みの激しい母さんにどう説明しろというのか。

「父さんが一言『そのままでも十分綺麗だよ』って言ってみたらどうなの？」

「……それはもう言った。『それ以上綺麗になって変な虫がついたらと思うと眠れない』とも言った」

「でも、聞かないのね？」

「ああ」

その状態で私がどう対応すれば良いというのか。

「なにか、ほら、お前も女だから知ってるだろ？ 食品に頼らない美容法を」なるほど。それで私の元に来たわけか。けれど、私もそれほど詳しいわけでもなく

……。

「母さん、なんでそんなものに手を出し始めたの？」

「わからん」

ムスつと座っている姿は怖い。

食事が終わると父は仕事があるとかで、さっさと帰っていった。帰り際に一言「頼む」だけ言い残して。

父さんに「頼む」とまでいわれて、放つとくわけにもいかない。

「まずは『バズルのピースをそろえなきゃ』、か」

最近読んだ推理小説の台詞をつぶやき、立ち上がる。まずは母さんに話を聞く……ために帰るしかないか。

電車で二時間掛けて、家に帰る。去年まではこれで通学してたんだから、まったく嫌になる。

「ただいま〜」

何も変わらない家のドアを開けると、

「あら、お帰り」

普段通りの母の姿。四時間ほど前に泣き叫んでいた人物と同一人物とは思えない。

「今日パートないの?」

居間にあがる。コタツの上にはつけっぱなしのテレビと、食べかけのエクレアと紅茶。

「今日はお休みなの」

私の分の紅茶を入れてくれる。

「父さんに聞いたんだけど、」

「何?」

相変わらず、父さんの話題には敏感に反応する。

「母さん、美容に凝ってるんだって?」

「ええ」

エクレアを再び食べ始める。美容とお菓子って矛盾してる気がするんだけど。

「それで翼さんなんて?」

翼つてのが父の名前。そんな爽やかな名前、普段の鉄火面には似合わないのだけれど、母さんといるときはそれっぽいのだから不思議だ。

「ここはざぱりと言ったほうが良いだろう。後で父さんに怒られるかもしれないけれど、時間を掛けられるほど私も暇じゃない。

「——母さんの味が変わったって」

「……味?」

不審そうな顔をし、

「ああ、血のこと？」

私は頷き、紅茶を飲む。

「どうして美容に凝り始めたの？前はぜんぜん興味なかったじゃない？」

母さんは化粧をしないタイプの人間で、年齢より十歳くらいは若く見られるような容姿の年齢不詳系だ。父と一緒にいると、親子か兄妹かだなんていわれてる。

その上、服装もシンプルなものが好きで、ジーパンにシャツなんて学生によくいるような格好。そんなものだから、美容には縁など無い人だと思っていたのに。

「母さんもね、若くは無いの」

ポツリと哀しそうにつぶやくが、どう見たって四十二歳には見えないんだから、そんなに悲観する必要はないんじゃないかと思うんだけど。

「この間、写真の整理したら昔の写真が出てきたの」

近くの棚から、一枚の写真を取り出す。

入学式らしき集合写真で、若き日の父と母が写されている。

「これが何？」

「ほら、ここ見て」

父さんを指差す。写真嫌いの父さんらしい緊張した面持ちで、カメラから目をそらしている。

「これがどうしたの？」

「翼さんの目線の先よ！」

ヒステリックな声。

言われて見れば、その先にいるのはロングの髪のきれいな女性。二十数年も経つてから嫉妬してるのか。

「偶然だと思っただけ？」

「この間見たの」

「見たって……この人？」

父さんの目線の先の女性を指差す。

「そうよ。その人が翼さんと一緒にいたの！」

数週間前のこと。

ご近所の山本さんに誘われて、電車で五駅先のデパ地下に評判の鯛焼きを買いに出かけたの。数日前にテレビで紹介されたとかで、そりやもう唾然とするしかない長い列。

山本さんは嬉々として並んだのだけれど、私はダメ。その列を見てげっそりしちゃったの。山本さんには用があるのを思い出したって言って、そのままそこで分かれ

たの。

でも、せつかく来たことだし一人でウィンドウショッピングをすることにしたのよ。洋服とか、靴とか、バッグとかいろんなものを見てね、宝石屋さんに足を向けたときだったの。

後姿がちらりと見えたただけだけど、それが翼さんだつてわかったの。声を掛けようとして、すぐに柱の影に身を隠したの。

どうしてつて、女よ。意味深な笑顔の女がね、翼さんの隣に仲良く一緒にいたのよ。私は翼さんが女と一緒にいたくらいで疑うような馬鹿じゃないわ。でもね、一人が見ていたのは、ヘアリングのコーナーで、二人は嬉しそうにヘアリングを選んでいたの。

その女、どこかで見たことのある女だと思つてね、帰つてからアルバムを探してみた。この写真が出てきたの。ショックだったけれど、だけど私は翼さんを信じていたわ。

数日後。

図書館に行きがけにね、翼さんを見かけたの。どこに行くんだろうつて後を付けたら、あの女と市役所で待ち合わせていたの。二人は談笑しながら市役所に入っていくから、私は不安になったの。

でも、私も市役所に入つたらばれるかもしれないでしょ？ だから、じつと外で待つてたの。

そしたら二人、離婚届の用紙を持って笑いながら出てきたのよ。そして、翼さん、

「これですべてうまくいくんだな
って言ったのよ。」

話の脈略は前後しながらも、三十分後、母さんの息が上がってくるとようやく静かになる。

「勘違いじゃないの？」

「……だって、見たのよ」

「父さんが浮気するなんて、天地がひっくり返ったって考えられないんだけど」

「だって………見たの」

「勘違いだって」

「でもね、あの頃付き合ってるって噂があつたの」

二十数年以上前の話。

「父さん、きっと私の血が目当てで結婚したのよ！」

「それは無いって」

なんて私の言葉は聞こえてない様子。確かに自分の好みの血を持つ人は『運命の人』に出会うような感動はあるけれど、結婚する・しないは別の問題。体調によって味は変わるから同じ人の血を吸い続けるなんてこともない。だから父さんはどう考

えても母さんを好きになつて結婚したとしか思えない。

「ただいま〜」

玄関から声が出て、母さんはぴたりと動きを止めた。写真を目にも留まらぬ速さで隠し、パハツと顔をぬぐつて、

「おかえりなさい」

甘い声で迎えに出てゆく。相変わらぬ様子。これを二十年近くやつてる二人に『夫婦の危機』なんて無いと思うのだけれど。

「やつと大きな仕事一つ、片付いたよ」

「ご苦労様」

なんて会話を交わしつつ居間に入ってくる。

「陽子、帰つてたのか？」

午前中の父とはまるで別人。にこにここと笑みを浮かべ、口調も柔らかい。

「お帰り」

父さんは私に目配せし、私は小さく首を振る。

「……沙世、今日は陽子も帰ってきていることだし、久々に寿司でも食べに行こうか？」

一瞬、母さんの動きが止まる。

私がヴァンパイアの血に目覚める前までは家族でお寿司屋さんにも行っていたけれ

ど、ここ数年はまったく外食なんてしていない。

父さんを見やると失敗したか、という顔。だが、

「まあ、良いわね。そうしましょう」

母さんは明るい顔で振り向く。その表情が、なぜか怖かった。

数年ぶりの近所の寿司屋、カウンター席。

不信に思われてはいけないので、食べてもあまり美味しいと感じない寿司を胃に放り込むも、気づけばお茶ばかりになってしまう。きちんと食べているのは母さんばかり。

何でこんなことになってるんだらう。

「お腹いっぱいになっちゃった。おあいそ、お願いします」

母さんの言葉で呪縛が解けたように、私と父さんは席を立ち、お金を払って外に出る。

家までは歩いて数分なのだけれど、

「月も綺麗だし、遠回りして帰らないか？」

父さんが言う。気を利かせて先に帰ろうかとも思ったが、二人に止められ、とぼとぼ二人の後をつけるように歩く。

「沙世、お前に言わなきゃならないことがある」

父さんが切り出す。

「これで、終わりなの？」

母さんがこわばった顔で尋ね返す。言われた意味が理解できなかったのは私だけじゃなく、

「終わり？」

父さんが疑問符だらけの顔で尋ね返す。

「離婚なんてしないから！」

いえ、絶対に母さんの勘違いだと思うけど。

父さんは狐につままれた顔で、

「何言いだすんだ？」

「翼さん、あの女と一緒になるんでしょ！？　そのために私とヨウちゃんを捨てるのね！」

「あの女つて誰のことだ？　俺は——」

「いいえ、言い訳なんて聞きたくないわ！」

母さんは泣き崩れる。

そばから見ている限り、母さん一人が暴走している風にしか見えなただけれど。

父さんは弱りきった様子で、

「あの女つて誰のことだ？」

「髪の長い、綺麗な女性。父さんと母さんの同級生みたい」

写真で見た女性の特長を並べる。

「母さん、最近父さんがその人と会ったのを見たって」

「……斉藤さんのことか？　だが、なんで離婚だなんて話になるんだ？」

「一緒にジュエリーショップにいたじゃない！　その後一緒に市役所から出てくるのも私を見たんだから！」

泣いていた母さんが怒鳴りあげる。

「二人して笑いながら離婚届持ってたでしょ？　私、見たんだから！」

「動かぬ証拠を握ってるって。どう説明するの？」

母さんの見間違っていることは無かったようで、父さんは慌てながら、

「いや、あれはだな……」

しどろもどろで説明を始めた。

先月の初め。

仕事の話でジュエリーショップを営んでいる斉藤さんを伺ってみれば、対応に出てきたのは斉藤さんの奥さんだった。どこかで見たことがある人だなあと思っていたら、その奥さんに、

「覚えてませんか？ 旧姓・高村なんですけど」

「高村？」

「もう、翼つて沙世以外は本当に眼中に無かったんだから」

「いや……ああ、思い出しました」

「本当に？」

念押しされて、思い出せなかったが領いた。

仕事の話は一進一退の状態で、なかなか前に進まなかった。彼女は知り合いだからと甘い顔をするタイプではなく、何度も出かけて話し合いを繰り返していた。

ある日、

「交換条件、呑んでくれない？」

「何ですか？」

「呑んでくれたら契約してあげるし、もう一件紹介してあげる」

「……何なんですか？ 変なことじゃ無いですよね？」

「ものすごく簡単な事よ。離婚届取りに行くのに付いて来て欲しいの」

断ろうかとも思ったんだが、交換条件としては悪くない。むしろ、美味しい話だった。思案していたら、斉藤さんの奥さんが、

「悩まなくてもいいのよ。用紙が必要なのは私じゃなくて旦那の妹夫婦なの。妹の旦那の浮気癖が治らないから、脅しに使うんですって。自分で取りに行くのはなんだか

らって、頼まれたのよ」

言われて、なんとなく彼女のことを思い出した。おせっかいな女がいたことを。悪くない話だから了承すると、彼女は本領発揮し、

「奥さんに、これ、プレゼントにどう？」

ジュエリーのセールスが始まった。

数日後。

仕事の隙間を縫って、斉藤の奥さんと合流し市役所に離婚届を取りに行った。

「これ、契約書と紹介状」

「ありがとう」

「いえいえ、こちらこそ有難かったわ。自分の分じゃなくても、こんなもの手にする日が来るなんて思っても見なかったから」

「これですべてうまくいくんだな」

「ええ」

筋は通ってる。

「嘘！」

「本当だ。斉藤さんに聞いてみるか？」

携帯を取り出す。

父さんはどこかに電話して、何度も誤りながら理由説明した後に母さんに電話機を渡す。電話機の向こうから漏れてくる声からずいぶん賑やか、というか大阪のおばちゃんのような女性だということがわかる。

母さんは背水の陣つてな顔で、恐ろしいほどの冷たい声で相手に問いかける。だが、笑い声交じりの相手の声に押されてか、だんだん声は小さくなり、最後は、

「……そうだったの」

やつと納得言った様子。

十数分余計にしやべつて、やつと携帯をきる。

「ごめんなさい。私が勘違いしてたのね」

母さんは晴れやかな顔で父さんに笑いかける。

べたべたに甘々の普段通りの二人だ。

「帰りましようか」

二人から離れた場所ではおつと川面を見ていた私に母さんが声を掛ける。私が一緒だって事、今回は覚えていてくれたらしい。この二人、時々私の存在を忘れ去ることがある。

「ところで話って何だったの？」

不意に思い出した様子の母さん。父さんは言いよどみつつも、覚悟を決めた様子で母さんに向き直り、

「美容補助食品、食べるのやめてくれないか？」

「……………」

「味が…………変なんだ」

「…………私、美容補助食品ってかなり前にやめてるわよ」

父さんも私も言われた意味を理解するのになちよつと時間がかかった。

「あなたがやめてくれって言うから」

軽く肩をすくめて見せる。

「でも、味が…………」

父さんは気が抜けたような声で母さんの肩口に顔を寄せる。

「——美味しい」

もうちよつと吸いたそうに父さん、母さんの肩口を見つめていたけれど、やっとのことで視線をはずし、

「…………帰ろう…………」

母さんの手を引いて歩き出す。こんなところで母さんが貧血起こしちゃ大変なわけだし。

「でも、どうして味が変わってたんだろ？」

私のつぶやきに父さんは苦笑するような声で、

「母さんが……嫉妬してたからだろう」

「まあ、あなたが悪いのよ」

「すまん」

おーい、お二人さん。娘の目があるんですけど。

翌日、実家から帰ってくると杉田和泉も病院から退院して戻ってきたところだった。やっとなの血を吸える。

夜中、彼女が寝込んだことを確認し、勝手に作った合鍵で部屋に忍び込む。眠る杉田和泉の肩口に一口、口を付けて思わず吐き出す。

「何、この味は……」

表現のしよりの無い奇妙な味。骨折で入院していたのだから、おかゆのような栄養価の無いものを食べていたとも思えない。

ふと、目に留まったのはベッド脇に設置されたフォトフレーム。ついこの間まで無かったものだ。シルバーのシンプルなフレームの中で、穏やかに笑う男性の顔。

「好きな人が出来たのか。こつてこただなあ」

ため息ひとつついて私は彼女から離れる。また、美味しい血を持つ人間を探さな

299 夕暮空の色

きやならないのか。

ああ、美味しい血が吸いたい。

作品介绍

■「ヴァイス」異世界。魔法。

記憶のないまま放浪するヴァイスと、追う女。一番最初に書いた作品なので、視点変更が突然すぎてストーリーがわかりにくいかも。

■「駆け落ち」現代。恋愛。

結婚式前に駆けそれそれぞれ落ちしてしまった新郎新婦。その妹と友人の物語。最初に入っているのがリエの回想、ラストはヤスヒサの回想。

■「おさななしみ」現代。恋愛。

偏屈な花嫁と幼馴染の新郎。

■「天使の卵」現代ファンタジー。

幸せになれるといわれる天使の卵。カスミがそれを見つけてしまったのはこれで四回目――。

■「弁当」現代。

上司の妻と弁当と飲み会。

■「私の魔法」現代ファンタジー。

突然、町に現れた天使。突然、魔法が使えるようになった人々。

■「金魚」現代。青春。

夏祭りとおさななしみと金魚。

■「スノーホワイト」現代ファンタジー。コミカル。

冬がきた。楽しくて賑やかな冬がやってきた。ドタバタの初雪の模様。

■「魔女の鍵」異世界。恋愛。

いにしえの魔女ニナ・ルツツと、女好きの王と、記憶の鍵。

■「指輪」現代

はずれない指輪と同僚。

■「月夜の晩に」現代ファンタジー

待ちぼうけの彼女と魔法シヨップのおばあさん。

■「ヴァンパイア」現代ファンタジー

ヴァンパイアに疑われた女性視点。

■「美味しい食べ物」現代ファンタジー

「ヴァンパイア」で登場していたヴァンパイア視点。

■「美味なる想い」

「ヴァンパイア」のその後。両親の喧嘩と、味。

『 夕暮空の色 』

夏樹夕 (C)Yuu Nastuki

2011 年 7 月 15 日発行

空色惑星

<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

